

(一) 死脈が搏つ 死ぬべき時が来たのか。
 (二) 理を持つ女 共 道理のあることをいふ女房。
 (三) 胸は据つたり 覺悟は既にきめてゐる。
 (四) 曲もなし 愛想もない。
 (五) 世に味氣なき 世の中にこれほど張合ひのなき。
 (六) 定かいの まことか。ほんとうか。
 (七) 絞り泣き あたりで聞えぬやうに泣くこと。

に有つたれ共、兎角二人に死脈が搏つ。何處も彼處も一時に、汐の満いて来る如く、ばらばらと首尾悪く、素より理を持つ女共、理窟を詰めて恨み泣き。いかな張良樊噲でも、道理に向ふ矢先は無。銀も渡す。其場にて、見すく嘘の空誓文。迎も遁れぬ此の罰。佛神を待たず共、此方から當つて埒明けんと、道から胸は据つたり。死に直しは二度ならぬ。歎ち顔は曲もなし。手に手を取つて莞爾と、死ね死なうと云ふてたも』と、炬燵に顔を打ち投げて世に味氣なき涙の體。『ナウさう思ふてが定かいの』。『思ふが不思議か夫婦ぢやもの』。『真に左様ぢや辱い。嬉しう御座る』と抱き合ひ、聲を立てずの絞り泣き、炭火も消えて凍るらん。奥へ斯くとや聞えけん兄の聲にて、『何んと徳兵衛痛みは

(一) 病巻けて 病氣で精神知覺が十分に明瞭でないこと。
 (二) 空耳 きーちがひ。
 (三) うたてさ なまけなさ。
 (四) 火斗 じふのう。
 (五) 平に どうか。何卒。

能いか』と、ごつごつと咳て来る音す。『やれ隠れよ』と狼狽へて、房を炬燵に押入れ、蒲團被せて徳兵衛は、上に凭れ覆になり、顔もきよろく成りにけり。程なく主立出で、『物言ふ聲の聞こえたは、誰で有った』と不審顔。『いや夫は私寢言がな申したか。但しお前が病巻けて、空耳でがな御座りましよ。返つてお寝みなされ』と、言へば、『イヤいから夜が寝憎ひ。咄しさいた西國の、物語して聞かせう』と、炬燵にあたるらたてさよ。『ヤア炬燵の火が薄い。コレ女房共、火を赫と起いて、火斗に二三杯持ッておぢや』と呼ばれば、徳兵衛恟として『申し。火の強いはお毒。御無用に遊ばせ』。『いやく裾が冷える。膝節の焦る程なが此方は好い』と云ひければ、『平に夫れは火の用心と

(一) 強請ける
れだる。
(二) 北脇邊の好
い衆 大阪船場
の北濱あたりの
金持分限者。
(三) 氣の通らぬ
氣がきつぬ。
(四) お笑止 お
氣の毒。
(五) 火炙 徳川
時代の刑罰の一
つ。罪人を柱に
しばりつけ周囲
からこれを焼殺
すこと。放火の
犯人に科した刑
罰。

申し、膝の皿に火が付いたらば御身體の妨げ」と、云へ共兄は懲しめと
思ひ、意地悪う、「火を早う持ておちや」とぞ強請ける。「ア、申し。お
前は病氣で引籠つて、世間を御存じ御座らぬ。此の冬から何方も、火
の強い炬燵廢りもの。北脇邊の好い衆は、大方炬燵に水を入れるげに
御座る。重井筒とも云はる、身が、氣の通らぬ。炬燵に火を入れなん
どとは、去りとてはお笑止な。アレお母様、火は入らぬと仰しやる、」
と、身を藻掻く其の間に火斗は焦る、紅葉葉を、盛つたる如き池田
炭、遠慮もないざが炬燵に移し、「サア温らんせ」と言ひ捨て、臺所
にぞ出でらる。傍で見るとさへ徳兵衛、身も焦げ渡る心地にて、「兄者
人其火で熱うは御座らぬか。寧ろの事に火炙りに、成らしやれぬか。」

(一) いは木を云
云 人にはなさ
けがあるとの意。
(二) 咸陽宮 支
那の秦の世に於
ける始皇帝が建
てたる宮殿。
(三) 片息 呼吸
の苦しき状。
(四) 性根 心。
精神。

爰迄火氣が來まする。鳥渡埋けて消しませう」と、寄らんとすれば、
『其儘置きや』と、止められては炬燵より、胸を焦すは徳兵衛。房は涙
の埋火に、焼付けらる、身の苦しき。蒲團の蔭より手を出し、裾に取
付き、堪へんとするに堪へ難き、地獄も斯くやと不憚なり。主も一旦
懲しめの、左のみは哀れと思ふにや、「ア、暖まった、もう歸る。其方
も寝みや」と立ち歸る。徳兵衛兄ながら恨めしくや思ひけん。「迎も
の事に眞黒に焦る迄温つてお歸りなされかし」と、云へ共流石一言
も、いは木を別けぬ人心。奥の一間に入りけり。徳兵衛は小腹立、
櫓も蒲團も一つに擱んで、取つて投ぐれば咸陽宮の煙の中に、顔も手
足も紅の、房は目計りじろくと、物をも言はず片息の、性根も亂

(一) のめく、
 恥を知らずに平
 氣にとの意。
 (二) 日親様の御
 門 生玉にある
 正法寺のこと其
 所には日親堂が
 ある。
 (三) 題目 日蓮
 宗で南無妙法蓮
 華經の七字の稱。
 (四) 淨土 淨土
 宗。僧源空が開
 いた佛教の一派。
 (五) 法華 日蓮
 宗。僧日蓮が開
 いた佛教の一派。

る、計なり。漸に抱き上げ、袂に煽ぎ身を冷し、花生の水幸ひと、
 顔に灑ぎ口濕し、少し心も爽げり。『サア兄貴迄が知られたり。何に面
 目にのめくと、人に面を守られん。いざ此所で尋常に』と、脇差取
 らんとせし所を、『左様さへ覺悟極まれば嬉しい』。去りながら、爰
 で中々思ふ様によも成るまい。屋根傳ひに裏へ抜け、樽屋町の門へ降
 り、宗門なれば日親様の、御門で死なせて下さんせ。『オ、尤』。
 有難い志。サアおぢや』と立ちけるが、『ヤア和女は法華、我は淨土。
 願ふ所が別なれば先の行き端も覺束なし。宗旨を換て一所に行かん。
 今題目を授けてたも。とく』と手を合はすれば、房は不覺の涙に
 暮れ、『私に淨土に成れ共言はず、法華に成つて下んする。扱も嬉しい』

(一) 鷺の峰 釋
 尊が佛教を説き
 し印度の靈鷲山
 のこと。
 (二) 三途の河
 佛教の語にて冥
 途の入口にあり
 といふ河の名。

心やな。勿體ない事なれど、今迄毎日千遍宛、五年唱へた題目の、功
 徳で赦したび給へ』と、互に合掌心を静め、『今身より佛身に至る迄、
 能く保ち奉る。南無妙法蓮華經。今身より佛身に到る迄、添はせ給
 へ、添はせてたべ』。南無妙法の力を頼みに、確かと負ふて登る二階や
 屋根の棟。鷺の峯ぞと一と筋に、這ふつ辿りつ傳ひ行く。道は三途
 のかはら葺。霜の劔の山牙えて、爰に地獄の鬼瓦。左手も右手も恐ろ
 しく、遁れくして行く末は、今ぞ冥途の門出でと、是を限りの立酒
 や。樽屋町にぞ迷ひ行く。

下之卷

道行血汐の臙染

(一) 空穂船 獨木舟。大木の幹を炙ぐつた舟。
 (二) 牡蠣船 毎年冬になると廣島から牡蠣を運んで来て道頓堀に碇泊する船。
 (三) 色駕籠 遊女の乗る駕籠。
 (四) 竹田 道頓堀辨天座のこと。

筒井筒、井筒の水は濁らねど、今は涙に掻き濁す、月も袂に掻き曇る。朝の雲、夕の霜、仇しが浦の空穂船。身を無きものと知りながら、愛し憎しの戯れも、暫時此岸彼岸の、假の現の假橋や。藻に埋もる、牡蠣船の、苦の隙間の燈火の、風を待つ間の影よりも、明日迄待たぬ我が命、我れと失ひ雨親の育てし御恩は如何せんと、歩みもやらず泣き居たり。送り迎ひの色駕籠も、暫時途絶えは何處にも、臙染くゝの寝入ばな、我が身は今宵散り果つる、名残盡きせぬ濱側の、爰は竹田

(一) 片岡 いづ
 (二) 染川 れも
 (三) 篠塚 當時の大阪劇壇に人氣のあつた俳優の姓。
 (四) 飛騨掾 手品人形の名人にて姓は山本。

か夜は何時ぞ、五つ六つ四つ千日寺の、鐘も八つか七つの芝居。二人が噂世話狂言の、仕組の種と成るならば、我を紺屋のかた岡に、何とか思ひそめ川は、臺詞に泣いて呉れよかし。包む袂のひだの椽。二つ遣ひの手品にも、斯かる風姿摸す共、此思ひをばよも知らじ。去年のお島の心中の、其の井筒屋に我れが今、重ね井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎。憂ひ臺詞のあやめ草、露の音しも御身と我、積る涙の雫かや。西に嵐の吹き晴れて、空は冴えても我々は、戀慕の闇の暗がり、由なき事を仕出して、東都の果に名を流す、夫に劣らぬ歎きぞと、いとど思ひにくれ竹の、節を習ひし淨瑠璃も、他の事よと慰みしが、今身の上へ降る霜の、一ト足づゝに消え失せて、死に、行く身

(一) 鰐口 佛殿の簷などにかける銅製の器具。
 (二) 三界 慾界と色界と無色界をいふ。又過去現在未來のこと。
 (三) 五逆 五つ
 の重き罪即ち君を殺すこと。父を殺すこと、母を殺すこと、祖父を殺すこと、祖母を殺すこと、をいふ。
 (四) 煩惱菩提 煩惱は情欲に依つての迷ひをいひ菩提は其の迷ひを悟ることをいふ。

の味氣なや。アレ見返れば人聲の、我を尋ねてかう津の町を急ぎ遁る鰐口や。頼みを懸けし御經の、此三界の衆生は、皆是れ我子と聞く時は、親諸共に到るなりけり。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。五逆の提婆は天王如來。龍女も成佛する時は、煩惱菩提となるぞ頼母し。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を、唯此七字に治まりし、大曼陀羅や斑雪、雨にも風にも詣て來て、朝は現世夕は後世、此世彼の世の二面、今宵一つにならの葉の、影は浮世の塵芥。共に命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所。身を捨つる藪となりけり、涙に迷ふ其中にも、男は流石男にて、『なう世間を聞けば、女先立ち、男は跡に死に損ひ、見苦しき

(一) 無念の上の死恥 残念な上に死後の恥辱。
 (二) 石の鳥居 高津神社の事であらうか。
 (三) 小橋 高津より二三町東に當る一帶の土地の總稱。

沙汰に逢ふ。無念の上の死恥ぞや。先づ我れから』と脇差を、抜かんとすれば抱き付き、『なう待ッて下さんせ。今死ぬる身と云ひながら、大事の夫が目の前で、朱に染つた體を見れば氣も狼狽へ目も眩れて、如何してか死なれうぞ。半死して恥晒し、貴方様の死骸の帯解き、紐解き、打ち返し、詮議の有るをじろ、いと、そもや見て居られうか。私から先きに』と手を持ち添へ、我身に差し當て忍び泣き。男は力なみだに迷ひ、亦物持つ手も弱々と、女の膝に伏し轉び、覆ひ重なり泣き居たり。石の鳥居の彼方より、女の泣く聲子の泣く聲。南無三寶我家の提灯、女房子供家來共、見付けられては情なし。小橋の方で死ぬまいか』と、立ち上らんとせし所へ、早や道傍まで尋ね來て、間は僅か半

(一) 因果の隔て 誠にミジメな事て半町ほどの隔てが百里ほどの隔てになつたとの意。
 (二) 千賀の鹽竈 和歌に名高き陸前の名所即ち鹽竈の浦。
 (三) 位牌に向ふて云々 先祖代の位牌が又はお房と徳兵衛の位牌が其の意義不明。
 (四) 下人 下男。
 (五) 一興 思ひがけない事をする意。

町に、足るや足らずも因果の隔て、百里も同じ如くにて、近き甲斐なき千賀の鹽竈、身を焦すこそ憐なれ。妻のお辰は宵よりの、涙と霜に袖凍り、物言ふ力も無き中に、『アレ〜夜明けも近付くか。鳥がいかう啼くわいの、外の駈落ち走り者と違ふて、明日尋ねうとは言はれぬ。死に、出た心中なれば、疾くに命はもう無い人。浅ましや悲しやな。女房子の無い人ならば、殺すまい死ぬまいものと、嘸や最後の悔み言。お房が恨みも思ひ遣る。思へば我が有る故に、人二人殺すよな。位牌に向ふて言譯ない。冥途の旅を連れ立たん』と、下人が差いたる脇差に、取り付く所を振ぎ放し、『是れは一興。此子は愛しう御座らぬか』と、止むれば小市郎『嬢様死んで下さるな』と、歎く聲さへ身に沁み

(一) 霜風 置き渡した霜の上を吹いて来た風。
 (二) 猶豫ふて 時を空費して。
 (三) 一つ蓮華 極樂で同じ蓮の上を生れたいとの意。一蓮托生。
 (四) 訝 やまひこ。反響。
 (五) 生玉 高津より南方一帯の總稱。
 (六) 埋れ井戸 草叢の中にある井戸。

て野邊の霜風小夜嵐。丁稚の三太もうろ〜涙。『心中と云ふものは、いかに寒いものぢや』とて、共に袖をぞ絞りける。徳兵衛嘯きて、『月は傾く。東は白む。猶豫ふて今の間に、見付けられんは浅まし、いざ何事も宵より云ふた通りぞや』。『おう』と頷く計りにて、涙に物を云はせつゝ、夫の膝を確かと押へ、仰向き待つたる口の内、南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華を一つ蓮華にと、ぐつと突き抜く一刀、わつと叫びし一聲の、哀れ果敢なき最期なり。『今のは何處ぢや。サア知れた』。『其處か此處か』。『いや〜南に聞こえた』と、訝の響きは氣も付かず、皆生玉へと走りける。見付けられじと徳兵衛畑の中を西東、爰に屈み彼處に忍び。今は嬉し、一所にと、房の死骸を尋ね寄る、道も心も埋

れ井戸。踏み外してがッぱと落ち、水のあはれや汲み上げて、重ね井筒の心中と、御法の水をぞ湛へける。

〔總評〕この『心中重井筒』の世評は、前年大當りを取つた『曾根崎心中』に及ばなかつたのであるが、元來世評といふものはアテにならぬもので、これを『曾根崎心中』に比べて、決して劣つた作でない。否、たしかに『曾根崎心中』を凌駕したる佳作で、眞に傑作の中に數へらるべきものである。十二月十五日の午後から十六日の曉方にかけての短時間に、事件の推移を寸分のタルミなく、しかも些の無理な趣向を用ゐず、自然に展開させて、遂に情死の已むを得ざる結末に至らしめた巧妙さは、實に水も洩らさぬ手際といふべしである。徳兵衛の人物、お房の性格、眞實なお辰、それに隠居の宗徳、丁稚の三太、いづれも個々に躍動してゐるのは、流石に此の作者の靈筆と首肯されるのである。結末に法華の題目を用ゐて刃を揮はしめたのも思ひつきであつた。

同じ作者の筆に成つた『淀鯉出世瀧徳』下の巻に『……此夏此所の芝居へ竹本の弟子が下つて、重井筒をかたつた。サア是から夕霧代つて重井筒炬燵の段。北濱邊のよい衆は炬燵に水を入れます。紙子一枚の我等、とてもものに火炙になりた……』といふ一節があるのを見ると、作者自身も、或は此の『心中重井筒』を會心の作と許してゐたのであらうとも推測される。

心中重井筒終

「中橋」に就て

『心中重井筒』の中の巻冒頭に『月は早や渡り初して中橋や』とあるが、現在、大阪の道頓堀川に「中橋」といふ橋がなくて、長堀川に「中橋」といふ名の橋が架つてゐる。

濱松歌國の著『今古参考南水漫遊』の初編一の巻に『…延寶六年午初冬出版大阪道をしへといふ小冊に、道頓堀橋の分、大和橋なかばしこれや日本橋南の側ぞ芝居なりけり…右の歌を見れば、大和橋と日本橋との間に中橋といふ橋ありて今の相合橋なし』と書かれてある。どの邊にか、つてゐたかは明確に指定しがたいのは残念である。



傾城反魂香解題

「傾城反魂香」は寶永二年八月十五日を初日に興行されたもので、我が近松巢林子が五十三歳の時の作である。

この作に登場する主要人物には、狩野四郎元信（本邦畫家の三傑の一人、日本の畫壇に狩野の流派を大成したる人）があり、土佐將監光信（狩野元信と時を同じうし、共に本邦畫家三傑の中に數へられた有名なる土佐派の畫人）があり、土佐法眼光起（元信や光信が歿後百有餘年の時代に當り、土佐派の代表者として盛名一世に高く、狩野家の天才として非凡の妙手と稱せられた狩野探幽守信と時を同じうした人）がある。その他、名古屋山三（出雲お國と共に歌舞伎の創立者として名高き人）といひ、雅樂之助（姓は狩野、名を之信といふ。四郎元信の弟）といひ、雲谷（雪舟の畫風を傳へ、別に雲谷派を創め

た人——といひ、時代に多少の前後相違するところはあつても、いづれも正史に現存せる人々を拉し來つて、巧にこれを同時代の人の如く取扱ふたところに作者の苦心の存せることが認められるのである。殊に場面の變化に富み、趣向の妙を極め、人情の微を穿つのみか、その文章は情理兼ね到つて、巢林子の作中にも特に傑出したものと評することが出来る。世には巢林子の時代物中『國性爺合戦』『曾我會磐山』『雪女五枚羽子板』を以て三大傑作とする説はあるが、この三大傑作に比べて、さして遜色がない、否、勝るとも劣ることのないのは此の『傾城反魂香』である。

寶曆七年に刊行された一樂子の『外題年鑑』を見るに、この『傾城反魂香』を原作として筆を加へた所謂改作物に『今様傾城反魂香』と『名筆傾城鑑』とがある。『今様傾城反魂香』の方は、享保十七年五月七日を初日に、豊竹座で興行されたもので、これは原作の上の巻の冒頭に四郎二郎元信と、長谷部雲谷とが、武隈の松の下繪を提出し、それを領主六角頼賢が批判して、元信の勝利に歸し、元信は武隈の松を寫し來れとの命令を受けて旅に出る一節が添へられてあ

る代りに、下の巻は全然略したもので、つまり原作の十之巻と中之巻とに冒頭の一節を加へ、それを五段に分つてゐる。この改作が歓迎されたか否かは傳はらぬが、上場の年月は、巢林子の歿後八年目で、原作の上場後二十八年目に當つてゐる。

また『名筆傾城鑑』の方の作者は吉田冠子、三好松洛で、寶曆二年三月二十三日——即ち原作の上場後四十八年目、巢林子の歿後二十八年目——を初日に竹本座で興行されたもので、この改作は、所々に筆加減がされて、吃又平の段にも、又平の描いた繪像が石の裏面まで抜けたについて、土佐の苗字を許され、大頭の舞を舞ふて、銀杏の前を取返しに行かうとする時、將監が立上つて、繪像を描いた手水鉢を二つに切り、舌は固心の臟、今石面の繪を切つて、心の臟を立割つたれば吃ることあるまじといふ。又平驚き喜びて、舌を廻すに少しも吃らぬ。などの節がある。舞庭篁村翁が『この改作は、作者吉田冠子が人形の働かせ榮のあるやうに斯う改めたのであらう。そして此の改作が永く行はれずに、淨瑠璃にも、芝居にも、今に原作の通りであるのは悦ぶべきことである』といはれてゐるは、眞に當を得た評言である。

この『傾城反魂香』上の巻の中に「……關寺が高観音へ御供して……」との文字がある。この高観音の三字は、巢林子が高観音の近松寺に深い因縁があるとの説を裏書すべき一つの根據となり得るかも知れぬ。左に此の作の梗概を語らう。

* * * * *

足利將軍義澄の文龜年間のことである。

うら、かな春の一日。越前國敦賀の町近く來か、つたは狩野四郎二郎元信と、その門下の雅樂之助である。

二人は江州高島の領主佐々木源氏の嫡流六角左京大夫頼賢から奥州武隈の松を寫してこよといはれ、旅には出たが、むかし能因法師の時代にさへ其の松の跡がなかつたものを、それより千年後の今日である。思案に盡きた元信は天滿天神に祈誓し、その御告により、今日この敦賀の町近く來たのである。

と、其處へ來か、つたは此の敦賀の遊廓に松の位の全盛を極めてゐる遠山であつた。花朧かしい姿の遠山は、かつて大内の繪所を預つた土佐將監光信の娘である。彼女は豫て父から奥州武隈の松の姿を教へられてゐた。殊に昨夜、天神様の御告があつたと、此處で四郎二郎元信がために、雅樂之助を松の立木に擬へ、武隈の松の姿を教へたのであつた。そして其の別れ際に遠山が口から四郎二郎の耳に呶かれたのは、二世を契る甘い言葉、しかも彼女が生命かけての言葉であつた。

* * * * *

この四郎二郎元信を六角家に推薦したのは六角家の執權名古屋山三であつた。山三の相役不破入道道犬、その嫡子伴左衛門、並に六角家の繪師長谷部雲谷、彼等は領主頼賢が名古屋山三と四郎二郎元信とに對する恩遇の厚いのを嫉んでゐた。殊に四郎二郎が武隈の松の姿を寫して差出したがため一段の面目を施したので、「おのれ、今に見よ、この鰐が見入れたからは」と人

知れず奸計を廻らしてゐた。

茲に領主頼賢の姫君に銀杏前といふがある。頼賢の愛子ではあるが、妾腹であるので、江州田上郡で七百町の土地を與へ、有徳の町人か由緒ある家中へても嫁入らせやうとの内意である。殊に姫君は今を盛りの美しい花であつた。執權不破道犬はこの銀杏前を嫡子伴左衛門が妻に迎へて、七百町の御朱印地を手に入れやうとの計畫であつたが、その銀杏前はいつのまにか四郎二郎元信に心を運び、戀の重荷に、きのふけふは玉の肌膚も稍瘦せが見えてゐられるとの事に、一日、四郎二郎が出仕を待受け、その持參した掛物の繪に言掛りをつけ、「汝はこの高島の御家を亡ぼさんための調伏よな、重罪通れず、繩にか、れ」と取圍まれて、寡は遂に衆に敵せず！四郎二郎は、とう／＼黒書院の床柱に、思ふさま縛りつけられたのであつた。表では此の騒動のうちに、姫君銀杏前は、奥より潜と行方知れずになつた。縛られた四郎二郎は、「親より傳へし一心の繪筆は」茲ぞと、兩手が叶はぬま、右の肩口に齒を立て、ふツふツと喰破つて、口に我身の血を啣み、襖戸に吹かけ／＼、見る／＼うちに

畫き出したは生けるが如き猛虎であつた。

折から姫君の行方を尋ねあぐんだ不破道犬、先づ四郎二郎から押かたづけてと、太刀を抜いたる刹那である。描ける虎は襖戸より生きて飛出て、牙を鳴らして吼えかゝつた。斯うなつては、犬の名を負ふ道犬、到底虎の敵ではなかつた。危き生命をやう／＼虎口から脱し得たのであつた、

虎は聽て四郎二郎を背に乗せ、千里一飛び、風に嘯きながら、何處ともなく馳けてゆく。

此處は城州山科の片ほとり、菴の主人土佐將監光信は、仔細あつて勅勘を蒙り、今は此邊に逼塞の身の上である。

今宵も將監夫婦、門弟修理之介正澄と閑談の折から、軒近く「叩き殺せ、打ち殺せ」と、百姓共の聲がする。何事かと耳を立てると、虎を此の藪蔭に追込だといふ。我が日本に居まじき

虎が、さても不思議と、松明に照らし見ると、一叢竹の下蔭に、人を恐る、氣色もなく、猛虎の姿が見受けられるのである。

將監つくくくと見て、「これぞ名畫に魂入つて現はれた虎ぞ、今の世にこれほどの畫をか、んものは狩野四郎二郎元信の外になし」と、星をさしたる一言。やがて修理之介は土佐の苗字を許され、印可の筆に墨を染め、四五間隔て、虎に向ひ、頸、前脚、後脚、と寫すにつれて、猛虎の姿は、いつか消え失せたのであつた。

茲にまた將監光信の門弟に浮世又平重起といふがある。生れついでの上の吃の上に貧苦の境涯、江州大津の町外れに住み、兎も角も「大津繪」を畫いて世を渡つてゐたが、日蔭の身の師匠を夜毎に訪づれ來ては慰めてゐた。今宵も心ばかりの手料理の品を持參して來たが、同じ門弟の修理之介が土佐の苗字を許されたと聞いては、兄弟子の身の、いつまでうかくと出來やう。藤の花かたげた女の畫、鯉おさへた瓢箪の唯ぶら／＼生きてゐても何の甲斐があらうと歎いて見せても、將監は耳にもかけぬ。

折から狩野雅樂之助、淺傷を負ひながら訪づれ來て、高島の屋形であつた騷動の顛末を委しく話して、姫君銀杏前の行方を索すに助力してくれよと語る。其所に種々の經緯があつて、又平が面目は、いづくにも立たぬやうになる。

と、又平は女房に墨をすらせ、石の手水鉢に向ひ、これぞ生涯の名殘の繪と、一念籠めて我が繪像を畫くと、不思議や筆の勢ひは厚さ尺餘の花崗石の裏へ徹つて、あり／＼と姿は生ける如く、裏と表と兩方から一度に畫いたやうであつた。將監驚き、土佐の苗字を許し、光起と名乗らせ、速に姫君の行方を探せといひつける。又平喜び、大頭を舞ひつ、出立すること、なる。

その出合頭に、尋ぬる姫君銀杏前と行合ひ、まづ／＼と堰生の宿に伴ひまらせた所へ、不破伴左衛門、長谷部雲谷、一味の徒輩引連れて「家捜し」と叫んで亂れ入る、茲でも繪畫の不思議が現はれ、又平が平素に畫いた大津繪の、奴、若菜、法師、鬼などが盛んに活躍して、伴左衛門一味のものを、さん／＼に追散らす。そのひまに、又平夫婦は、ほの／＼白む曉方に、

姫君を京都の方へと伴ひゆく。

此所は京洛の未申、六條三筋町の遊廓、その大門口に、今朝見れば、無慚や斬殺された武士がある。年齢は三十ばかり、きらびやかな衣裳、持物は目を驚かさばかりである。

「ヤア、伴さまじや、葛城さまの大盡不破の伴左衛門様が斬られてじや」と、噂は遊廓附近に瞬く間にいひ囃されたのである。

檢使として管領からの雜式が臨檢する。廓の年寄は雜式の前に呼出されて「伴左衛門が執心かけて通ひくる葛城には行末かたく言ひかはした名古屋山三と申す浪人がございまして」といふ。さらば葛城の遣手と呼べといふ事になつた。

その遣手の代理となつて、雜式の前に顯はれたは、曾て越前敦賀の遊廓で松の太夫であつた遠山即ち土佐將監光信の娘お光であつた。遠山は武隈の松の姿を狩野四郎二郎に傳へ、自分

が生命かけての戀を啖いて以來、もう四年越になる、その間に彼女は敦賀から三國の遊廓に移つて勝山と呼ばれ、伏見へ賣られて淺香山といはれ、奈良の木辻の遊廓に来ては三山と名をつけられ、果は此の、京は六條三筋町で、一文字屋の遣手となつて、今はおみやと呼ばれてゐるのであつた。

見た眼は温順で、その實は才氣縦横のおみやは雜式の訊問に對し、怯めず臆せず、巧妙なる答辯を試みたのである。されば伴左が斬られた原因については少しも得るところがなかつた。雜式は尋ねあぐんだ末、伴左衛門の死體を酒漬にして詮議は後日といふこと、し、一先引上げたのであつた。

この騒動のあつた日、名古屋山三は、平素の通り、通ひ馴れた大門口、その舞鶴屋へと訪づれて來た。舞鶴屋の亭主傳三は出迎へて「伴左様不慮の事、その詮議の厳しい今日、先づ四五日は……それには斯ういふ事が」と、其筋の嫌疑が山三の身にか、つてゐる事、雜式の訊問に對して、おみやの機轉きいた答辯振を委しう物語つたのであつた。

山三は、その折から來會せたおみやに向ひ「三千石取つた山三が手をついて頭を下げる、額に千石、兩の手に二千石、主人の外に此式作法は和女一人」と、しみじみ一禮を述べた後、「いかにも伴左衛門を斬つたは拙者、彼奴と拙者は四年以前は同じ家中、殊に御屋形の外戚腹の姫君、狩野四郎二郎元信に心をかけられ、既に祝言あるべき所を、伴左衛門さまに妨げたばかりか、拙者を讒奏して斯く浪人の身とならしめた遺恨重々、生け置いては四郎二郎に如何なる仇をなすやも計り難し、彼奴葛城に通ひ來るを幸ひ、傾城の意趣にかこつけ、討つて捨てた伴左衛門、若し露顯せば切腹は覺悟、四郎二郎がために捨つる生命、いさ、か惜しいとは思はぬ」と、彼は胸の思ひの一端を語つたのであつた。

おみやが胸は騒いだ。生命かけてもと思ふた男には高島の屋形の姫君といふ勁敵がある。さりながら今、我が戀を打明けけるは淺墓である。我が思ふ男の爲に一命を惜しまぬといふ山三の好意は厚う受けねばならぬ。さりながら差當り、山三が身にふりか、つてゐる嫌疑を如何にして遁れさすべきかと、おみやは固より、常から山三に好意を持つてゐる舞鶴屋傳三も思案の首

を傾けたのであつた。

三人寄れば文珠の智といふ。傳三が思案は、葛城を受出し、その落籍の日を二三箇月の以前として手形を貰ひ、それ以來借宅の見當るまで廓に住居をしてゐた體にし、その廓住居の間にも伴左衛門が度々艶書を送つて來たものとし、「山三さまは其の女敵討としたらば如何」との發案に、おみやは直に賛同する。さらば急げと、忽ちに其の手段は實行されたのであつた。

おみやの胸は千々に碎けた。折から聞え來るは心細げの鼓弓の聲、あはれ催す相の山！。おみやはハラ／＼と泣きながら、鼓弓の主の編笠の中、フト見れば、四年越の朝夕、夢にも忘れたことのない、それは戀し床しの四郎二郎であつた。

久し振の邂逅であるが、二人は人目を憚つて手を取ることさへ出来なかつた。女の胸には言ひたい恨みの山々があつたらう。男の胸には不憫のものやと數々のおもひがあつたらう。

四郎二郎は、斯くて山三に伴はれ、山三はまた葛城を宿の妻にと連れ、いづれも大門を見かへりがちに出た。

今日は姫君銀杏前が狩野四郎二郎元信へ御興入の日である。折しもの夕暮、並木の櫻、暮れかゝる頃、姫君の乗物脇にツカノと近づいたは白無垢着たる若き女一人。と見るまに、落花狼籍！姫君を乗物より引摺出して矢庭に土堤に押付けたのであつた。

聞けば哀れ、四郎二郎には四年越の思ひをかけた敦賀の遠山、今は六條三筋町のおみやであつた。

おみやは事の仔細を物語つて『無法ながら、今宵の嫁入をせめて一七日だけ私に下されませ、七日添ふたら別れませう』といふ。あまりの不憫さ。姫君は『さらば七日といはず、來月中は』と仰せられる。おみやは勿體なしと手を合せ『七々四十九日の間だけ私の良人』と、固く言葉番ふたのであつた。

祝言済んで、けふは五日目である。

名古屋山三は、四郎二郎の假宅に訪づれて來た。雅樂之助、出迎へて四方山の咄の折柄、無紋の色に淺葱の上下、編笠手にした舞館屋傳三が、けふは打萎れて入つて來た。『葬禮の歸りに、この祝言の濟んだばかりの家に』と苦々しげにいふと、傳三は鼻うちかみて『けふおみやが七日の墓参り』と涙を拭ふ。

『何をいふ！、そのおみやは四郎二郎と祝言して、ソレ奥に』といへば、傳三、訝しげに奥を見やりつ、『不思議とも、何とも……、そのおみやは、先頃葛城さま身請の夜、氣分が悪いとて寝たまゝ、とう／＼枕が上らず、七日前に佛さまとなられ、舟岡山で灰にしました』と、委しう其の時の話をして、臨終の時、私を呼び、四年以前、四郎二郎様と夫婦約束したこと、若し此の願ひが叶ふたら夫婦で熊野へ詣らうとの願をかけ、この笠の紐も自分にくけましたとのこと、いひつ、記念の菅笠を取出したのであつた。

さては臨終の一念、この世に残つて、假に姿を見せてゐるのかと、いづれも始みてソレと氣がついたのであつた。

黄昏てらす行燈の障子に映る夫婦の影を見ると、四郎二郎は人の形であるが、おみやが姿は五輪と彼女の物ごしばかりである。腰元共に聞くと、おみやは酒も肴も口に入れず「櫛の香の烟絶やすな、烟絶のれば此所にあることならぬ」と吩咐けたとのこと。四郎二郎はと聞けばおみや様の頼みて、お寝間の襖に熊野山の繪を遊ばして」と答へるのであつた。

四郎二郎元信は伏拜んでゐた。我ながら不思議なほど我が書く筆に靈があつて、山も、木立も動いてみえる。「これぞ誠に三所権現の靈驗」と彼は暫く伏拜んでゐた。やがて目を開けば、南無三寶！、妻のおみやは眞逆さまに天を踏み、兩手を運んで歩いてゐる。愕然として目を見張つた彼は、夢心地から覺めたのであつた。あ、おみや、汝は世に亡き人となつたか、世に亡き人が熊野詣をする、生きたる人とは違ふて、逆さまになつたり、後向になつたりすると聞いたが、さては事實かと、彼は黯然として幾度かみやの名を呼んでゐたのであつた。

* * * * *

その夜の明方、管領の雜式、不破道犬と長谷部雲谷とを伴ひ、伴左衛門が酒漬の死骸を昇せて、四郎二郎が假宅を叩き、「此所に名古屋山三やある、對面せん」といふ。

山三、靜に立出れば雜式の聲は尖つてゐた。曰く「其方不破伴左衛門を討取つたること紛れなき上、父道犬の訴へに依れば盜賊の罪遁れがたし、いざ尋常に繩か、れ」と。

山三は懐中せる手形を示した上、伴左衛門が葛城に寄せた最近の斃書を取出し、「斯く不義者の女敵討ちしは曲事でなからう」といへば道犬「イヤ、伴左衛門、あの時、葛城を請出す手附として金子五百兩所持し居たり、汝その金子を盗みをつたに相違ない」と居丈高に詰めよるのであつた。

山三、莞爾として「よし、さらば拙者が盜賊でない申譯が立つた節、盜人と言ひかけた汝が科を如何にする」といひつ、雜式に向ひ、伴左衛門の死骸此れへと、許しをうけて自己の身近く運ばせ「彼を討ちしは先月廿日、曉月の時鳥、名乗りかけしは欺さぬ證據」と當時の事を委細に物語つて「懐中にあつた五百兩、このまゝ、置いては眞實の盜人に取られて、山

三が盗みしと後日に云はれやう、それを察して、鳩尾先を挟み、金子を肺の臓に押込み置いた」と、傷口探つて緞子の財布、金子のまゝに引出し、「これ見たか、これでも山三は盗賊か」と、痛快に叫んだ。雜式これを見て、「道犬親子は重罪人、只今の始末諸人の見せしめ、親子諸共獄門に晒さるべし」と、嚴かに命令した。

斯くして道犬は獄門、雲谷は流罪に行はれたのであつた。

* * * * *

悪人亡びて、やがて名古屋山三は高島のお屋形六角頼賢の執權となり、先知を宛行はれたのであつた

狩野四郎二郎元信は、その後、大嘗會に際し、悠紀殿、主基殿の御屏風に彩管を揮ひ、從四位下越前守に補任され、土佐將監光信の勅勘は許され、狩野と土佐との兩家は相並んで大内の繪所を預ること、なつた。

喜びは夫れのみならず高島の屋形の姫君銀杏前は土佐將監光信が娘として、四郎二郎と三々九度の盃を酌みかはして千代もと二世を契つたのであつた。田上郡七百町の御朱印、それが夫婦の永代知行となつたは言ふまでもないことである。

(解題終)

『今様傾城反魂香』の第一ページ

近松巢林子の『傾城反魂香』を原作として改作された『今様傾城反魂香』の第一ページ（七行本）の文章は左の通りである。

今様傾城反魂香

文字を製りしいにしへの六書の中の第一も
或は日月艸竹の形を象る畫圖にして
それとわかる、墨の色いてや丹青をらみとる
時に近江の國司六角左京の太夫頼賢の
景圖所領ぞたくひなき。今在京の御やかた
おそばさらずの若家老名古屋山三春平を

豊竹越前少掾直傳

(一) 素きを後
論語に「繪の事
は素きを後に
す」の語がある。
(二) 命岡 姓は
巨勢、清和帝よ
り醍醐帝に至る
五朝に歴史した
名高き畫家。
(三) 狩野元信
本邦畫家三傑の
一人、其畫は和
漢畫人の長所を
取つて其妙を極
めた、世に古法
眼と稱す、永祿
二年歿年八十四。
(四) 丹青の器量
畫家としての
技術。

傾城反魂香

近松門左衛門作

上之卷

素きを後と花の雪。野山や春を畫くらん。聞きにきた野の時鳥
初音を啼きし其昔。清凉殿に立られし、跳馬の障子の繪、夜毎に出て
萩の戸の、萩を喰ひしと金岡が、筆のすさみの跡絶えず、傳はる家
や畫工の譽れ。狩野の四郎二郎元信、丹青の器量古今に長じ、心榮よ
き男振。親の繪筆の彩色に、生れ付きなる美男なり。頃は文龜の彌生
の空、天満天神の告ありて、越前の國氣比の浦へと旅羽織。我は笠着

(一) 武隈の松
一名を「二木の松」といふ。
(二) 能因法師
有名な歌人、在俗の時の名は橋親康といふ。

て大小の、柄にも袋させる筒、丁稚がこしの白山も、去年の縁にかへる山。山の頂青々と、雲に映らう月代の、ゆ尾峠の孫杓子。もりこぼしたる花襲。重ねくし旅籠屋が、情もあつき爛鍋の、つる賀の濱にぞ着き給ふ。四郎二郎一僕を招き、「ヤイ雅樂之助。外の弟子にもかくし此所へ下りしこと餘の儀にあらず。近江の國の大名、六角左京の太夫頼賢殿と申すは、佐々木源氏の旗頭、高島の館とて系圖所領並びなき大將なるが、將軍家の御意を受け、本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奥州武隈の松と云ふ名木は、いにしへ能因法師さへ、跡なくなりしと詠みたれば、名のみ残つて知る人なし、我是を書き顯し、譽れを得させ給はれと、天満天神を祈りし所に、武隈の松を見んと思

(一) 實盛 齋藤別當のもと。源平時代の老武者。
(二) 西行 名高い歌人、在俗の時は佐藤義清といふた。
(三) 淺生の松若 淺生は地名、松若は盜賊の名。
(四) 義貞・新田 左中將義貞のこと。

は、越前の國氣比の濱邊に行くべしと、灼然に靈夢を蒙れども、夫は陸奥、爰は越路。何を知邊に尋ねべき。あはれ里人の來れかし。物問はん」とぞ呼はる、「所の者の御用とは、都人にて有りげに候。御尋ね有り度きとは何事にてばし御座候。御覽の如く都の者。天神の教へに依つて、松を尋ぬる仔細あり、此所にこそ名高き松の候はめ。教へて給はり候へとよ。『是は思ひも寄らぬ事を承る物かな。此の北國にてお尋ね有らうなれば、越前布、越前綿、若しは實盛の生國なれば、お供の奴の髭に塗る、油墨等のお尋ねも有るべきに、名高い松とは流石優しき都人。先づ當國の名木は、西行が汐越の松、淺生の松若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛松、山の山松、庭の庭を庭

(一)ぬつほり松 別に意味なし 恐らく作者の筆 拍子より生れた ものであらう。
 (二)天神 天神の二字に天満天神と遊女との意味が含まれてゐる、此頃の廓にて第二位の遊女を梅といひ夫れより天神とも呼んだ。

松、門には門松、酒には濱松、肥えたは肥松、捻ぢたは捻松。割松、たいまつ、ぬつほり松、我等が息子に岩松、長松と申す縁子もあり。庄屋の名は松兵衛、若い時には相撲取、赤松打破った様にござありしが、今老松になられて方も元よりさがり松。腰も屈んで壁松〜と、所の人は呼び候。ヤア誠にてんじんの御告げと有るに思ひ當つた。當所敦賀の町に、名高き松の御座候。是ぞ京にも類なしと、心をかけぬ人もなき、色よき松の候が、若し左様の松にては御座なく候か。『實にや往來も慕ふとは、疑ひもなく我等が尋ぬる名木よ。急いで見せて給はれかし。』何時も夕暮毎には、此所へ現れ出で給ひ候。ヤア〜早や那へお出で候。我等はお暇給はり候べし。御逗留の

(一)松と成りし も 松は梅より 以上の意味にて 即ち第一位の遊女のこと。
 (二)よれ 遊女のこと。元祿時代の語。
 (三)おろし歩み 仰つたりと歩むこと。
 (四)道中 遊女が盛装して廓の内を練り歩くこと。
 (五)ぬめり なまめく。
 (六)陥つた か けられた。だまされた。

間御用の事は承り候べし。『頼み申し候はん』『心得申して候』高き名の松の門立立馴れて、人待顔の暮ならん。町は敦賀のかけ作り。情夫こそ潮の満ち干なれ。誰をかも知る人にせん此廓の、松と成りしも親の爲、賣られ買はれて北國の、土氣の賤の里なれど、よねの育ち(三)は上田の、水損なしの太夫職。名を遠山と呼ばれしも、人にのぼれの(四)こいの坂、おろし歩みの道中は、花の立木の其儘に、ぬめり出でたる(五)如くなり、雅樂之助『是申し。美事な者がそれ其所へ、それ〜』と言へば四郎二郎、『ヤア何んと、松が見えたか現れたか寫し留めん』とふツと立ち、女郎にはたと行當り、『是はさて松かと思ふて陥つた。眞の松を尋ねて見ん。丁稚來い』と行違ふ、袖を控へて『是申し、此遠

(一) 松様達 遊女たち。
 (二) 不粹 人情の機微に通ぜぬこと。野暮。

國の我々と、京の廓の松様達と、比べさんすが不覺の至り。然し不粹な方には、松と見られて嬉しうなし、杉と云はれて腹立たず、桑の木とも榎とも貴方様に似合ふた、阿呆の木とも見さんせ」と、無駄言なしの言ひ捨ては、田舎妓とて笑はれず、「オ、御機嫌損ねし御尤、實に松とは太夫様、我等は悪う心得て、不調法な御挨拶。眞平くお詫言。是を御縁に御知人に成りましたし。下拙事は狩野の四郎二郎元信と申す僅の繪師。さる御方より武隈の松の圖を、仕れとの仰。即ち天満天神の夢想に任せ、此所にて名有る松と尋ねしを、太夫様との取違へ、是は斯うも有らう事、御了簡序にお交際も數多なり。願ひの叶ふ便りも有らば、お世話頼み奉る」と、思ひ入つてぞ語らる。

(一) 土佐將監光 信 土佐派宗家の畫家にて土佐の三筆と稱せられてゐた、狩野元信と共に當時に名聲を馳せた人、大永五年歿す年九十。
 (二) 勸勤 天皇陛下への目通りが叶はぬことになつた意。
 (三) 憂き渡世 みじめな月日を送つてゐる。
 (四) 正夢 夢に見た事が不思議にも事實になつて顯れること。

女郎はツと顔を眺め、「扱ては狩野の四郎二郎元信様とはお身の上か。恥を包むも時に寄る。何を秘さん私事は、土佐の將監光信の娘なるが、父は一歳勸勤受け、今浪人の憂き渡世。此の身に沈むは申さず共、推して泣いて下さんせ。扱て武隈の松の圖は、土佐の家の秘傳の繪本、漏らす事は叶はねども、昨夜不思議や天神様の夢の告げ。狩野と云ふ繪師下る可し。武隈の松を傳授せよ。父が出世の種ならんと、見たはまざく、正夢」と、語りも敢ぬに四郎二郎、感心感涙肝に染み、天を禮し地を拜し。懷中の繪筆繪絹を擴げ、「サア遊ばせ。御傳授頼む」と悦びける。「如何にも傳へ申さんが、親の許しもなき中に、筆執る事は如何なり。ア、何とせん。實に思ひ付いたり。彼の御供の人の立姿を

- (一) ないく心得ましたの意。
- (二) 慮外千萬無作法千萬。
- (三) 千貫枝 價格をいへば千貫の値ある枝。
- (四) 天津乙女の肩車枝 天津乙女が頸から肩にかけて跨つてゐるやうな枝ぶり。

松の立木に擬へ、笠を枝葉の笠となし、此所にて學び見せ申さん。夫にて寫し留め給へ。是れ其所な奴様、爰へ御座んせ雇ひましょ。『な
い〜い〜』。手ふる頭を振る年經る松の、松根に寄つて腰付も、千年
の縁寫せしは作意なりけり。『先づ歌人の見立には一本松を二木とも
みきと連ねし言の葉の、夫は老木の松が枝なれど、寫す若木の、奴の
奴の〜、此膝の節松の節。前へ地摺りの下枝に、ぬツと出せし片足
は、慮外千萬千貫枝、筆捨枝や久方の、天津乙女の肩車枝や。腰掛枝
の三蓋松。月に障らぬ枝々は、小れ小枝の松影を。サア沖漕ぐ船の帆
の仄見えて、差す腕には壽福の枝、收むる手には不老の枝、垂れて雪
見の控への枝。是々是々。ズツと伸びたる流しの枝』。松は非情の物だ

- (一) 粉ひつべう どちらかわか
らぬやう。
- (二) 家の幸甚 家門の幸福。
- (三) 本懐とげ 自分の希望が叶
ふたこと。
- (四) 連理 木の
枝が他の枝と接
合すること。
- (五) 參勤の上落 時を定め將軍
家の命によりて
京都に上ること。

にも、傳へし心の色は猶、宛ら青々條々として、松の生き木の生き生
きと、若やぎ立てる其風情。狩野は一點違ひなく、書連ねたる筆勢。
何れを寫繪、何れを立枝、粉ひつべうぞ見えにける。『元信家の幸甚
たり。早速歸り本懐遂げ、此報恩には御身の上、父御の事も請取り申
す。萬のお禮は本國より』と、立歸るを『これ申し。神の告に任せし
からは、恩には懸けず末掛けて、情を思し召すならば、必ず外に内儀
様、持つてばし下んすな。奴殿頼みます。』何が扱〜。天神様より
太夫様。追付けお二人連理の松、中に立ッたる此松は、島臺持つての
取結び。千年萬年萬々年。綴付き引付き松脂の、離れぬ中とぞ壽きし。
されば江州高島の館、左京太夫頼賢卿、參勤の上落有り、執權不破の

(一) 雪舟 畫家として非凡の天才、通稱は小田等揚、雪舟は其號、別號は雲谷軒、備中の人、永正三年歿す、年八十七。
 (二) 嫡傳 正しく其流儀を傳へてゐること。
 (三) 二才 青年を罵つた語。
 (四) 前髪の酒林 むかし酒屋又は飲食店にては杉の葉を丸く把にしたものを看板に出してゐた其の看板に似た山三の前髪といふ意。

入道道犬、同じく嫡子不破の伴左衛門守末、國を預かる留守居なり。御家の繪師長谷部の雲谷遠たゞしく、入道親子が前に手を束ね、「近頃過言に候へ共、某事は雪舟の嫡傳として、代々の御扶持人。此高島のお館にて、繪筆を執つて誰人か、拙者が上に着き申さん。然るに此度狩野とやらん申す二才、武隈の松を畫きしとて、過分の恩賞を下され古參を踏付け御前に蔓り、剩へ今日は奥方へ召され、姫君様よりお料理を下さるゝと承る。殿様の御留守誰が許しての推參。御家老の仰、一國に違背申す者はなし。屹度お仕置き然るべし」とぞ支へける。道犬領き、「つツと寄れ雲谷、總じて此の四郎二郎奴は、相役名古屋山三が取持にて召出された。山三は元來お小姓立。前髪の酒林で殿を酔

(一) 甲に着て「笠にきて」と同じ意味。
 (二) 脇腹 妾腹の子。
 (三) 縁邊 縁を組んで。
 (四) 主付さん 我が物にせんとの意。
 (五) 方人 味方。

はせし男傾城。口嘴の黄な小雀が、家老並に列り、威を振ふ其山三めを甲に着て、伸張廻る四郎二郎、我々親子が睨めども、事とも思はぬ奇怪さ、其方とても同然たり。又乙の姫君銀杏の前は、御愛子なれども脇腹ゆる、御臺所を憚り給ひ、田上郡七百町の御朱印を付けられ、京都徳の町人か、由緒ある御家中へも、下されんとの御内意ゆる、某嫁に申し請け、此の伴左衛門に縁邊し、七百町を主付かんと、當嵌て置いたもの、姫君狩野めに心を通はし、今日密々祝言あると、奥目付より聞きたれども、御意と有れば詮方なし。御在京の其間は、山三めも留守なれば、彼奴が方人する者なし、少にても過を、随分見出せ聞出せ、慮外をせば打殺せ。御留守の間國中は某が裁斷なり。此

(一) 手を取らする奸計 何か罪に落し入れやうとのわるだくみ。
 (二) 不覺 考へが足らぬ。あさはかな。
 (三) ふりはへわざと。
 (四) 中老 武家時代の奥女中の重職にて老女の次席。

不破と言ふ鰐が見入れて、餘り程は有らせまい。試して見度い新及はないか、一の胴か二の胴か望んで置け』と云ひければ、雲谷甚だ笑壺に入り、『政道正しき御家老様。お屋形の心柱』と、追従だら〜見苦し、斯とは知らず四郎二郎、櫻の間に伺候し、『姫君銀杏の前様より御掛物を仰せ付けられ、持參仕り候。御取次たのみ奉る』と、云へども入道伴左衛門、じろりと見たる計りにて返答もせず睨め付ける『ヤア曲者よ』。側には雲谷。いか様我に手を取らする奸計有り。立歸るも不覺なり。幸々奥へ通路の鈴の綱。ふりはへ引けば鈴の音、『おう』と答ふる女の聲。宮内卿とて中老の局立ち出で、『ヤア狩野殿か、姫君様の御待兼ね。お直の御用も有るとのお事、サア〜此方へ』と

(一) 物頭 武家時代の役目の一つにて弓や鐵砲などの組の足輕の長。
 (二) 不届千萬 ふらち千萬。

有りければ、畏まって四郎二郎入らんとすれば、伴左衛門、聲を掛け『待て〜』。お家の掟を知らずんば、何故物頭には伺はぬ。知ツて背くか不届千萬。上より御許しなき時に、刃物を帶し奥方へ參ること禁制との御條目。あれ大小腕いで引摺り出せ。當番〜』と呼ばれば、宮内卿『否是は私ならず。姫君様より殿様へ御伺ひ、則ち京より名古屋山三殿の指圖にて、奥へ召さる、四郎二郎、何のお咎め御座らう』と、云べども更に聞き入れず、『お留守を預る家老の耳へ、承らぬ御意なれば、殿の御意でも叶はぬ事。ソレ伴左衛門腕いで取れ』。『まッかせ』と立上る。四郎二郎も身構へして、絶らば切らんと眼差し左右なくも寄り付かず、『サア渡せ〜』と詞で脅す計りなり。時に奥

- (一) 丸腰 腰に刀を帯びぬこと。
- (二) 御法度 禁制。おきて。
- (三) 男でもない奴原 四郎二郎をいやしめたる言葉。
- (四) 侍の辭義 武士と見ての挨拶。
- (五) 踏みたたく 踏んだ上を更に踏み叩く意義であらう。
- (六) 事ともせず 別に氣にもとめぬ風。

よりお腰元つかく〜と出て、『是々何れも。お姫様より御意が有る。四郎二郎殿には直に御用の事あれども、丸腰でなければ奥へ通さぬ御法度とあれば、是非に叶はず姫君様、此所へ御出との仰せなり。四郎二郎は御用人。其外の男の分、雲谷は言ふに及ばず、御家老殿を始め、御前へは叶はぬ。皆お廣間へ立ちませい』。立ちませいとこの權柄さ。道犬親子無念ながらつツと立ッて、『サア雲谷、姫君の御前へは男たる者罷り出でず。男でもない奴原に、侍の辭義無用の沙汰』と、四郎二郎に刀の鐙。打當て〜袴の裾。踏みたたくッて睨み付け、お次の間にぞ出てにける。御留守と云ひ女中の邊、尙穩便に事ともせず『御好みの掛物、梅に淡雪雉山鳥、仕ッて候』と、紐を解いて懸ければ、『此

- (一) 落雁 菓子の名。
- (二) 目移り あちこちと目が動いて視線の定まらぬこと。
- (三) 脇詰 振袖でなく脇を詰めた着物を着た女
- (四) 高家 王朝時代は貴族の稱であつたが徳川時代では公卿と武家との間の事務を取扱つた家柄をいふ。
- (五) 殿好み 聲あらび。

由披露致さんに。サア先づ緩りとお茶進ぜや』と、局は奥に『あい〜』と、愛想らしき聲々の、男の側へ寄る事は、常になし地の煙草盆、落雁、かすてら羊羹より、菓子盆運ぶ腰元の、饅頭肌ぞ懐しき。物に臆せぬ男なれども、女中の色に目移りして、氣を取られたる折節、十八九なる脇詰の、後結びも格別に、銚子盃前に置き、婉容に手を突いて、『私はお姫様のお髪上げ、藤袴と申すもの。しみん〜お咄し致しませいとこの御事ぞや。御存じの通り、お妾腹のお姫様。御臺様への憚りにて、大名高家のお望なく、心次第縁次第と、田上郡七百町。御朱印握つて殿好み。情ないは貴方様、何時ぞやより色々、お乳人お局口の酸い程勤めても、如何でもお請け無いとの事。お愛しや姫君は、

(一) 藻掻き言
身もだへして
ふ言葉。
(二) お憤がる
機嫌がわるい
(三) 慾心に云々
七百町の土地
に目をかけた
云はれるのが。
(四) 改易 徳川
時代に士分に行
はれた刑の一つ
で即ち士分の籍
から除かれ食邑
は没收され素浪
人に落されるを
いふ。

餘りの事に戀焦れ。私をお寢間へ召し、ヤイ藤袴、切めての事に其方
なりと、四郎二郎と名を付けて、心懐しに抱いて寝よ。其方も己を抱
き締めて、姫可愛いと云ふて呉れと、藻掻き言がお愛しさ。頓と下紐
打ち解けて、寝る程抱く程締める程、二人の心急く計り。何方らぞ男
になりたいたいと、云ふても泣いても叶はばこそ。なう大名の手業にも、
有る可き道具の足らぬのは、ひよんな物とてお憤がる。自らに否應の
返事、聞き切り参れとお使。私も一分立つ様に、お返事なされ」と
述べにける。元信額を疊に付け、『冥加に餘る仕合せながら、度々お返
事申す如く、諸朋輩の猜みと申し、慾心に紛る、事世間の嘲り。縦令
御機嫌に違ひ、改易仰せ付けらるゝとて、御恨み候まじ。御請けと

(一) 期度 念を
押すの義。
(二) 先が先 先
きに契約したも
のが勝ちといふ
意。

ては成り難し。よき様にお取做し、頼み入る」とぞ言ひ切つたる。「ハ
ア膠もなう埒明いた。如何にとしても上つ方へ、左様な慮外申され
まじ。少し物に品付けて、始めより約束の女房ありと申しなば、お胸
の晴るゝ事も有る。去りながら、其女房は何者と、期度を突かるゝ念
の爲 今此處で私と夫婦固めの盃して、とつと前から藤袴と契約あ
りと申さば、如何な主でも、此道ばかりは先が先。此談合は如何御座
んしよ。『オ、ウ幸ひ望む所。サア盃仕らう。』『否々否々。我とて
も假には厭や、佛神掛けての女夫ぞや。』『誓文。』繪筆を執らぬ法
も在れ。斯うぢや〜』と抱き付く、『近頃嬉しい忝なし。是祝言の
盃』と、一つ受けて元信に、妻の盃いたゞく作法儀式は固うと。

(一) 誓文立 誓
ひか立てること
(二) 三平二満
額と鼻と頤との
三つが平たく兩
頬が肉満ちて高
いのないふ俗に
いふ「おたふく」
(三) しなだれ懸
かる みだりが
はしくもたれか
かること。
(四) 鮎ら強い云
云 鮎のやうに
硬い皮よ、藤袴
でなくて皮袴よ
(五) 調伏 人を
咒ふこと。

四海波。腰元中が謠ひ連れ、奥よりお局島臺に、七百町の御朱印箱、
姫君様の御祝言。三國一とぞ祝ひける。四郎二郎合點行かず、逃げん
とするを抱き留め、「藤袴とは假名ぞや。自こそは銀杏の前。誓文立
の盃、否はならぬ」と宣へば、「否我等の名指は藤袴、外に妻は是な
し」と、尙意地張れば腰元衆。「夫んなら眞の藤袴。早う〜」と呼び
出だす。お茶の間の切から、五十餘りの厚化粧。三平二満の口紅。し
なだれ懸かる會釋顔。「是が何んの藤袴。鮎ら強い皮袴」と、どツと笑
ひのどやくや紛れ、盡させぬ妹春となり給ふ。斯る所へ不破の伴左衛
門宗末、雲谷を伴ひ、遠慮もなく座上にずツかと直り、「是四郎二郎。
汝如何なる野心にかお屋形を調伏し、亡さんとの存念あり。屹度詮議

(一) 下知 いひ
つけ。命令。
(二) 下座 座敷
の下の方。
(三) 掛繪 掛物
畫幅。

を遂ぐべき旨父道犬が下知、申し譯仕るか。直に繩を掛けうか」と早
や繩手繰ッて見せ懸けけり。四郎二郎ちツとも騒がず、「責て形の有る
事には申し譯もあるべし。御屋形調伏とは此方の言譯より、先づ御答
めの證據承はらん」とぞ答へける。雲谷下座より「是りや〜證據
は某よ。總じて繪師の祕密にて、繪を描いて調伏する事。人は知ら
じと思へ共、此雲谷が見付けた。此掛繪は和主が筆。梅に山鳥、雪に
雉。抑も當家は高島の御屋形と號す。山偏に鳥と書いて嶋と讀む文字
なり。梅の梢に山鳥の、高々ととりしは、これ高嶋にあらずや。雉
にほろゝの聲あつて、雪は降るとの心あり。讀み下せば高島亡ぶる調
伏。狩野とは狩の野と書けり。姫君と心を合せ、屋形を亡ぼし、一國

(一) 表相 かんがへ。思ひ付き。
 (二) 高手小手 きびしく人なしばりつけること。
 (三) 御朱印 領主の印を捺したる書付。
 (四) 中口 表と奥との隔ての口。
 (五) 不開の門 常には明けぬ門。
 (六) 狩野雅樂之助之信 正史に依れば雅樂之助之信は四郎二郎元信の弟。

を己が狩場の野原にせんずる表相。重罪遁れず繩掛かれ」と、取付く所を引外し、胸板礮と蹴倒す間に、飛懸かる伴左衛門が真向、刀の柄にて發矢と打ち、直ぐに抜かんとする所を、隠し置いたる取手の者。十手八方鐵鞭を、打立てく捻伏て、高手小手に縛め、黒書院の床柱に、思ふ様に縛り付け、「姫君の御朱印を、奪ひ取れ」と群るを、女中手々に枕槍、長刀にて引包み、圍ひ防げば餘さじと、奥をさしてぞ追詰めける。腰掛に控へし雅樂之助、斯くと聞くより堪られず、駆廻ッても奥方の、勝手は知らず中口の、不開の門碎けてのけと扉を叩き、狩野の四郎二郎元信が弟子、雅樂之助之信と云ふ草履取。主と言ひ師匠なり。死ぬる道なら共に死なん。高が繪師の丁稚連、怖い事も有るま

(一) 鳥居立 兩足を踏張つた形か？

い。相手の首取る分の事。開けよ明けよと貫の木も、折る、計りに踏み叩き、鳥居立にぞ跨つたる。元信内より「雅樂之助か満足した。身に過りなき上に、慮外をして姫君の、御身の過ち氣遣はし。歸れ〜」と呼はれば、「ア、慮外と云ふも事に依る。明けずば踏んで踏み破る」と、喚き散らせば雲谷不破、「雅樂之助を打ち殺せ」と、引返して門の貫木。外す所を、付入りに雲谷が小額ずつぱと切下げたり。「あッ痛た」と跳り上り、二人拔連れ打掛くる。彼方へ追詰め此方へ支へ、城下を指して切出る。四郎二郎地團太踏んで、「エ、佞臣共。むざむざとは死ぬまい。親より傳へし一心の繪筆は此所ぞと觀念し、右の肩に齒を立て、ふつつくと喰破り。口に我身の血を含み、襖戸に吹掛け吹

(一) 電目雷威
姿勢の猛く勇ま
しい形容。
(二) 戯へたり
側近く寄来る。

掛け口にて虎をぞ描たりける。電目雷威の眼の光り。怒り毛、怒り斑
怒り爪。千里も駈ん勢ひなり。道犬は姫君の行方尋ね廻りしが、「先づ
繪師奴から仕まはん」と、太刀を抜んとせし所に、俄に吹來る風騒ぎ、
繪に描く虎は形を現じ、牙を鳴らして哮懸る。道犬も強力者、組止め
んと挑み合ふ。虎は猛ッて爪を研ぎ、四邊を蹴立て、揉合しが、元よ
り不思議の猛獸、道犬が襟髻ひつ啞へ、打擔げぐるりく、くるく
くくるりくくと持て廻り、一振り振ッて投げければ、扉を打越し
敷石に、面を摺ッてぞ打付けける。虎は勇んで元信の、縛を嚙切り
背を差向けて戯へたり。元信頓て心付き、袴の股立絞り上げ、翻りと
こそは乗ッたりけれ。虎は千里の足早く、風に嘯く身も軽く、追ひ來

(一) 築地 板を
中心に其上に泥
を塗固め屋根を
瓦で葺いた垣。
(二) 豐干禪師が
四睡 禪師と寒
山と拾得との三
人が虎と睡つた
故事。
(三) 李將軍 李
陵字は少卿、前
漢時代の人。
(四) 獸君 獸類
の王。
(五)、(六)、(七)、
(八)。いづれも
地名、
(九) 胡散 あや
しむべきこと。

る敵を追ひ散らし駈散らし、堀も築地も跳り越え、飛越え、跳越え、
驅けり行く。豐干禪師が四睡の虎。李將軍は虎を組む。繪に描く虎を
動かすは、古今一人乗ッたも一人。天下一人一筆の、譽れは世にぞ殘
りける。實に獸君の一靈。山野に蔓り、草木を踏折り。田畠を荒す事
斜ならず、近郷の百姓聲々に、「三井寺の後から、藤の尾迄は見届けた。
此山科の藪蔭へ、逃込んだに極つた。皮に疵を付けずに殴き殺せ擲殺
せ」と、取りく喚き評定す。庵の内より棒突いて、小提燈提げたる
男。「ヤア何者ぢや人の軒。打ての殺せのとは、胡散なり」とぞ咎めけ
る。「否是は矢橋粟津の百姓共、此頃設樂山から虎が出て暴れるゆる、
隣郷が云合せ、此藪へ追込んだ。捜させて下され」と口々に呼はれば、

- (一) 途方もない事 道理のないこと。
- (二) 仔細 事情わけ。
- (三) 逼塞 おちぶれて忍びかくれてゐること。
- (四) 顔輝。支那の元時代に於ける名高き畫家。

侍、嘲笑ひ「ヤイ。虎といふ獸が、日本に出た例なし。途方もない事。夜盗押入の手引きか。此庵を誰とか思ふ。土佐の將監光信と云ふ繪師、仔細あつて先年勅勘を蒙り、此所に逼塞し、將監年は寄つたれども、某は門弟修理之介正澄と云ふ者。油斷はせぬ」と、棒振廻し争ふ聲。將監夫婦障子を明け、「聞いたく。天地の間に生ずる物、有るまいとも極め難し。諸共捜せ」と鎗熊手、引提げくゝるいゝ聲。松明振つて狩立つる。一叢竹の下蔭に、「夫りやこそ物よ」と火を上ぐれば、暴に暴れたる猛虎の形。人に恐るゝ氣色なく、背を撓めてぞ休み居る。將監横手を打つて、「あら不思議や顔輝の筆の、竹に虎の筆勢に、少しも紛ふ所なし。是は誠の虎にあらず。名筆の繪に魂入つて

- (一) 新筆 新しく書いたもの。新畫。
- (二) 狩野祐勢 名は正信、狩野家の開祖。
- (三) 七尺去つて云々 「師の影は七尺去つて踏む」といふ古諺より思ひついたものであらう。
- (四) 苗字名乗 土佐といふ苗字と及び名乗。
- (五) 印可 ゆるし。證明。

顯れ出てしに極まつたり。然も新筆、今是程に描かんず人は、狩野の祐勢が嫡子、四郎二郎元信ならでは覺えなし。何れにもせよ證據には足跡あるまい。物は試しと百姓共、若草分けて尋ねれども、虎の足形あらざれば、「描手も描手、目利も目利、前代未聞の名人や」と、心なき土民等も、拜む計りに信を爲す、修理之介七尺去つて師匠を拜し、「ア、有難や此虎を見て繪の道の悟を開き候、其兆我筆先にて彼虎を消し失ひ申すべし。苗字名乗を授け御許しを受度候」と、懇望あれば。將監悦び、「オ、今日より土佐の光澄と名付くべし」と、印可の筆を與ふれば、修理は戴き墨を染め、虎の順に差當て、四五間、間を置きながら、筆を引く方に従つて、頭、前脚、後脚、胴より尾先に至

- (一) 末弟 門人の末に。
- (二) 言舌 ことば。言語。
- (三) 火打箱 小さい家を形容した文字。
- (四) 童賺 子供だまし。
- (五) 日蔭の師匠 おちぶれた師匠の土佐光信。

るまで、次第に消えて失せけるは、神變術とも言つべし。百姓共舌を捲き「孫子までの咄の種、喃彼上手な繪師殿に、好いお妓を十人程描いて貰ひ、金儲けが仕度い」と言へば、一人が聞いて、「お、〱〱〱冬年お目に懸つたら借金乞の帳面を此處から消して貰はふもの、お暇申す」と打笑ひ、在所在所へ歸りけり。爰に土佐の末弟、浮世又平重起と云ふ繪師あり。生れ付いて口吃り、言舌明かならざる上、家貧しくて身代はうすき紙子の火打箱、朝夕の煙さへ、一度を二度に追分や、大津の端れに店借して、妻は繪のぐ、夫は晝く。筆の軸さへは元手、上り下りの旅人の、童賺の土産物、三錢五錢の商賣に、命も錢も繋しが、日蔭の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦連、夜々見舞ぞ殊勝なる。夫

- (一) 生中 なまじひに。
- (二) 通事 通譯。
- (三) 竹筒 むかし酒を入れた器具。
- (四) 道者 神佛參詣の旅人。
- (五) 立縮み 立ち通し。
- (六) 瀬田鰻 鰻は瀬田の名物。
- (七) 膳所 地名。
- (八) 練貫水 良水。
- (九) つべこべ 彼是としやべる。

は生中目禮ばかり、女房傍から通事して、「未だ是はお寢ませぬ。誠に滅切と暖かに、日も永う成まして、世間は花見の遊山のと、騷々々致します。此方は山蔭、御浪人のお徒然を勇めの爲、嫁菜の浸物に豆腐の煮染、竹筒でも致しまして、關寺か高觀音へお供して、春めく人でも見せませうと、女夫申して居ますれども、心で思ふたばかり、道者時分で見世は忙し、洗濯物はつかへる、仕事は捗行かず。日がな一日立縮み。何を爲るやら野良くらと、急げば廻る瀬田鰻、只今膳所から貰ひまして、練貫水の大津酒。忌々しう御座りますれども、此春からお仕合せ直つて、鰻の穴から出る様に、御世にお出なされませ、真につべこべと、私が云ふ事はツかし。此方の人の吃と私が饒舌

- (一) 入合せ つきまぜる。
- (二) 北の方 奥方。
- (三) あやかり 感じて似る。
- (四) 時節 今が好機會の意。
- (五) 訴訟有り氣 何か物いひたげに。

と、入合せたら能い頃な、女夫が一組出来ませう。ア、お恥もじや」と笑ひける。北の方聞き給ひ、「オ、能うこそ祝ふて給つた。今宵は奇妙な事あつて、修理は苗字を許され、土佐の光澄と名乗るぞよ。其方もあやかり給へ」と有れば。又平時節と女房を、先へ押出し、背を突き、我身も手を突き頭を下げ、訴訟有り氣に見えければ、女房心得進み出で、「誠に道次、百姓衆の咄しを聞き、身は貧なり不具なり。弟弟子に土佐を名乗らせ、兄弟子はうかくと、何時まで浮世又平で、藤の花擔げたお妓繪や、鯰押へた瓢箪の、ぶら〜生きてても甲斐無なしと、身を揉んでの無念がり。尤とも憐れとも、連れ添ふ我等の心の中。申すも涙がこぼれます。奥様迄は申せしが、お直の願ひは此時節。今生の

- (一) 繪所 禁中にて繪の事をつかさどりし司。
- (二) 小栗 名は助重、剃髪して宗丹と稱し畫を以て世に聞えてゐた。狩野元信は此人の門人である。芝居でする小栗判官。
- (三) 大津繪 浮世又平が畫き出した一種の粗畫で其多くは滑稽味を帯びてゐる。近江國大津で書き始めたため大津繪といふ。浮世繪の源。

思ひ出、死しての跡の石塔にも、俗名土佐の又平と、御一言のお許しは、師匠のお慈悲」と計りにて、涙に咽び入りければ、又平も手を合せ、將監を三拜し、疊に喰付き泣き居たり。將監素より氣短く、「ヤア又しては〜。叶はぬ事を吃めが。コリヤ此將監は、禁中の繪所、小栗と筆の争ひにて、勅勘の身と成つたるぞ。今でも小栗に従へば、富貴の身と榮ふれども、一人の娘に君傾城の勤めをさせ、子を賣つて喰ふ程の、貧苦を凌ぐは何故ぞ。土佐の苗字を惜むにあらずや。修理は只今大功あり。汝に何の功が有る。琴棋書畫は晴の藝。貴人高位の御座近く参るは繪師。物も得言はぬ吃めが推參千萬、似合ふたやうに大津繪描いて世を渡れ。茶でも呑んで立歸れ」と、愛想無くも叱られ

(一)さん候 左様にごさる。
 (二)頼み切つたる たいよりにしてゐる。

て、女房は力を落し、「此方を吃に産付けた、親御を恨みさッしやれ」と、頼みなく、又平も、我咽笛を搔撈り、口に手を入れ舌を抓つて泣きけるは、道理見えて不憫なり。時に藪の内よりも「將監殿。光信殿」と呼はつて痛手負たる若者、椽先に躑ひ立ち、「狩野の弟子雅樂之助御見忘れ候か」。『實にも實にも雅樂之助先づ此方へ』と座敷に入れ、「承れば四郎二郎殿。雲谷、不破が悪逆にて、難に遭ひ給ふ段段具に聞く、氣遣し』と有りければ、『さん候。某も供仕り雲谷と戦ひ、斯様に深手を負ひ候。頼み切つたる名古屋山三殿は在京。元信危く候ひしが、漸く遁れ落ち失せたと承る。此に難儀の候は、姫君銀杏の前、元信を憐み、七百町の御朱印を持つて落ち給ひし

(一)下の醍醐地名。
 (二)繪師の瑕瑾 繪師としての失態。
 (三)いつかない つかない、いかにかにして。
 (四)辛氣を沸し じれつたいこと。「辛氣」又は「辛氣くさい」など上方の方言。

を、敵奪ふて下の醍醐に隠れし由、二度姫君屋形へ移し、御朱印奪ひ返さでは、永く繪師の瑕瑾なり。某手負の身は叶はず。御加勢頼み申さん爲、忍び参り候』と、語りも敢ぬに將監皆聞く迄に及ばず。狩野と土佐は一家同然、力に成りて参らせん。去れども彼奴等と太刀打は、いつかな、叶ふまじ。姫君にも怪我有らん。何卒辯舌の能き人に、御屋形の御意と言はせ、誑つて取返す分別が御座らう。何れも云ふてお見やれ』と、額に小皺頬杖突き、各々小首を傾くる。又平何ぞ云ひたげに、妻の袖引き背中突き、指差しすれども合點せず、辛氣を沸かし女房を、引退けてつツと出て、師匠の前に雙手を突き、唾を飲込んで、『此討ッ手には拙……拙者が参り、姫君も……ゴウ……御朱印

(一) ぶん正介定所持せる刀の銘。介定は山城鍛冶の一人。
 (二) 首賭の博奕首を賭けて勝負を争ふ。
 (三) 須彌山と釣換。須彌山は佛教で非常に大きく非常に高いと想像される山で其山と比較したものは自分の名であるとの意。

も……ウ、ウ、ウ、……うば……奪ひ取ッて歸りましよ。將監屹度見、『ヤア面倒な吃め。思案なかばに邪魔入る、其處立ッて往せぬか』と、叱られても怖るにこそ。イヤ膝とも談合と申し。口こそ自由なれ。心も腕も天下に怖い者はない。拙者が分別出だし。叶はぬ時は、ぶん正介定。彼方へ遣るか此方へ取るか、首賭の博奕。命の相場が一分五厘。浮世又平と名乗ッては、親もない子もない身柄一心、命は掃溜の芥、名は須彌山と釣換、俸の時から舊功なし、命に代へて申し上ぐるも、師匠の苗字を繼ぎたい望み計かり。拙者めを遣はされて下されませ。『申し申し。去りとしては御承引ないか。吃でなくば斯うは有るまい。エ、……恨めしい咽笛を掻き破ッてのけ度い女房共、

(一) 述懐 おもひのたけを述べたてる。
 (二) 殿とも言はぬ 武家時代には目下のものへの手紙は皆「殿」宛てにし目上へは「様」と書いたそれで今日以後は目下と見ずの様づけにしてあがめやうの意。
 (三) 矢竹 いさみあせる。

去りとは情ないお師匠ぢや』と、聲を上げてぞ泣き居たる。將監なほも聞入れなく、『片輪の癖の述懐涙不吉千萬。相手に成ッては果しなし。是々修理之介。御邊向ッて思案を廻らし、奪ひ返し來られよ。』『畏まッた』と云ふより早く、刀打込み立出づる。又平ひんずと抱き留めて。『マ、……まん！……まん……待ッて呉れ。師匠こそつれなくとも、弟子兄弟の情ぢや。此又平を遣ッて呉れ。殿とも言はぬ。スツす……！……すツ……！……すり様』『是りや又平。某矢竹に思ふても、師の命は力なし。此を放せ』。『イ、……否。ハ、……放さぬ』。『放さねば抜いて突くぞ』。『ツ、……つき……コ、……殺せ。ハ、……ハ、……放しやせぬぞ』。修理之介も持扱ひ、『放せ、放せ』と捻合ふたり。將

(一) 疎しのう
とまじと同じ意
義。何といふな
さけない。

監夫婦聲を懸げ、「放せ〜」と留むれども耳にも更に聞き入れず、女房取付き、「アレお師匠様の御意が有る。疎しの氣違や」と撈放せば、女房を取って投げ。はたと蹴て睨み付け、「己迄が氣違ひとは。エ、女房さへ侮るか。片輪は何の因果ぞや」と、どうと座を組み疊を打って、聲も惜まず歎きける、心ぞ思ひ遣られたる。將監重ねて「汝能く合點せよ。繪の道の功に依つて、土佐の苗字を繼いでこそ、手柄とも云ふべけれ、武道の功に繪師の苗字。譲るべき仔細なし。成らぬ〜」と云ひ切り給へば、女房居直り、「サア又平殿。覺悟さッしやれ。今生の望みは切れたぞや。此手水鉢を石塔と定め、貴方の繪像を書留め、此場で自害し、其跡のおくり號を待つばかり」と、硯引き寄せ墨磨れ

(一) 御影石 攝津國御影町附近に産する石。
(二) 王義之 號は右軍、支那の晋時代の書道の大家。
(三) 趙子昂 支那の宋時代の書畫の大家。
(四) 土佐光起 正史に依れば光起は土佐家三筆の一、法眼に叙せられ、當時狩野探幽と共に非凡の妙手と並稱せられた元祿四年歿す年七十五。
(五) 大頭の舞 慶長時代より流行した女舞。

ば、又平點頭き筆を染め、石面に差向ひ、「是生涯の名残の繪。姿は苔に朽つるとも、名は石魂に留まれ」と、我姿を我筆の、念力や徹しけん、厚さ尺餘の御影石。裏へ通つて筆の勢。墨も消えず兩方より、一度に書きたる如くなり。將監大きに驚き給ひ、「異國の王義之、趙子昂が、石に入り木に入るも、和畫に於ては例なし。師に優つたる畫工ぞや。浮世又平を引換へ、土佐の又平光起と名乗るべし。此勢に乗つて、姫君御朱印諸共に、取り返せ」と有りければ、「はッ」と計りに又平は、忝しとも口吃り、禮より外は涙に暮れ、踊り上り飛上り、嬉し泣こそ道理なれ。將監夫婦悦び、「心功にて志厚けれども、敵に向つて問答せんこと、如何あらん」と曰へば女房聞きも敢ず、「常々大頭の舞

(一) 連脇 謡曲にいふシテとワキのことか？
 (二) 屈竟 この上もない。
 (三) さんすぬ みじめな。みぐるしい。上方の方言。

を好き、妾諸共連、脇にて舞はれしが、節の有る事は少しも吃り申さ
 れず』と云ふ。『ヤレ夫こそは屈竟よ。試みに一節目出度ふ舞ふて立
 て』。『アツ』と答へて立上り、古き舞をみの上に、擬へてこそ舞ふたり
 けれ、舞去る程に鎌倉殿。義經の討手に向く可しと武勇の達者を選ば
 れし。夫は土佐坊、是は又、土佐の又平光起が、師匠の御恩を報ぜん
 と、身にも應ぜぬ重荷をば、おほ津の町や追分の、繪に塗る胡粉は
 やすけれども、名は千金の繪師の家、今墨色を揚げにけり。斯くて女
 房勇みを付け。『又もや御意の變るべき。早や御立ち』と勧めける。『オ
 オ美しくも申されたり。身こそ墨繪のさんすぬ男。紙表具の體なりと
 も、朽ちて朽ちせぬ金砂子』極彩色に劣らじと勇み進みし勢ひは、由

(一) 樊噲 支那の前漢時代の勇者。沛公の臣。
 (二) 張良 支那春秋戰國時代の末に生れ前漢の高祖を輔け天下を平定した人。
 (三) 土を反さぬ 云々 地を掘返す程の殿しさ。
 (四) 七つ 今日の午前四時。
 (五) 門立 出發。
 (六) 上臈 貴婦人。

由し、頼もし我ながら、天晴繪筆のけなげさよ。唐繪の樊噲張良を、
 楯に突いたと思召せ、お暇申して去らばとて、打立ち出づる勢ひは、
 誠に諸人の繪本ぞと、オ、譽ぬ者こそなかりけれ。逢坂の關、あけば
 の近きひ用心の、聲たか島の屋形には、六角殿の姫君、行方見えさせ
 給はぬとて、旅人の改め、問屋の詮議、土を反さぬ計りなり。又平は
 今朝七つ立、門出祝ふ中椀に、例の熱燭三杯引懸け、打立ツ所に、や
 びとなき上臈の、跣足の土に身も崩折れ、ふし見の方よりうろくくと、
 『是其方者京の道を教へて呉れ。草鞋とやらいふものを履かせて呉れ』
 と、詞付の大柄さ。又平むツと貌に立開かつて返事もせず、女房走り
 出て、大抵のお方でない。威は備つた、見所ありとお側に参り、『恐れな

(一) 反打 刃の方を下に向け將に斬り、らんとする姿勢。
 (二) 居合 狭い所で長い刀を抜く技術。
 (三) 拜打 眞向から左と右とに斬りつけること。
 (四) 埴生 邊鄙の地。片田舎。
 (五) 所存 心んがへ。意見。
 (六) 走り井 大津で名高い良水。

がら、お屋形の姫君様と見参らす。我々は土佐の將監が弟子、吃の又平と申す繪師の夫婦、狩野の弟子雅樂之助に頼まれ、お迎ひに参る折柄なり。必ず包ませ給ふな』と、囁けば嬉し氣に、『オ、自こそ銀杏の前。道犬雲谷が追手透間なし。好い様に頼むぞや』と宣へば、又平土邊に額を摺付け、悦びの色勇みの色。氣を急げば尙物言はれず、心を仕方の腕捲り。力味、反打、居合の眞似、抜打、撫切、拜打、組合、捻首、手に取って、握拳の武士氣を現し、埴生に隠匿ひ参らす。夫婦が所存ぞ頼母しき。程なく八町はしり井の、問屋組頭。組町引具しおこし反ッて聲々に、『六角殿の姫君、朱印を盗み出で給ひ、御家老より御詮索。裏屋小路も改めよ。別して繪師は家捜しある。人は勿論犬

(一) 着込の兵 衣服の下に一種の鎧を着込んだ軍兵。
 (二) 一期の浮沈 我が生涯に最大の難儀ふりかかった場合。
 (三) 亂次 とりみだす。

猫も、内を出すな』と裏口門口はたくと、さしもの又平取籠められ、狩場の鹿の如くなり。不破の伴左衛門長谷部の雲谷、着込の兵百騎計り、群立ち來ッて家々に、押入りくく搜しける。又平一期の浮沈ぞと、女房諸共姫君を押圍ひ、隣をがはと蹴破りて、ぐつと抜けたる壁厚き、氷の様なる大刀物、差出す首を片端から、『き、き、き、き、き、切り並べん』と、壁に添ふてぞ突立ッたり。雲谷聲を掛け、『ヤア、是ぞ音に聞く、土佐が弟子吃の又平めが住家なり。敲き壊して搜して見よ。』『承る』と一番手、『捕ッた』と捕ッた。『と哄と寄せしが、亂次になッて引返し。』なう怖や。凄じや。何かは知らず家内には、人大勢みちくく或は奴の形もあり、又は若衆女もあり、人間は

- (一) 三文繪 つまらない繪。出來合ひの繪。
- (二) 蔀 日除けの戸又は日覆ひのこと。
- (三) 精靈 たましい。

かりか猿、野猪、鷲、角鷹。爪を研ぎ立て、眼を怒らし、寄り付かる事てなし。なう〜嫌や」と身震ひし、舌を巻いてぞ恐れける。「何を吐す狼狽者、人三人とも生まれぬ荒屋、何者か有る可きぞ。察するところ、見世に張つたる三文繪を生物と見違へしか。怖いと思ふ心から、眼が眩んだ腰抜共。それ〜蔀を振放せ。緩い〜」と下知すれば、鳶口引懸け『るいや〜』と難なく見世を放しける。内を見れば不思議やな。云ひしに違ひもあらぬ奴の影とも分ず幻とも、未仄闇き曉のとり毛の鎗先揃へしは、土佐が魂寫し繪の、精靈なりとも知らばこそ。我も〜と驅向ひ、打てども突けども手に取られぬ。「露の命を君に呉れべい」と、染めし臺なし嫌ひなし。相手選ばず防ぎたり。

- (一) 粕奴 人を罵つた語。
- (二) きどく頭巾 元祿時代の婦人が被つた頭巾で「おこそづきん」の類。
- (三) しとし たたかに。
- (四) 鉢叩き 寒中一定の時期に空也念佛の僧が瓢を叩き經文を唱へて物を貰ひ歩くこと。

雲谷が弟子長谷部の等嚴「數にも足らぬ粕奴。我に任せと捲り懸かれば、片肌脱いだる立髪男。大盃をひらり、ひらりと閃めかし、眉間にふつたる唐辛子。オ、辛らオ、辛らから錦。黑白も別かず引返す、師匠の雲谷堪り兼ね、片端より打ち挫ぎ、手並を見せんと飛んで懸かる。優しや優者の女業にはきどく頭巾。藤のしなへを押取り延べ、引纏ふてはたと打つ。しと、打つをひらりと外し、受けつ、解いつ、麻衣の玉襷、甲斐〜しき若き法師の現れ出で、勇み懸かれる有様は、(雨無) ねみや鯨の瓢箪〜、持ッて開いてはち叩き。叩けば〜り、打てば〜り。ぬらり〜と手に堪らず、倦み果て、ぞ支へたる。不破が郎黨犬上團八。「其所退き給へ人々」と、打つて出づるや現の闇の、座頭一人

コ、〜愛には片時も叶ふまじ。都の方へ」と姫君を、オ、〜
 オ、おほ坂山の時鳥、未だ初聲の口は吃り、心は鐵石かな願に、勝ッ
 た優れた、越えた峠は日の岡の、石原、草原、足も亂次に、ど、〜
 吃り廻りての、〜〜登りける。

中の巻

(一) 足らぬ三筋町 起句の「ひつじさる」をうけ猿は人間に比べて三本だけ毛が足らぬといふ俗諺を利かせたもの。
 (二) おろせ つかき。駕昇。
 (三) 南蠻頃 南蠻うつしか？
 (四) 御物蒔繪 貴人の所有品を眞似た蒔繪。
 (五) 天川 支那の瀉門港。最上の珊瑚は最初に瀉門港から我日本に渡來した。

里は都のひつじさるなり。通ひても通ひ足らぬぞ三筋町。西の洞院中道寺。右衛門が馬場の一方口、未だ大門の遅櫻、忍びて開け一番門の東が白む。ドン、どんと打つたる太鼓の番太、「何者やら大門口に切られて居る」と呼はる聲に、忘八屋揚屋茶屋おろせ廓の年寄立合ひ、見れば年頃三十計り究竟の侍。二つ重ねの白無垢白茶宇に縫紋紅裏に、源氏雲の裾ぐみ、南蠻頃の大小。對の金鍔、毛彫は波に山王祭七所。御物蒔繪の印籠。天川珊瑚珠は然もなくて、大疵五ヶ所、肝先に止め有りと委細に書付け。管領所へ訴へさせ、死骸を圍ふ横梯子、二

- (一) 大盡 遊廓にて全盛遊びをする客。
- (二) 物見高く 相競ふて見たがること。
- (三) 檢使 事實の見届けをする役人。
- (四) 雜式 管領の命令を執り行ふ役目の人。
- (五) 意趣 うちらみ。遺恨。

階から女郎買手、遣手の龜は首伸し、松は寢惚た顔出し、未だ起きく
 の禿共、常彌幾野と手をひき舟も走り来て、扉に鞍掛け木に取付き、
 『薫様あれ見さんせ、吉野様の大膽な、掃溜山へ上ツて、海老の皮で
 足突かんすな』。『突たら大事か。切られて死ぬる人さへ有る』と仇口
 々の喧しさ。『彼の切られて居る人は、葛城様の大盡、不破の伴様に
 似たちやないか』。『真に然うちや伴様に極まつた』。『サア伴左衛門が
 切られた』と、京童の物見高く、手負ひ見がてら傾城見に、群集は押
 しも分けられず。すはや檢使と人を拂ひ、管領の雜式供人引具し、死
 骸を解いて疵改め、『江州高島の執權、不破の伴左衛門に極ツたり。
 扱此者の買ふたる傾城は何と云ふ。意趣有るものの覺えはなきか。口』

- (一) 口書。申し述べた事柄又は罪人の白状した事實を書きしるしたもの。口供書。

論等はなかりしか。眞直に申せ。當分隠して後日に知れなば、曲事なり
 り』とぞ仰せける。年寄罷出で、『上林の葛城と申す太夫を、千二百兩
 にて請出さる、筈の所、名古屋山三と申す浪人衆と葛城と、行末深い
 約束とて、談合なり兼ね申せし故、兩方意趣を含み居られしが、是な
 らで覺え候はず』と、詳かにぞ云ひ分くる。雜式一々口書し、『名古屋
 山三は浪人成れども元は伴左と朋輩。旁大事の詮議なり。先づ葛城
 が遣手と呼べ。遣手出ませ』と呼ぶ聲に、玉は臆病年寄なり。『ヤラ
 恐しや私が出て何と云はふ。縛られたら何うせうぞ。なう悲しや目が
 眩た。氣付はないか』と泣き居たる。『是では埒が明くまい。どれぞ機
 轉な遣手衆を、頼んで見ん』と云ふ内に、『出ませ〜』と頻りの使。

(一) 鋭氣なうて云々 まつたりとして智恵があるとの意。
 (二) 闇魔の廳 佛教で死者の罪惡を審判する役所をいふ。
 (三) きやうとい事 おもひもかけぬ事。
 (四) ゑづ 思ふても胸がわるくなる。

『エイ思ひ付た。一文字屋の和國に付いて居る宮と云ふ遣手は越前の敦賀で、遠山と呼ばれた全盛の太夫。戀ゆる今は彼の體。鋭氣なうて智恵満々。闇魔の廳でも云ひ抜ける。此宮を頼まう。彼れ〜彼處へ大福帳擔げて来るは、宮ぢやないか』と云ふ所へ、おしよば紫の忙しげに、『皆さん是に御座ります。まあ〜きやうとい事が出来まして御苦勞で御座んす』云ひ捨て通るを、『是々お宮檢使の衆葛城の遣手を召さるれども、玉は愚鈍で臆病なり。何をお問ひなされうやら、云ひ教へて濟まぬ事。曲輪中の頼みぢや。葛城が遣手に成つて出て、請返答爲てたも。恩に受けう』と云ひければ、『彼の死骸の傍へ出る事か。ア、ゑづ。去りながら嫌といふも仔細らし。言ひ損ふたら大事か、口

(一) てんぼの皮 まいよ。それでは仕方がないの意。
 (二) 氣隨者 わがまいもの。
 (三) 辨慶遣手 辨慶の七つ道具それほどに遣手の仕事が多い。
 (四) 緋の袴 遣手は常に赤前垂である、其赤前垂を緋の袴と見立てい。

に任せて遣ツてくれう。てんぼの皮とぞ出でにける。雜式鐵鞭横へ、『おのれは葛城が遣手めか。用有ツて召し出すに何として遅なはる。横着もの、氣隨もの』と、嵩を掛けて叱らるゝ。『ア、彼のさんはいの。頭から叱らんす。何の氣隨で御座んしよ、十二人の太夫様を、一人して廻せば、辨慶遣手がいそがしさ、口舌の中を押隔て、打物わざにて叶ふまじと、日に幾度の詫言やら。夜の身持は揚屋の吸物同然。ちよツちよと座敷へ出る度に、一杯づゝも飲む酒に、ふら〜眠りの行倒れ、朝から晩まで緋の袴。花色縹子の巾着も、中はあきの夜の長紐、提げた鍵の穴から天を覗けばほの〜明け。妓様達の身仕舞、風呂の、手洗水の、髪洗の、鍋よ、杓子よ、臼よ、杵よ。正月

(一) 卯腹辰股
灸を點ずるに卯
の日は腹に、辰
の日は股にすえ
るのを思む。
(二) 背中に腹云
云「背に腹はか
へられぬ」の諺
なきかして。
(三) 皮切 する
始の灸の熱さ。
(四) 奉加。加へ
奉るの義即ち神
佛に寄進する中
に加へ奉つて同
じく金品を寄進
すること。
(五) 親懸り ま
だ親に保護を受
けてゐる身。

仕舞へば節句朔日。今日は二日の拂日なり。灸も据たし卯腹辰股背中
に腹。商賣には換へられず、皮切堪へて出る心。其様に言はんすな。
廓は諸國の立合、常住切ツての撲ツての是程の喧嘩は、お茶の子
茶の子ぞや。ア、仰山な』と笑ひける。雜式怒ツて『いやさ己が身の
上は問はず。此伴左衛門千二百兩にて葛城を請出すとな。傾城は賣物、
直段極まる上からは、名古屋山三が障碍言ふても叶はぬ筈。然るを違
亂に及ぶとは、汝奴等が騙と覺えたり。斬手も知らいで叶はぬ筈。眞
直に申せ』と、詞荒く問懸くる。少しも臆せず會釋して、『御意の通り
賣物とは申しながら、神佛の奉加と同じ事で、銀出しながら拜まする
は、恐らく世界に傾城はッかり、買ふて呉れるが嬉しいとて、親懸り

(一) 引舟 引舟
女郎の略。遊女
として下位に屬
するもの。
(二) 目の鞘外す
目を光らせて
ゐる意。

やお主持の、懸路の闇の一寸先、見えぬ所を傍から見て、買人のお身
も廢らず、女郎も逆上さぬ様に、舵を取るが引舟、目の鞘外すが遣手
の役、大事に懸ける證據には、世間に心中十あれば、廓に一つ有るか
無し。伴左様は御大身、お銀に不足も有るまいが。御主人のお耳に立
ち、お身の害とも成る時は、御一門の評議に上り、人を剝ぐの欺すの
と、落つる所は廓の難、此處の意氣を立てるが色里のたしなみ。身請
の談合破れたも、伴左様のお身の上、大事に思ふ上の事で御座んす。
道で切られさんしたのは、其處までは存じませぬ。定めし死にともある
まいし、尤も遁げても見さんしよし、其處に如才も有るまいが、先の
相手が強いが、身の取廻しの悪さか知らんでやんす』と答へける。檢

- (一) 持扱ひもてあますこと。
- (二) 夜前よりの買手 昨夜からの遊客。
- (三) 名所 姓名と住所。
- (四) 水を呉れる云々 きびしく取調べるからとの意。
- (五) 悪業なわるじやれ。

使の人々持扱ひ『能いわ〜もう黙れ。一時に詮議成り難し。死骸を酒に浸し置き、後日の評定たるべし。それ〜』とて役人共。桶を調ひ死骸を納め、酒汲み入れて繩搦み牢屋へ遣れと昇上げたり。雜式重ねて、『年寄〜。商賣なれば傾城には構ひなし。去りながら夜前よりの買手共、事済むまで名所を、一々書留めよ。コリヤ遣手め、重ねての詮議には、水を呉れる用心せよ』と、脅して立てども怖もせず『エイ置かんせ。銀呉れる遣手に水呉れるとは悪業な』と、笑ひを機に云ひ白け、先を拂ひて立歸る。權威を見せて突き鳴らす、鐵棒の音、三味線にひき換はりたる三筋町、戀の市場となまめかし。名古屋山三春平は、通ひ馴れにし六條の、道には石が幾つ有るまで、讀み覺えたる

- (一) 一貫 町名と共に九十六の數を意味してゐる。
- (二) 平のともとは「供」及び「知」とに通ひ、謡曲の「知盛」をきかした。
- (三) 外様 公儀御役所。
- (四) 此傳三が云云 この傳三の男が立たぬとの義。

一貫町の、茶屋がよし簀の、よしやよし。里に擲つ命ぞと、大門口の與右衛門も、門番には二代の後胤。平のともして口軽く、舞鶴屋にぞ入りにける。亭主傳三を始めとし、數多の女郎遣手まで、『是は〜』。様子はお聞きなされうが、先づ四五日もお出でなされぬが好い筈。日頃意趣有る伴左衛門、斬手は名古屋山三ちやと、何處ともなしの取沙汰。葛城様のお案じ、我等夫婦の氣遣ひ。此宮が辨舌で、今日はすらりと遣りましたが、伴左衛門が死骸を奈良漬にして後日の詮議。殊にお客の名所書記せとの言付、お身に覺えがなうてから、せんき萬きも喧しい。お前を外様へ 踞せては、此傳三が立ちませぬ。帳面に留めぬ間に、先づお歸り』と云ひけれど、『イヤ傳三左様でない。お手前こそ

- (一) 妓交り 遊女との交際。
- (二) 言ふ程古い いふ迄もない 實に言葉にはつくされぬ。
- (三) 葛様 葛城太夫の事。

「懣。廓中女郎衆へ、苦勞を懸けた此山三が、詮索に逢ふ悲しやと屈んで居る程ならば、里通ひも妓交りも、頭からせぬが好し。先づ和國様からお禮申す。大事の遣手をお貸しなされ 忝ない。扱宮の働さ、志。詞の禮は言ふ程古い。三千石取ツた山三が、手を突いて頭を下げる。額に千石、兩の手に二千石、主人の外一生に、此式作法は宮一人。是が禮ぞ」と手を突けば、「ア、勿體ない。何のお禮が入りませう。一寸葛様に逢はせて去なせまし度い物ぢやが、私が行けば目に立つ。和國様一筆進せて下さんせ。」「イヤ文も如何ぢや。私等直に誘ふて、遊びに出る貌で、連れまして來ませう。サア皆御座んせ」と、座敷をこそは立ちにけれ。『然らば爰は人も來る。二階へお通りなされ』と言へば、

- (一) 身が取持 予が世話して。
- (二) 外戚腹 妾腹の子。
- (三) 狼籍 亂暴を行ふ。

「ヤレ何が怖うて隠れうぞ。伴左衛門を切ツたるは誰とか思ふ、此山三が手に懸け討ツて捨てたるぞ。葛城が意趣は僅の事、彼奴と朋輩たりし時、狩野四郎二郎を身が取持にて、奉公に出だせし所に、伴左衛門親子雲谷と云ふ繪師を引き、御在京のお供の留守、無實を言懸け及傷に及び、四郎二郎は行方知れず。剩へ外戚腹の姫君銀杏の前、四郎二郎に心を懸け、御祝言有る筈を、妨げ入れて狼籍し、某までも譏奏し、浪人の身となりたれば、重々の遺恨有り、殊に四郎二郎は隠れもなき名筆。大内繪所の官にも進む身を、某強ひて國に留め、難儀を懸けて見て居られず、姫君と夫婦に爲し、四郎二郎さへ出世すれば、本望。生けて置かば四郎二郎に如何なる仇をか爲す可きと、傾城の意

(一) 惜しいと思ふにこそ 惜しくは思はぬ。
 (二) 武家に生れた不肖には 武士の家に生れた此身であるからには。
 (三) 天柱 三味線の絃を巻いてある箇所。また「轉手」と書く。
 (四) 色違へ 顔色をかへて。
 (五) 仇口 むだぐち。
 (六) 二世 現在と未來。

趣を幸に、討て捨てたる伴左衛門。知れて切腹する計り。四郎二郎故に捨てん命、聊か惜しいと思ふにこそ。武家に生れた不肖には、大門口で立腹切り、新造衆や禿共、芝居で爲るよな事して見せう。ヤア葛城は如何ぢやの。亭主謠へ」と三味線の、天柱に顔を筋違身。絃の音色も目の色も、人を切つたる躰はなく、亭主は結句色違へ、「先づお咄はいらぬ物。内外の者共必ず仇口聞くまいぞ」と、わな／＼慄ひ手酌にて、滅多に呑んでぞ居たりける。宮も聞くより驚きて「扱は我二世までと、思ひこふだる四郎二郎様に、斯く迄深き恩を見せ、お命をも捨てんとは、ア、頼母しや忝や。我こそと名乗つて一禮言はうか。否々姫君とやらへ聞こえては、御祝言の邪魔ぞと遠ざけらるゝ

(一) 推参 おしつけがましく。出過ぎた。無作法な。
 (二) 彼の様 名古屋山三のこと。彼のお方の意。
 (三) 粟田口 地名。
 (四) 下から云々 お上の意見は下から量り知ることが出来る。

は知れた事。只餘所ながら彼のお方の爲に成り、お命を助けるこそ我夫への奉公」と、思ひ定めて「コレ傳三様。お侍の覺悟の上を女子の了簡推参な事ながら、彼の様に腹切もせ、恩を受けた四郎二郎、何國の浦で聞付けても、よもや生きては居られまい。人の由縁は知れぬもの。何れから何れへ如何つゞきて、誰が悲みとならうやら、山三様のお身の難。脱るゝ工面は有るまいか。思案は今で御座るぞや」と、他所を言ふのも夫の事。案じて餘る涙の色、胸撫でおろすも道理なり。「オ、汝が言ふ通り。追取つて廊の迷惑。お仕置には法が有る。腹切りたいと仰やつても、能う暖かに、見苦しい罪に、あは田口、したから如何も量られぬ」と、云へば山三はツとして、「ア、ウ好い所へ氣が付

(一) 獄門 徳川時代の極刑の一つ。死人の首を切つて之れを晒すこと。
 (二) 肌を合せ 心を合す。
 (三) 手形の日付 云々 証文の日付をズツと以前の事にして。

いた。三味線どころでないわいの。相手は主持、此方は浪人。暴れ者に仕なされ、木兎の留ツた様に獄門などに曝されては、先祖一家の恥辱、今さツぱりと腹切ツても、其段からは死骸まで、彌恥は重うなる。エ、主持たぬ身の無念さよ」と、齒切をしてぞ涙含む。宮は聞くほど我男の、身に逼り来る悲しさの、『何卒好い分別して、進めて下され頼みます』と、身に引懸けて歎く躰。亭主暫く思案し、『是々好い仕様有り、爰へ寄りや』と小聲に成り、『是を序に葛城様を、とんと請出し、奥様に定める、時に親方と肌を合せ、手形の日付をとツと跡の月にして、外様へは借宅見立の其間、廓に少し逗留分、すれば疾ふから御夫婦と云ふものよ。昨日まで伴左衛門が口説いた狀文握ツてからは密夫

(一) 女敵 その婦人に就て敵視する相手。
 (二) 無上 むやみ。
 (三) 加判 連印。
 (四) 重代 先祖代々所有。
 (五) 左文字 長門鍛冶右衛門太夫源慶、正宗十哲の一人、文和五年歿。年八十。
 (六) 折紙 鑑定書。きはめ。

の證據儘なり。女敵討は天下のお許。千人切ツても切り徳。此分別はどう有らう。宮は悦び、『オ、出来た。目出度い。智恵者奴』と、煽ぎ立つれば、『ア、無上に目出度がるまい。當分請出すお銀がない。若しお腰の物を夫迄の質物に遣はされれば、私が加判で太夫様を唯た今門を出して見せませうが、お侍にお腰の物とは、なうお宮何うも申し兼ねるわいの。』ハテお主のお身ばかりか。不憫になさる、四郎二郎まで、命を助ける事なれば、御了簡遊ばしませ』と、手を合せるやら歎くやら、山三も共に涙を浮め、『オ、何が扱、皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と云はうぞ。近頃過分千萬。コレ是は重代の左文字、二千五百貫の折紙あり。惜しとは思はねども、七歳の時より今日まで

(一) 鮫鞘 鮫の皮で巻いてある刀の鞘。
 (二) 卷添 質草のたし。
 (三) 惣嫁 辻君のこと。京阪地方の方言。
 (四) のら粗略云云 なみ大抵でない、好んで成つたのではないとの意。

遂に脇差一本で、他所に居た事知らぬ身が、刀の冥加に盡きたか」と、涙は雨やさめ鞘の脇差計りて奥に入る。後姿を見送りて、「お愛しや〜。傳三様何卒首尾して下さんせ。卷添へが入るならば、私が縋子の帯もある。八丈の袴も御座んす」と、歎けば共に泣聲の、「オ、奇特に好う云やツた。己も男ぢや氣遣ひすな。女房を惣嫁に賣つてなりと埒を明けぬと云ふ事は、ないて出づるぞ頼母しき、宮が憂身の憂き思ひ、口で言はねば氣に支へ、目に流るゝは百分一。胸に涙の滯り、山三様に骨折るも、男の心の悲みを、思ひやりてと成つたるも、のら粗略で成られうか。戀が嵩じて遠山が、此態に成つたとは、知らぬか聞かぬか男めが、何所に居るやら死んだやら、梨も礫もうつとりと煙

(一) 土に成つても云々 死んで土中に葬られた後でもの意。
 (二) 物日 遊廓で特別の儀式のある日。
 (三) 在所 現在の住所。

草喫でも、煙管より喉が通らぬ薄煙。人の見ぬ間に思ふ程、泣くを所在か味氣なや。内を首尾して葛城は、走つて来るより駈上り、「宮殿爰にか、甚い世話で有ツたげな、忝いぞや、土に成つても忘れはしませぬ、己が心を察してたも。真に〜物日中に瘦せたわいな。和女は今は何の苦もなうて樂である、遣手の身は羨しい。山様は奥にかの、一寸逢ふて來うぞや。後に〜」と云ひ捨て、行くを見るにも猶涙。「辛いぞ憂いぞと云ふ中にも、男を傍に引付けては、憂を凌ぐも力がある。此身には苦も有るまいとや。明暮つきあふ人目にさへ、樂な様に見えるもの。遠國隔てた男氣に、思遣りの無い事は、無理とも言はれず去りとしては、せめて在り所が聞きたい」と、聲を立てねば歎歎

(一) 相の山 音曲の節の一つで伊勢國の内宮と外宮との間で歌ひ出したもの。
 (二) 寂滅爲樂 物は神寂滅となつて安樂を得との意。
 (三) 胸脹 眞最中の意。
 (四) 血脈 南無阿彌陀佛七字の名號を書いた高僧の筆蹟。

氣も沈み入る時しも有れ、心細げな胡弓の聲、哀れ催す相の山、我に涙を添へよとや。相の山「ゆふべ朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人も無し」。『通りや、只の時さへ相の山聞けば、哀れて涙が溢れる。悲しゆて成らぬ胸脹に、あだ聞きともない。通りや〜』と言ひて涙を押し拭ふ。相の山「野邊より彼方の友とては、血脈一つに珠數一連、是が冥途の友と成る」。『ア、舌垂い、手の隙がない、通りや〜』と言ふ聲に、心に苦の無い新造禿、ばら〜と走り出て、『此方等好きぢや相の山。聞いて泣きたい所望〜』と立懸かる。『エ、意地の悪い子供ぢや。夫程何が泣きたい事』遣ッて去なると巾着の、紐を解いて取出す、錢は一錢二世の縁、切れてもきれぬ笠の中、泣沈みたる

(一) 咽び綻びむせび泣く。
 (二) 憂き命云々 悲しい味氣ない月日を送つて生きながらへて來たの意。

顔見れば、戀し床しの四郎二郎、互にハア、ハア、と計りに、目暮れ心は染々と、抱付きたうにも四邊には、禿が目元小賢しく、堪へるだけと包めども、咽び綻び泣き居たり。『ア、去なせましたらよい物か。ま些と哀れな心を謠ふて聞かせて下さんせ』。『あッ』と涙にする態、胡弓の弦も細き聲。相の山「定めなき世に捨てられて、身の寂、滅が知らせたく、文は書けども便りなく、獨り寢覺めの友とては、夢に見た夜の面影が、是が寢覺の友となる」。折しも二階奥座敷『來いよ〜』と手を拍く。『あい〜』あいと禿共、立つ間遅しと走り寄り、『是斯うした事も有らうかと、憂き命をも捨てななんだ。能う顔見せて下んせ』と、龜れば男も抱き締め、涙の外は聲もなし。『喃戀しいの床しいのとは、

(一) 遺瀨がない
思ひを晴らす
方法がない。
(二) 不慮 おも
ひがない。
(三) 蘆屋釜の下
繪 太閤秀吉公
の好みにより狩
野元信が蘆屋釜
の下繪を書いた
ことは記録に残
つてゐる。蘆屋
釜は上品なる茶
の湯の釜。

大抵戀路の慣ひぞや、夫をとんと打越して、主親方にも背きし故、奈
良伏見まで賣渡され、今此京で遣手となり、花の都も我身には、鬼界
が島に住む心。鞭凍瘡に苦しめても、手足の苦勞は成りもせう、心を
痛める計りぢや無い。力業にも才覺にも、叶はぬ物は逢い度いと、思
ふて遺瀨がなかつた」と、甘え口説くぞ不憫なる。四郎二郎も盡させ
ぬ涙。『オ、道理、最惜や、度々文でも云ふ通り、和女の蔭にて大事の
繪を描き譽れを取る、契約違へず身請を爲うと思ふ間に不慮の事共、命
が有ると云ふばかり。恩を着た名古屋山三我らゆるるの浪人、行先も
目出度いと云ふ字は書様も忘れて、今は團扇の繪、蘆屋釜の下繪に露命
を繋ぎ、大津で問へば奈良にと云ふ、難波で聞けば伏見とやら、是は

(一) 前垂鍵 遊
廓の遣手は赤
前垂で前帯に巾
着と鍵とをさげ
てゐた。
(二) 是沙汰。こ
の噂ばかり。

采女雅樂之助、二人の弟子の介抱で、丸四年目に顔を見て、嬉しい事
は何處へやら。己と云ふ者ないならば、疾うに能い仕合せ、前垂鍵は
下げまいと、親御の事迄思はれて、生きた心はせぬぞ」とて、男泣き
に泣きければ、『左様打明けて下んすが、ほんくの御眞實、私はいつ
そ親の事、思ふ所へ往かなんだ。私に罰が當らずば、當る者はあるま
い』と、口説き立つれば四郎二郎、二人の弟子も共涙。鯉の竹も古
の、紫竹に染むる計りなり。稍有りて四郎二郎『先づ言ふべきは名古
屋山三春平、此所にて不破の伴左衛門を討つて、詮議に遇ふよし、洛
中の是沙汰。遺恨の元は某ゆる、聞き捨て置かれぬ挨拶。廓の説は
如何ぞ』と言へば、『去ればいなア、詳しい事も聞きました。山三様に

- (一) 人外の名人でなしとの評判。
- (二) 決しう決して。
- (三) 餅屋のお福。昔は餅屋の看板に馬とお福の面とがあつた。そのお福の面といふ意。
- (四) 山姥。昔の傳説に、山に住むといつた怪物の婦人。

爲る世話は、貴方への奉公と、さまよひ心を碎いて、何の波風ない様に、十の物が九つ、追つ付け罫が明く筈で、あれ奥にちやわいなア。『是は大慶。先づ通ツて對面せう。』『イヤ〜待たんせ。夫りや成らぬ。貴方を尋ね出し、姫君と夫婦にせねば侍が廢ると、今も今云ふた人に、逢はずと去んで下さんせ。』『エ、愚痴な事ばかり。我故に一命を果さうと云ふ山三ぢやないか。逢はずに歸つて人外の名を取れか、決しう逢はせまいなれば、爰で腹を切らうか』と、脇差に手を懸くる。『ハテ死なんせではないわいの。外に奥様持つまいと云ふ誓文立ツて逢はんせ。』『オ、姫君は扱置き假令餅屋のお福でも、山姥と祝言するとても、山三が詞を一旦立てずに置かれうか、エ、世間見た様にも無

- (一) 息災 無事 壯健。
- (二) 男の面役 男の顔に對してもの意。

い。氣が狭いぞや』と恥しむる。『世間は唐土まで知ツても、氣は武藏野程廣うても、大事の男を人には添はさぬ。山三様に逢ふて四郎二郎が女房は此宮で御座んすと、罷出て斷らう。』『オ、云ひたくば言や、詞の中に脇差を此腹へ突き込む。サア如何ぞ〜』と詰られて泣くより外は何を云ふも大切さ。『其んなら言ふまい。息災で居て下んせ、去りながら何卒言ひ抜けるらるゝなら言ひ抜けて見て下んせ』と、未だくど〜の忍び泣き。『尤も〜男の面役、斯う言ふとて、何の如才があるものぞ。弟子衆此方へ』と涙ながら、奥へ行く間も惜しまれて。『コレ采女様、雅樂様。祝言の咄が出たら言ひ消して下さんせ』と、頼む返事の否應はなみだに紛らし入りにけり。心許なさ危さに、心騒ぎて落着か

- (一) 差足 音のせめやうにおろす足。
- (二) 一札 かきつけ。證文。
- (三) 御繪旨 みことのり。
- (四) 高直 價格がある。直段が高い。

ず。襖の際に差足し、立聞すれば伴左衛門を討留めた物語。ア、嬉しや女房事は出ぬさうな。最些と聞かう。彼の耳語は何ぢや知らぬ。聞き度いまでと耳を寄せ、ア、悲しや。連れて歸ッて姫君と、女夫に爲うと云ひくさる。此方の男が利口さうに、此方の詞は背きませぬと、吐し面は何事ぢや。エ、聞くまい物を腹が立つと、耳を塞いつ、立ちつ居つ、身を揉み歎くぞ哀れなる。舞鶴屋の傳三郎、遣手、引舟、下男。息入切つて大聲揚げ、『コリヤ〜』。葛城様の身請けさらりツと埒明いた。跡の三月二日に暇を遣るとの一札。王様の御繪旨より高直な物握つた。乗物の戸をぐわらりと明けて、今でも大門お出なされ』と喚く聲に、人々悦び走り出で、『ア、〜お手柄〜。酒呑童子の首より取難い事。

- (一) 數ならねども 物の數に數へられる程の立派な身分ではないがの義。
- (二) 待女郎 婚禮の時に新婦の附添役となる女をいふ。
- (三) 投首 思案にくれて力なくうなだれた形。

主持ぬ身は爰が過分。手を引き合ふて門を出て、名古屋山三と葛城と、後々迄の咄を残さう。ヤア亭主近付きに成つて置きや。狩野の四郎二郎元信、廻り逢はう計りに、互の苦勞は知る通り、身は葛城を請出す。四郎二郎は大名の、お姫様を掘り出す。祝言の夜は勝手へ見舞や。扨宮の禮は今申さぬ。前垂鍵を捨てさせ、武家か公家か町人か望み次第に、數ならねども拙者が親分。先づ姫君の祝言には待女郎に頼まう』と、勇み掛けても投首に、目も泣き脹して返事も爲ず、堪へ兼て突ツと出で、云はんとするを四郎二郎、柄に手を懸け腹を擦れば手を合せ、泣く〜退れど猶黙られず、思ひ切ツて言はんとす。四郎二郎胸押明け、既に斯様よと見せ懸くる。『ア、〜申し四郎二郎様私や何

(一) 乗物古い
駕籠にて大門を
出るは古めかし
い。
(二) 天神 遊女、
太夫の次位。
(三) かこひ 遊
女、天神の次位。

にも申しませぬ。御息災で姫君と夫婦に成つて下さんせ」と、わつと
叫び伏しければ、共に堰き来る四郎二郎「オ、能い合點〜。廓の衆
は涙脆く、目出度い事にも泣きたがる。身請する女郎衆に名残惜しい
は尤もながら、他國へ行かず死には爲せず、追付け逢はう泣きやるな」
と、外に言ふさへ包み兼ね、目はうる〜となりけり。「サアお乗物
が参つた。早うお出で成されませ」。『いや〜乗物古い』と立ち出づ
れば、一家の太夫、天神かこひ「葛城様去らばや」。『去らばて御座ん
す』。門迄送れ跡賑かし。打つたり舞ふたり舞鶴屋、傳左が萬受け込
だ。「置土産をやり手衆、お春、お夏」と勇めども、宮が心は空殻の、
腰の巾着ぶら〜と、物淋し氣にぞ見えにける。花の三月早や過ぎて、

(一) 社人 神社
に仕へる人。か
んぬし。
(二) 家の子め
しつかひ。
(三) 檜皮 染色
の名、黒味が
つた蘇枋色。
(四) 六尺 かこ
かき。
(五) 徒士衆 徒
歩で駕籠に従ふ
武士。身分の低
いさむらひ。
(六) 女の際 女
の身。女であり
ながら。

娘の年も二十棹。何時の間にかは長持に、桐の葉茂る嫁入月。银杏の
前の御祝言、名古屋山三の計ひにて、四郎二郎元信を、北野の社人に
かり座敷。名古屋が家の子世繼瀬兵衛與添にて、供女中の扮装や。地
黒、地淺黄、紅、檜皮、うこんの馬場にぞ着き給ふ。並木の櫻暮れ懸り、
未だ人顔も、しろ無垢着たる若き女の横合より、嫁入の供先押割り
〜、打つも敲くも事ともせず、確かと錠ツて引く程に。乗物の戸は
碎けて離れ、姫君あつと叫び給ふを、胸倉掴んで引摺り出し、土堤に
押し付け引据たり。瀬兵衛刀の反を打ち、六尺徒士衆追取り廻し、「其
所を放せ放さずば、擲殺せ捻殺せ」と、口々に呼はれば、姫君制して
「ア、黙ツて居や。構やるな。嫁入する身に女の際で、只の事とは思

(一) 理不盡 無法。無理。
 (二) 口は陸地云云 口では立派に筋道がわかつてゐても。
 (三) 頭の懸かりが どういふてよきか言ひ出す折が。

はぬ。四郎二郎殿の妾か、但し時の戯れに、末では妻にせうなどと、男の當座間に合を、一筋な心から、其恨みで有らうの。我身に知らぬ事ながら、殿を持つ役なれば聞くまいとは言はぬ。道理さへ立つ事で、負ける道なら負けませう。又筋もない道言ッて見や。我にも手も有り足も有る。銀杏の前が理不盡と言はれては大人氣ない。相手向ひにして置きや。サア何ぞ聞かう」と、口は陸地を分ながら、胸は亂次の山坂や、顔は躑躅の如くなり。女溜息、顔を上げ、「ア、流石で御座んすな。其美しい出様には、斯う取った胸倉を、放し様に困つた。我とても中々狼籍する氣は微塵もなく、お乗物に縋ッて歎きを申し、お情を受うと、七本松から跡先に、是迄伺ひ参りしが、頭の懸りが如何もな

(一) 慮外 無作法。無理。
 (二) 西所川原か舟岡へ 共に地名。此の文句にては墓のある所への義。
 (三) 修羅扮装 死人の装束。
 (四) 流の者 遊女。
 (五) 起請 遊女が情人と誓つた其かためを證書にしたもの。

く、思はず慮外致せしなり。仰々しい白無垢着たは、討果しての何のと云ふ、脅しても見せてもない。思ふ願ひが叶はずば、西所川原か舟岡へ、直に飛ばうと思ふ氣で、私が爲の修羅扮装。高いも低いも女子には、大なれ小なれ此氣は有れど、言はぬで持った世の中。色に出さぬを謹慎と、心で心を叱ッて見ても、如何なる慾も放れうが、男に慾は得離れぬ。去りとしては汚い氣。恥しゆ御座る」と聲を上げ、譯をも言はず泣き居たり。瀬兵衛を初め女房達、「御祝言の時刻違ふ。道行計りはずとも、要る事計り申せ」と責めければ、「オ、御尤」。私は土佐の將監が娘。幼名はお光、親の憂き瀬に身を賣り、越前の敦賀で遠山と申せし流の者。四郎二郎殿とは故有ッて、起請一筆か、ねども

(一) 嫁入を下されば 嫁入りな此身に替らせて下さるならば。
 (二) 此世の生顔 此の世で生きてゐる顔。
 (三) 笑止 きのどく。
 (四) 胴慾者 限りなく慾のふかい人。

釘錠より離れぬ中。身も持崩し方々を狼狽へ、今は六條三筋町、上林が内、宮と云ふ流の身より淺間しい、遣手は爲ても己やれ、一度は狩野の元信が、内儀と言はれうくと、四年が間の氣の張弓、はツたりと弦切れて、泣くにも力あらばこそ。無理とも損とも、餘り無法な事ながら、永うは要らぬ一七日、今宵の嫁入を下されば、跡はお前と萬萬年、七日添ふて別れて後は、此世の生顔見せまいし、假令死んでも彼人の、未來の廻向は受けますまい。最う此跡は申しませぬ」と、涙を流し手を合せ、伏し轉ぶこそ憐れなれ。姫君呆れて在せしが、「聞けば笑止、悼しや。否と云へば大抵胴慾者といはれうず。心得たと云ふから、迷惑するは我一人。新枕は如何斯うと、競ひ懸つて行く嫁入。道から

(一) 義理縮め 義理のために身動きがならぬ。
 (二) 袿襦 むかし婦人の禮服の一つ。小袖に帯をしめ其上に羽織り着る長い小袖をいふ。

貸て歸るとは咄にも聞かぬこと。此方や義理縮めになツたか」と、聲を上げて泣き給ふ。道理の上の道理なり。稍有ツて涙を押へ、「ム、好し〜合點した。和女が其思ひからは、男も心に懸る筈。二人の縁の離れぬ中へ嫁入しておかしうない、蓋も懸匣も打明けたこそ女夫なれ男を貸して遣る程に、互の心を晴らして給も。去りながら、餘り懸匣を明け過ぎし、底抜きやツたら此方や聞かぬ」と、涙ながらに宣へば、「ア、有難や」と遠山は、姫の膝に抱付き、「貸すお心より借る心、御推量遊ばせ」と、泣き聲他所にとび梅の、神も憐み給ふべし。「サア迎もなら早いが能し。元信は豫てより、傾城好きと聞きし故、此小袖を見や、廓模様と言ひ付けた、是着て行きや」と袿襦脱いで、「七日と言ふ

(一) 男の餓鬼道云々 男ほしい一念で成佛できぬこと。
 (二) 借る時云々 借る時の地藏顔、返す時の閻魔顔。
 (三) 御厨子 むかしの婚禮道具の一つ、衣裳道具などを入れ置く戸棚の一種。
 (四) 貝桶 婚禮道具の一つ、貝合せの貝を入れる桶。

も忌々し。來月一杯貸すぞや』。『ア、お志は有難けれど、終に別る此身なり。然らば七々四十九日の中は、私が妻と思し召せ。此分て死んだらば、定めて男の餓鬼道へ、墮ちませう』と。泣く泣く立てば姫君、『左様言ふて皆吸乾しやんな。何處ぞ少しは残して給も。此方は是から腰元連れて歩ふて戻る。彼の乗物で皆供しや』と、歸るさを見て遠山は、姫君様の情程、我身の罪は重なる。借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の廳。如何言ふて脱れうと、涙を圍ふかみ垣や、神も佛も見通しに、すゝも甘いも梅青む、北野の假屋に嫁取の、嫁の手道具、御厨子鏡臺うちみだれ箱、葛籠、貝桶、挾箱。長刀持たせてやり手の宮が、來るとは思ひ懸もなし。其心底の屈きし事、姫君の

(一) 音物 おくりもの。進物。
 (二) 石餅 紋の名、白く圓く塗つたばかりで中に模様のないもの。身分輕いものが能く着用した。
 (三) 念晴れ おもひを晴らす。

情と言ひ、かたがた黙し難ければ、門弟雅樂之助、采女、隼人、大學など宗徒の弟子共、術よく賄ひ春平にも内意を得、表向は銀杏の前御入り有りしと披露すれば、方々の音物、樽よ肴よ巻物よ。太刀折紙の馬代銀、五十目掛の蠟燭の、明けぬ暮れぬと賑ひて、今日五日目のあさ上下。雜煮のこくもち(石餅)こもち筋つき(小餅)しくぞ見えにける。其日も漸く傾く頃、名古屋山三春平は、お見舞ひ申すと案内有る。雅樂之助出迎ひ、『先づ以て此度は、姫君御了簡美しく、お宮も念晴れ、元信心も落付申す事、皆是貴公の御蔭。門弟中も忝なく、悦び存じ候』と、何れも禮を爲しにける。『是は迷惑。元信爲と存ずれば、各同然の大慶、さて今日は五日目。五百八十の餅を搗いて、里歸りと云ふ事

- (一) 舌垂さ 柔弱の意。此の文句では餘りに睡ましいとの義。
- (二) 仰な 非常な。上方の方言。
- (三) 無紋 紋のない無地の着物、葬式の衣服。
- (四) 不道化 わるふざけ。

縁邊の式法なれども、親元は遠所、祝ふて我等が宅へ呼びたいと、葛城も申すが、一寸尋ねて見たい」とあれば、雅樂之助打笑ひ「尋ぬるに及ばず。聽て別る、日限の女夫。寢入る間も惜しいとて、顔と顔を突合せ、頭も振らぬ舌垂さ。里歸りは扱置、臺所へも出られませぬ。『夫は仰な喰付き様。左様して互に飽かせたら、跡の爲めには珍重。元信筆は達者なり。一日一夜に半年の、仕事は出来やう』と笑はる。斯かる所に無紋の色に淺黄の上下、編笠取ッて入るを見れば、舞鶴屋の傳三郎、出口の與右衛門打萎れたる風情なり。名古屋を始め門弟中興覺めて、『コレ傳三。除り夫は粹過ぎた。聞かぬと云ふ事あるまい。葬禮の戻りに祝言の家へ立寄るは、無禮過ぎた不道化、可笑しうない、

- (一) 氣立 性質。
- (二) 厄體も無い 埒もなく。
- (三) 骨佛 死人。
- (四) 御引導 死者が迷はぬやうにと經文を誦すること。
- (五) 灰寄せ 葬式の翌日親戚縁者が火葬場に至り灰の中から死人の骨を拾ひ集めること。
- (六) 五輪 地水火風空の五つに象つて五個の石を積重ねたる石塔をいふ。

歸れ〜』と苦々しく叱られ、鼻打ちかみて目を擦り〜、『姫君様の御祝言と、遠慮致して見ましたが、脇から沙汰が有ッてはお恨みの程も如何と、女房が心を付けまして、今日七日目の墓参り。序ながらのお知せ。常々氣立が結構で、おみやと言はず佛々と申したに、可惜佛を厄體も無い。骨佛に爲てのけた』と、潜々とぞ泣き居たり。人々更に誠とせず、『酒に酔ふたか狂氣か。宮は少し様子アツて姫君に換り、四郎二郎と祝言し、五日前より奥に夫婦並んでぢや。痴氣た事吐すまい。』『イヤ私を痴氣になさる、か。七日前に死んだ人が、五日前に来るものか。蓮臺寺專譽様の御引導、舟岡山で灰になし、和國様を始め女郎衆から名代に、禿共が灰寄せ、五輪まで立てた物。何の偽り申

- (一) 眞顔 まじめな顔つき。
- (二) 半井の御典藥 半井氏は有名な醫家。
- (三) 風呂吹 大根料理の一種に大根を輪切にし茹で、味噌をかけて食ふを風呂吹といふ。
- (四) 咽を通すにこそ 咽喉を越さない。

「しませう」と、眞顔に言へば人々も、ぞつと怖氣も立寄りて、「シテ眞實か。如何して死なれた事ぞ」と言へば、「眞實かとは最惜氣に、常が癪持ちぶら〜とは爲ながら、一日と寝られた事もない人が、何時ぞや葛城様身請の晩から、頭痛するとして引込んで 其から枕あがらず、次第に重ツて来る程に、お客衆の引々で、柳原の法印様半井の御典藥、幸ひと和國様へ對馬の客から參つた朝鮮人參。尾張大根見る様子を、刻みも爲ず丸口、人參の風呂吹を、一期の見始め。人參でも鐵砲でも如何な咽を通すにこそ。最う無いに極メツて私を呼び寄せ、今迄は隠した。遠山と云ふた昔から、四郎二郎様と夫婦の契約し、目出度ふ願ひ叶ふたら、女夫連れて熊野參りを致さうと願ひを掛け、此笠の紐

- (一) 何の穀に云云 何の役にも立たぬ。
- (二) すう〜 漸くに。やつと云へたがの意。
- (三) ころりと云云 生命が終つたこと。
- (四) 定よ 疑ひなし。事實よ。

も手づから絆けました、是を着て四郎二郎様、熊野へ參ツて下され。死しても心は連れ立たう。書置もしたいが、口でさへ盡くされぬ、筆には中々廻らぬと、目をはつちりと開いて、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、七八遍は聞きました。なう肝心の時には、念佛と云ふ物も、何の穀に立ちませぬ。南無阿彌さへすう〜、陀佛まで遣らずに、ころりと取ツて行きました」と、喚ツと叫べば人々も、扱ては定よと手を打ツて、皆々袖をぞしぼらる、名古屋も呆れ居られしが、疑ひもなく夫に引かる、魂魄、かりに形を見せけるぞや。さもあれ様子を尋ぬる爲め、「腰元衆々々々」と呼びければ、「あい」と答へて奥より出づる。「ナントお宮は機嫌は能いか」と云ひければ、「ア、機嫌能う莞爾笑

- (一) 野干 狐の異名、梵語。
- (二) 實否 うそかまこと。

ふて御座んする。去りながら、志ありとて、酒も魚も口へ寄せず、密の香の煙絶やすな。煙絶ゆれば爰に居る事成らぬとて、お寝間の内は抹香で、燻ります」と云ひければ、「シテ四郎二郎は如何してぞ。」「ア、去ればお宮様の頼みて、お寝間の襖に熊野山の、繪を遊ばいて御座んする。」「扱ては宮の幽靈疑ふ所もない」と有れば、腰元驚き「ア、怖や。なう知らいで傍に居ました」と、膝の傍に這寄りて、身を屈むこそ道理なれ。雅樂之助心を決せんと思ひ、「左もあれ狸野干の業も有り。誠の死したる幻は、形あれども影映らずと承る。某参り直に逢ふて笠を渡し、灯火を立て實否を試し申すべし。方々は小庭より障子の影を御覽あれ。假令怪しい事有り共、必ず喚と云ふまいぞ。何が怖

- (一) 藪蚊の餅搗 夕方の軒端に蚊が群れてゐる形容。
- (二) 元の人體 普通の人間の形。
- (三) 物ごし 身のこなし方。舉動。
- (四) 地水火風 人間は地水火風空より成るとは支那古代よりの説。
- (五) 朧々 うつらうつら。

い事ある」と、誰も口ではゆふ暮や。小氣味の悪き籬が本、軒に藪蚊の餅搗も、其前垂の名残かと、心細くもイめり。雅樂之助何心なき調子にて、「是は暗いお座敷。宮様は夫にか。火を灯したら能う御座らう」と云ふ聲す。「ア、左ればいな。心の迷ふた身の上、闇に闇を重ぬる辛さ。晴らして欲しや」とゆふ顔の黄昏照す行燈の、障子に映るを能く見れば、元信は元の人體にて、女の影は五輪と宮が物ごし計り。人間の地水火風の風脆き、木の葉に結ぶかけろふの、露の姿ぞ哀れなる。四郎二郎は朧々と、疲れ詫びたる如くなり。雅樂之助尙訝しく、「此菅笠は廊の便りに参りしが、何に入る事ぞ」と云へば、「なう嬉しや、ほんに是が欲しかった。私が熊野を信ずる事。敦賀では遠山、三國で

(一) 牛王の云々
熊野の社から
出る守札を牛王
といふ、起請を
書く時など偽り
でない證據に此
の牛王を飲むの
であるが其度毎
に三羽の鳥が死
ぬとの傳説があ
る。たび／＼牛
王を飲んでゐる
咎めが恐ろしい。

の名は勝山、伏見へ賣られて淺香山、山と云ふ字を三度付き、夫故に木辻では三つ山と付けられし。思へば熊野三つのお山の名を穢し、牛王の咎も恐ろしく、お主と一所にして下さらば、連れ立お禮に詣てませう、と笠の紐まで締め置きし。追付け別る身なれども、一日でも斯う添ふからは、願ひは叶ふた同然。神佛に嘘はないと、此襖戸にお山の繪圖を頼みまし、參つた心で拜まんと、思ふ所へ此の笠は、如何した便りに來た事ぞ、餘の事は何も云はずか。又の便りに傳三殿へ假令如何なる事有りとも、四郎二郎様へ歎きの懸かる事などは、知らせまして下さんすなど、能う言ひ届けて下さんせ」と、苔の下まで我夫、いたはる心ぞ不憫なる。「サア女夫連れて參りませう。貴方様は勝

(一) 後夜の鐘
今日の午後十二
時から翌日の午
前二時までを後
夜といふ。
(二) かげろふ
春のうら／＼な
日に野邊などに
チラ／＼と立つ
氣。
(三) 髪に云々
髪に伽羅をたく
こと。
(四) 反魂香 支
那漢の武帝の時
に李夫人が歿し
た。武帝は夫人
を愛慕し名香を
焚かれしに夫人
の姿、烟の中に
現はれたとの傳
説がある。

手へ行て、後夜の鐘の鳴るまで、念佛切らして下さんすな。似合ふたか知らぬと、笠打ち被たる五輪の影。五つの假の夢現、餘所の事ではなく／＼も、元の座敷へ人々は、宗旨々々の手向草、題目眞言念佛の、廻向に更くるも……

三熊野かげろふ姿

あら惜しや、可惜夜や。夫婦の中に咲く花も、一夜の夢の眺めとは、知らぬ男のいたはしやと、泣くより外の事はなし。昔の朝の化粧に、髪にいたたり裾にとめ、そよとふくさの色風も、今焼香に立つ煙り。
(三) 反魂香と煙ゆるかや。香爐の灰の灰寄せも、順を云ふたら貴方様の、我こそ有らめ逆さまの、水の流れの身の習。所々に死水を、誰に取ら

(一) 片便宜かたべんぎ ひただより。

れん淺間しと、他所に言爲す言の葉を、世に亡き人とはそも知らず、ア、忌々しい。老木の末の思ひ置はよしなやな。此方も汝も若松の、千代の盃ざいんざ。濱松の音。七本松の七本を女は卒塔婆に數ふれど、男は今日の七五三。嫁入事せし戯れも、今は誠と嬉し氣に、手を引合ふて笑ひ顔。我は朝顔委み行く、花の上なる露とは知らぬ果敢なさよ。月は缺けてもみつの山。娑婆の便りは片便宜、文も届かず言傳も、言はて心のくま野路や、照手の姫のやつれ草、常陸小萩も夫ゆるる。身ははたご屋の水棚の、端に目鼻のがきあみを、夫とは更にしら絲の縁は穢き土車、心は物に狂はねど、姿を物に狂はせて、牽けや牽けや此車、えいさらさら〜笹の葉に、しでの旅路の後世の友、一牽き引

(一) 普陀落観音の靈驗に關することに用ゐる語。
 (二) 十善 天子の御位。
 (三) 發心門 悟りを開く道に入るべき門。

けば千僧供養、一牽き引けば萬能の、藥の湯本と聞くからに、四百四病は消えもせん。骨になつても癒らぬは、私が貴方を戀病。變る心を案じては、神の御名さへぞつとする。飛鳥の社濱の宮。王子〜は九十九所。百に成つても思ひなき世はわかぬの浦。梢に懸る藤代や。岩代峠汐見坂。晝き寫す繪は残るとも、我は残らぬ身と聞かば、愛しや左こそ我夫の、涙に暮れて筆捨松の、雫は袖に満潮の、新宮の宮居神々と、出島に寄する磯の浪。岸打つ波は普陀落や。那智は千手觀世音。いにしへ花山の法皇の、後の別れを戀ひ慕ひ、十善の御身を捨て、高野西國熊野へ三度、後生せんしよの宿願懸けて、發心門に入る人は、神や受くらん御本社、證誠殿の階を、降りて下りて待ち受け悦び

(一) 輪廻 輪の廻轉する如く世界の一切のものは因となり果となりて絶えず回轉してゐる。
 (二) 業 因となるべき仕業。
 (三) 垂跡 佛教の語、佛が人間を教化するため種々の身を現はすこと。
 (四) 南無三寶 歎息の意を現はした言葉。

給ふとかや。我は如何なる罪業の、其因縁の十二社を、めぐる輪廻を離れねば、疑ひ深き音無川。流れの罪を掛けて見る。業の秤の錘には夫さへ輕き盤石のいは田川にぞ着きにける。垂跡和光の方便にや、名所名所宮立まで、顯れ動き見えければ、元信信心肝に染み。我畫く筆とも思はれず目を閉ぎ、「南無日本第一大靈驗、三所權現」と伏拜み、頭を上げて目を開けば、南無三寶。先に立たる我妻は、眞逆様に天を踏み兩手を運んで歩み行く。はッと驚き「是なう淺間しの姿やな。誠や人の物語、死したる人の熊野詣では、或は逆、後向き、生たる人には變ると聞く。立居につけて宵より、心に懸かる事ありしが、扱は和女は死んだか」と、溢し初めたる涙より、盡きぬ歎きとなりにけり。

(一) 陸地 地上。
 (二) ついましや ついしみふかいこと。

「恥しや心には、陸地を歩むと思へども、逆に見えけるかや。四十九日が其中は、娑婆の縁に結ばはれ、姿を見せて契りし物を、妹脊の中に怖氣立ち、愛想も盡きば如何せん、變る姿のつゝましや。相見ることも是限り」と、泣く聲ばかり身を絞る、涙の霧や戀慕の霞。冥々、朦朦、臙々として、見えつ隠れつ灯火の、油煙に紛れ失せにけり。元信五體をカツバと投げ、「假令雨露に朽ち果てし、骸骨なりとも抱き留め肌身に添へん夫婦の友。何に怖氣の有るべきぞ。現世の逢瀬叶はずば刃に死して此世を去り、極樂諸天は愚の事、假令地獄の底までも、誘へ伴へ連立て」と、座敷の隈々屏風押退け障子を開き、「やれ遠山は何方にぞ。宮は何處に我妻」と、明くる遣戸に遣手の形、現はれ見えし

(一) 逆茂木 敵を防ぐために枝つきのまゝの木を逆を立て列ねたもの、即ち鹿砦のこと。
 (二) 三途八難 三途は地獄道、餓鬼道、畜生道にて八難は飢、渴、寒、暑、水、火、刀、兵、共に佛教の語。
 (三) 五行 木、火、土、金、水。
 (四) あてなるあてやかなる。
 (五) 四大 佛教の語にて地、水、火、風。

ぞ哀れなる。何時慣はしの世渡りや。阿波の鳴門は越ゆるとも、此(一)舟のうき流れ、何と遣手の身ぞ辛き、情夫の忍路せきとなり、文(二)の通ひの逆茂木に、人の思ひは戒めながら、我身は包む戀衣。赤前垂の火焰に焦れ、三途八難の悪趣に墮す、苦みの涙目を眩まし、生死を分かぬ迷ひの雲、所々に名を變へて、數々色を飾りし報い、身體一つが五つに分れ、五輪五行の苦を受くる、如何なる世にか脱れんと、叫びわな、く袂の影。艶色あてなる二人の遊女、左右に別れ見えたるぞや。『是こそは其始、白粉紅花に粧ひし、後世の道にはとほ山が、仇の情の釣針に、人をつる賀の浮き姿、松と言はれし松が枝は、四大の元(三)の木に歸るなり。次に三國へ買流されて、姉女郎や朋輩に、賣負けま

(一) 川竹 くるわ。遊女たる身の境涯。
 (二) 安養世界 極樂世界。
 (三) 木辻 奈良の遊廓。
 (四) あられ酒 奈良の名物。
 (五) かすり 大和國の名産。
 (六) 四苦 老、病、生、死をいふ。佛教の語。

いぞかつ山と、名を換へ風を變へけるも、戀に我が張る我慢の山、麓の塵の塵土の、土に歸すを御覽ぜ」と、ゆふ月出る如くにて、後に高く現れしは、流れ漂ふ川竹のふし見に來ての淺香山。さすが所も極樂を、願へと告ぐるしゆもく町。安養世界の夜見世には、灯すべき灯火なく、吹き消す風も吹かずして、一心の火を、元の火に返す間の影ぞかし。前に立たる花芒、ほのく見えし幻は、木辻の町の三つ山と、呼ばれし時の面影が、今は名のみになら坂や。このて彼の手の枕の酒(四)霰、あられと隔つれど、解くれば同じかすり井の、水を假り成る戯れも、遂に迷ひの井堰にからみ、木は執心の斧に碎かれ、土は逢ふ夜の壁と隔たり、火は又三世の縁を焼く。四大の四苦を此身一つに重ね重ねて

(一) 妄執 迷へる執念、佛教に用うる語。
 (二) 三惡道 地獄道と餓鬼道と畜生道をいふ。

空より出て、空に入る、報いも罪も色も情も、迷ふも悟るも待夜の鐘も、別れの鳥の聲々までも、地水火風の五つの玉の緒、只一筋に結び合ひたる姿なるぞや、なうく、惜みても猶惜まる。名残も縁も遂に行く、道ならばいざ伴はん。とは思へども夫の命永かれと、祈る心もさまじく、皆妄執の仇夢と、さめく脆き涙の露の、たまの臺の床の内、連理の蓮かたしきて、永き契を待つぞや待たん、驗は是れ。此一見卒塔婆永離三惡道。『南無や三熊野本地の三尊、迎へ給へや導き給へ』と唱ふる聲は伏屋に残つて、形は見えず消えにけり。元信抱き留めんと繩り付けば、影もなく、うんと仰向に目眩めさ、忽ち息切れ絶入りしを。名古屋、揚屋、門弟等驚き騒ぎ、藥さまじく呼び助け、漸う

(一) 曲事。正しい道に背いたこと。及其罪科。
 (二) 忘入 遊女屋。及び遊廓。
 (三) 片口 一方だけの申立てを聞くの義。

一間に休めけり。夜もほのくと明け行く頃、官領の雜式、不破の道犬、長谷部の雲谷誘引し、伴左衛門が酒漬の死骸を昇せ、どや、どや、と亂れ入り、『此所に名古屋山三春平や有る。官領よりの御下知あり、對面せん』と呼はつたり。名古屋遅々せず出迎へば、雜式鐵鞭引鳴し、『不破の伴左衛門をお手前が手に懸けし事紛れなき上、父道犬願ひに依つて、吟味を遂げらるゝところ、盜賊の罪遁れ難く、曲事に行はるゝ條、召捕り來れとの御錠、尋常に繩を懸られよ』とぞ仰せける。名古屋少しも騒がず懷中より忘入の手形數通の文を取出し、『斯様の愚蒙の返答は、申すも似合はぬ事ながら、片口の御裁斷、如何にしても輕々し。是此手形を御覽ぜ。葛城事は三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻、

(一) 不義者の云
云 密通せんと
したものであ
れば女敵であ
る。
(二) 汚い
卑怯者。

借宅見立ての間、揚屋に預け置きし所、伴左衛門數通の艶書。斯くの通り不義者の女敵なり。此方より願を申し親道犬をも罪科に沈めんと存ぜし折柄、却つて我等を召捕れとは、定めて夫は各の間違へ。夫なる道犬か雲谷が事てがな御座らう。遁も走りもせぬ男、聞直してお出で成されよ』と鷹揚にこそ答へけれ。道犬突つと出で、『汚い〜是りや山三。伴伴左衛門葛城を請出す手附として、金子五百兩懐中せり。女敵討は聞こえたが、何故金子は盗んだ。總じて盗みと云ふ物も、盗む時は甘い事。顯はれた時は辛い物ぢやげな。サア何と。脱るゝ所は有るまい』と、證據なき云ひ分ながら、名古屋も相手は死人なり。何を證の云ひ譯と、苦々しくぞ見えにける。四郎二郎斯くと聞くより

(一) 言ひ掛け
無體なることな
いひ出して人を
困らし苦しめる
こと。
(二) 一つ間云々
同じ居間へ入
ることさへ出来
なかつたほど資
格のない…

飛んで出で、『否々兎角の評議は御無用、盗人ならば盗人、切取ならば切取、科人は狩野の元信。繩は百筋千筋でも、お掛けなされ』と大小脱いで、投出さんとする所を、名古屋押えて、『暫く〜。御心底忝い。去りながら、それまでに及ばぬ事。平に〜』と押留め、『是道犬。某盗人でない、申譯が立つ成らば、己又侍に盗人と言ひ掛けした、其科は何とする』時に雲谷進み出で、『イヤ山三、盗人でない言譯立たば、命を助かる其方が仕合せよ。道犬公は一子を殺され金子を取られ、何の過り有るべき』と云はせも果てず、『ヤア汝等が存ずる詮議にあらず、お屋形にては一つ間へさへ入れざりしを忘れたか雲谷。此詮議済んで汝も遁さぬ、用心せよ』と、睨み付くれば道犬、『山三〜、脇道

(一) 分明ならぬ
訴訟 ハキリと
せぬ訴へ事。
(二) 上を掠むる
越度 お上の目
をくらまさうと
した罪科。
(三) 恐らく宗匠
云々 自分ほど
勝れたものはな
からうとの義。

へにらすまい。五百兩の金子を身に付けた伴左衛門、斬りは斬つたが銀は知らぬと云へばとて言はせうか。盗人でない成らば、言譯せよ」と詰懸くる。「オ、サ言譯は爲て見せん、其跡は合點か」。『イヤ言譯から聞かんず』、と競合は雜式『コレ』名古屋、問答迄もなし其爲の我、人にこそよれ兩方共に弓馬の身柄、盜賊と言ひ懸け分明成らぬ訴、且は上を掠むる越度、言譯立たば道犬は、存分に計ふべし。又盜賊に極まらば下知の如く、お手前に繩を掛け申す』と理非明らか述べらる。名古屋勇んで罷出て、『名古屋山三春平は、外の事は不調法。傾城の買ひ様と、人斬る様は大名人。恐らく宗匠御座んなれ。それ』伴左衛門が死骸を是へ出されよ』。『心得たり』と役人共、封切り解き

(一) 鳩尾先 み
づおち、即ち胸
骨の下の中央部
で其の稍や凹ん
だ部分。

酒漬の、死骸は更に色變らず、只其時の如くなり。名古屋袴の稜取つて近々と寄り、『彼を討ちしは先月二十日、曉月の時鳥、なのりかけしは欺さぬ證據。向ふ疵に切伏せ、止めを刺さんと乗懸り、胸押開けば、懷中に金子あり。此儘置いては誠の盗人來つて搜し取らんは必定。時には山三が盗みしと後日の難を察せし故、鳩尾先を刳つて金子は彼奴が身體の内、肺の臓に押込んだり。五臓の中にも肺は金、同氣求めて朽ちも鎔けもよも爲まじ。いで見せん』と手を伸し、ぐツと入れ、朱に染みたる緞子の財布、引摺出して『コレ見たか。是でも山三が盗人か。弓矢取る身の仕方を見よ』と、道犬に確と投付け、死骸を踏へ突立てば、雜式を始めとして、元信其外門弟等、『出來た』。速

(一) 後學なり 後の世の人に能いまいしめとの意。

(二) 古主の屋形 前に仕へてゐた主君。

(三) 長袖 武家時代の語にて普通人より長けのながき衣服を着用するもの即ち學者、僧侶、醫者などないふ。

々御分別。後學なり』と勇みを爲す。道犬は言句も出で、雲谷は怯まぬ貌、『相手の言譯立つからは、此方は切られ損。お歸りなされ』と立つ所を、二人の雜式飛懸り、鐵棒振上げ打つ程に、面も眉間も打裂かれ、胴骨砕くる計りなり。頓て繩を掛けさせ、『道犬親子は世間流布の重罪。上を犯す科と言ひ、只今の始末、諸人の見せしめ、親子諸共獄門に曝さるべし。それ〜死骸の首を打て』。承つて下郎共、搔首にして髻を括げ、道犬が首に懸けさせ、『扱雲谷は當座の慮外。罪の輕重如何有らん』とありければ、元信春平詞を揃へ『元は彼奴が惡逆、騷動の始めなり。古主の屋形に訴へ、長袖なれば流罪に行ひ申したし』。『尤も〜、二人共牢屋へ遣れ』と、引き立つれども脛立たず、『エ、

(一) 晝食菜 ひるめしの副食物。
(二) 家をさいしく 家を再興するの意。
(三) 壺の印 元信の印は壺形の中に元信の二字がある、依て古法眼の壺印といふ。

卑怯者歩まずば、任せておけに打入れて生きながらの酒浸し。地獄の鬼の晝食菜』と戯れ笑ひ歸らる。悦ぶ中にも元信は、憂に沈む那智の瀧。亂る、色を勇めんと、謠へや謠へうた之助。其外の門弟中、憂ひは憂ひ祝儀は祝儀、未來の嫁入は一七日、現世の嫁は七百町。永く知行にすみ筆や。家をさいしく繪具筆、隈筆、糞筆、泥引筆、其の筆先に金銀も、湧き出ていつみの壺の印。並びなつ毛の狩野の筆。末世の寶となりにけり。

(一) 祝髮 髪をそりおろす。
 (二) 新帝 後奈良天皇。
 (三) 大嘗會 即位後始めて行はせらるゝ新嘗祭にて左を悠紀、右を主基と稱する二所の祭場を定め、悠紀、主基と卜定された國から奉つた五穀を神饌に供し十一月の中の卯の日に天皇悠紀殿に親事を、次に主基殿に行はせたまふ御儀式。

下之卷

凡そ繪の道には六の法有り、長康張僧陸探の三人を、異朝の三祖と學び來て、和國に筆の色を増す、狩野の四郎二郎元信、天然彩墨の妙手を得て、後柏原、後奈良の院、正親町の帝、三代四代の聖朝に仕へ、祝髮の後越前の法眼、玉川齋永仙と號し、末世の今に至る迄、古法眼と賞歎するは、此元信の筆とかや。既に大永七年新帝、大嘗會悠紀、主基の御屏風を畫き、從四位下越前守に補任せられ、數多の門弟上下の供人、肩を怒らすやま科や、土佐の將監光信の、山庄に案内せられけり。將監夫婦出向ひ、「今官祿に秀で給ふを見るにつけ、娘が事のみ忘

(一) 時服 時季に相應した一定の衣服。

れ難なふ候』と詞に先立つ涙なり。『仰せの如く某とても、彼の人を先立て、世に交る所存なけれども、將監殿を世に立てんと、惜からぬ世も捨兼ね申せし所に、次第に登庸し、大嘗會の御屏風を仕り、彼爵に至る朝恩の上、貴公の勅勘訴訟叶ひ、向後一家の結びを成し、相並んで繪所の門を開くべしとの、宣旨を蒙り参りたり、親御達を世に立てなば、草葉の蔭の娘御の、一つの迷ひも晴るべきかと、形の如くに禁中方、願ひ取成し候』と、語り給へば將監夫婦、「有難や忝なや。歎きの中の悦びとは、我等が身にて候。貴殿の御庇惠にて勅勘を許さるゝも、一つは娘が光りぞ」と、猶々落涙堰あへず、斯る所へ名古屋山三春平、樽肴黄金時服さまく音物持たせて、將監に對面

(一) 落居 落着
と同じ即ち事件
が解決したと。
(二) 先知 以前
通りの俸祿。
(三) 飲込まれず
合點がゆいぬ。

あり、「雲谷不破が不屈きゆる、元信我等兩人永々沈淪致せし所、善惡の是非落居し、三人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ、某も先知に復し候。其節は姫君の御事に付、御自分さまへ御懇志の趣き。主人御屋形満足致され、先づ當分お禮申さるゝ印目錄の通り。微少ながら」と述べければ、「御使柄と申し、御丁寧なる御事」と。送の禮儀淺からず、暫く時こそ移りけれ。稍有つて名古屋、「ヤア承れば娘御遠山。忘八の手前約束の年明けて、今日是へ歸り給ふ由、さぞ〜お悦び推量致した」と、云へども人々飲込まれず、兎角の返答なき所に供の者共聲々に、「遠山様早彼れ迄見えまします。迎ひにお出で成されませ。アリヤ〜振つて御座るは」と、云ふても更に心得ず。死して程

(一) 香車 遊女
屋の遣手のこと
また花車とも書
くは遊女を花と
見立て其の花を
廻すの意味。
(二) 御影 おも
かけ。
(三) 久しうで
久しぶりて。
(四) 禿立 禿か
ら仕立て上げら
れた太夫職。

經る遠山が、歸らん様はなみだながら、立出で見やれば屋形の姫君銀杏の前、髷入れずの二つ櫛、鴨の羽容の蓮葉袖、どもの又平日柄傘、差詰め香車は女房なり。何時ならはしの道中も、心付ければ振り易いふれ〜雪の遠山が、御影もよもや是爰が、己の内かと突と入り、「なう父様、母様、今歸つたわいな。久しうで逢ひやした」と、頓と座りし居ずまゐは、禿立見る如くなり。各々は不審晴れず、名古屋は元より合點なれば、「オ、何れもの御不審は尤々。長う申せば段々有れども、畢竟姫君を將監殿の娘にして、死したる人が二度蘇生られたと思し召し、元信に娶せあれ。姫君も一度は大事の命を助けられし各々なれば、斯う無うてからが親同然、生中儀式立しては、養子と言ふて面

(一) 取組 親子夫婦の契約を結ぶよとの義。
 (二) 永代知行 無期限に自己の食邑となる土地の義。
 (三) 給所給所の入組 人の知行所と知行所とが入り込んであつての義。
 (四) 地割 土地の境界を明かにして區劃を立てること。
 (五) 延喜の帝 醍醐天皇。
 (六) 駒引錢 古錢の一。馬を牽いてゆく圖を錢の面に表はした

白なさ。又平夫婦と談合して、血を分けた遠山に、致したが我等が趣向。取組は御屋形の、御意で御座る」と小短く、譯も聞える道も立つ、銀遣ふたる印なり。將監夫婦も悦び涙、「幼少時のお光が成人顔、見て嬉しい」と抱き付てぞ泣き給ふ。名古屋重ねて懷中より一通を取出し『是は田上郡七百町の御朱印、永代知行なされ』と頂戴させ、『扱田上郡は給所給所の入組にて、地割中々難し。某が父主計之介、天文の曆算に達し、鼠十露盤と云ふものを巧み、積り物、割物、人の聲に従つて、十露盤の表明白に顯はる。是を以て勘へば間積り知行高。利那に相濟み申すべし』と有りければ、元信聞き給ひ『夫に付き延喜の帝、陸平永寶駒引錢を鑄させて民を賑はし給ふ。其駒は、晋の韓幹

が馬を寫されし。我又其駒の圖を傳へ覺えて候へば、駒引錢を鑄て領内を賑はし申すべし』。是は珍重。然らば善はいそがしや。嫁入、婿入、國入して、本祝言の儀式は重ねて。先づ今宵は祝ふて、ざつと目出度う候べくそる盤粒に萬代、積るぞ豊かななる。年は子の年大黒女夫、力次第に子孫も湧き出るちからは五穀手からは金が、湧き出で、子々孫々迄、長久榮花の家繁昌は、君が惠の威徳なり。

〔總評〕 明治文壇の耆宿として、近松研究者として世に知られてゐた齋庭筆村翁が、曾て此の『傾城反魂香』を評せる一節に『…此の傾城反魂香は狩野古法眼元信が土佐光信の聲となり土佐氏について繪所の預となりし事實を本とし吃の又平が天津繪のことを交へ遠山が死して後姿をあらはしてうつゝに熊野参りするを反魂香の故事にあて、外題とせり、これに名古屋山三不破伴左衛門の二人を出し、三國の歌川敦賀の遠山とて越前に名高かりし兩人のうちの遠山をも光

信が子として出したれば人物はよく揃ひ作もまた妙をきはめたり、元信越前守に叙任し越前法眼とも號したれば其縁に取つて先づ越前に到りて遠山に出合ひてより事起るは順序あり、元信厄にせまりて虎を描けば眞虎と現じて其難を救ひ、又平死に臨みて形を摸せば石面に徹りて苗字を許さる、又平の畫ける大津繪脱け出て敵を防げば、元信の筆の襖の熊野山遠山と手を引きて登るべし、吃の女房に早口あり廊のやり手に機轉者あり、佐々木の屋形、揚屋の座敷、大津街道、三筋町の大門口、事も、人も、所もよし、巢林子傑作中の傑作なり……とあり。近松翁の作一百餘種のうち、この作が屈指の傑作に數へらるべきものであるは、言ふまでもない。徳川時代の讀本中の名作として人口に膾炙する山東京傳の『昔語稻妻表紙』は、或は此の『傾城反魂香』から生れた子であつたかも知れぬ。否、そのみでない、徳川末期の文藝作家として大なるもの、一人に數へらる、曲亭馬琴が二十八年の心血を濺いだ『南總里見八犬傳』のうち、畫いた猛虎が紙面を脱けて五關を騒がす一節は、この『傾城反魂香』の上の卷に、元信が肩の血潮て描いた虎が襖戸から脱け出る一段に其のヒントを得たのかも知れぬ。否、否、それ

ばかりかは『祇園祭禮信仰記』——作者は中村阿契、淺田一鳥にて寶曆七年十二月より三年越しの興行を續けた——のうち、可憐の雪姫が其の足の爪先で書いた鼠が、姫の縛めの繩を嚙切る一段は、たしかに此の『傾城反魂香』によりて趣向を暗示されたものに相違ない。

傾城反魂香終

『名古屋山三』に就て

正史の傳ふる所に依ると、名古屋山三、初めの名は山三郎といひ、十四歳にして蒲生氏郷に仕へ、頼に寵遇せられた。女にしても見まほしき美男子で、戦陣にも武功があつた。後に浪人となり、山左衛門と改名し、出雲阿國と相携へて歌舞伎の創立者となり、京阪地方で技を演じた。晩年は作州津山の城主森忠政に仕へてゐたが、君命に依り、逆臣井戸宇右衛門を殺さうとして、却つて宇右衛門のために殺された。



心中二枚繪草紙解題

巢林子さうりんしが作、世話浄瑠璃せわじやうるり二十有餘種のうち。曾根崎そねざき即ち北の新地の出來事を題材としての心中しんぢゆうものに、お初徳兵衛はつとくべゑの『曾根崎心中』があり、小かん平兵衛こかんへいべゑの『心中及は氷の朔日』があり、小春治兵衛こはるぢべゑの『心中天網島』がある。そしてお島市郎右衛門しまいちろうゑもんの『心中二枚繪草紙』も亦、北新地に材料を得た心中ものである。

曾根崎天満屋そねざきてんまんやのお初と、油屋の手代徳兵衛あぶらやてだいたくべゑとの『曾根崎心中』があつた翌々年。同じ曾根崎、同じ天満屋の抱女かへで、お初の跡繼あとつぎといはれて嬌名けうめいの高かつたお島しまが、長柄の田地持市郎右衛門ながはのてんぢもちいちろうゑもんと情死した。女は天満屋の二階を、男は長柄堤を、その身その身の死場所として、わかれくに最期の呼吸さいごのこゝろいを引いたのであつたが、無論、それは合意の心中であつた。

お島市郎右衛門の心中は、寶永二乙酉年十一月中旬——恐らく十六日の夜——の出來事て、

これが淨瑠璃となつて、竹本座で上演されたのは、寶永三丙戌年三月、その二十七日が初日であつた。作者近松門左衛門は、この時五十四歳。京都から大阪へ引越して來ての第四年目に當るのである。

左に『心中二枚繪草紙』の梗概——お島市郎右衛門の悲劇——を物語らう。

○

寄邊なき浮草。伊達や華美で此廓の勤めをするのでない。親同胞の貧苦を見かねて沈めた此の身と、天満屋のお島は長太息をついた。

お島には、身に代へてもとおもふ男、その市郎右衛門は、廓通ひの金子に詰つて、けふ此頃は、いとしい人の顔も見えねば、そよとの風の音信さへも聞えぬのである。

けふも此の胸のおもひを包みながら、大盡客につれられて、道頓堀の竹本座を見物したのであつた。狂言は撰りに擇つた『曾根崎心中』。ほんに此の身は、お初さまと同じ家の抱女である

と思ふと、しみ／＼と身につまされて、涙はとめどなく、袖に袂に置きあまるのであつた。

岸に繋いだ屋形舟、お島の一行は、客を先頭に、やがて乗り移つた。舟は道頓堀を北に折れて横堀筋を、北方へ北方へと棹すのであつた。

お島は、客の所望に任せて、心も空にさんろの道行を唄ふのであつた。節も亂れたであらう。調子も時に外れたであらう。定めし聲も顫ふてゐたであらう。

と、客は俄に叫び出した。『舟を留めい、アレ／＼合點のいかぬ編笠めが、道頓堀を乗出すから、この舟に目を放さぬわ』と、早や立上らうとする體。見れば薄汚い八丈縞に、花色の羽織、アレ茗荷の丸の紋は、片時忘れぬ『市様』いとしい『市郎右衛門様』さるにても、この場合、『何としたらば宜き』と、お島は途胸をついたのであつた。

市郎右衛門は、けふの客に對して、少しの意趣も含んでゐないのである。さりながら、生命にかけたお島を、誰憚らず、けふ一日は我物顔の風情が妬ましい。編笠越に『……唯今、お島様とやらが遊ばした淨瑠璃の、節は少しも變らねども、情を御存じないゆゑか、いかにしても道

行が浮氣に聞えて、底意に戀がござらぬ』と、それとなく、當てこすつた言葉。

客も夫れと知つて、尙ほ承知せず。『よし、戀を含んだ淨瑠璃の語りやうを知つて居らば、今此處で語つて見せよ』と、言葉に刺が包まれてゐる。

『御所望ならば語らいてか』と、市郎右衛門は、やがて鹿島の事觸に託して、お島の今日の仕打が薄情であること、他國の大盡に身請の談合でもしてゐるのであらうと、さんく恨みがましいことをいふ。『オ、よい推量、追付けお島をうけ出さう』と、客はお島に身をよせかけて、離れがたなき風情。

市郎右衛門は、もう堪忍の緒を切つたか、扇拍子をとりながら、客の眉間をハタと打つ。『アア擲つたナ、もう聞かぬ』と、客が頻りにイキリ立つを、みなくにて、やうく舟に乗せ權を早めて漕ぎ去つたのであつた。

取残された市郎右衛門は、『ア、我ながら氣の違ふた振舞、さるにても不憫なはお島』と、漕行く舟を、悄然と見送つてゐた。

市郎右衛門が父は、介右衛門といひ、大阪の北郊外長柄での田地持であつた。市郎右衛門にはまた善次郎といふ弟があつた。しかし此の弟は『善』といふ名にも似ぬ悪性者で、人の意見を空吹く風と聞流して、たゞもう女狂ひに憂身を窶してゐたが、親の手前だけは猫を冠つて殊勝氣に振舞ふてゐた。

けふも廓からの歸りがけ、いつもの中宿に立寄り、スツカリと扮装を改め、正直一遍の百姓姿となり、大根の荷を肩に、やうく我家へ歸つて來た。

と、後追ふて來た毛馬屋の七兵衛『サア、五百目の金、いつ返して下さるか』といへば、また一人、駕屋の長介と名乗つて、『菱屋の花代と津の國屋の料理代、合せて三百四十五匁六分、渡してくれ、渡さねば今、親旦那へ』との談判。其處へまた五十有餘の女將、『編笠島の笹屋から參りました』とて九兩二分の催促である。進退維れ谷つた善次郎は、それをも苦にせず、巧

みに口車くちぐるまにのせて、『僅少わずかの金子かねで捨てる善次郎ぜんじろうが名なでない』といふて、三人ともに追返おひかへしたのであつた。

門口かどぐちにて、これだけの経緯いきさつがあつたとは知らぬ父ちちの介右衛門すけえもん、今年六十餘ことし ちとせりの白髪しろがみの老爺らうや、報恩講ほうおんかう中から集めた冥加錢みやがせん、白銀しろがね五百目め二包つぱ、小判こばん二十五兩にじゅうごりやう、一步銀いっぺぎん十兩じゅうりやう、數かずへ改かへめ、鼻紙袋はながみせくろから鍵取出かぎとりだして、掛硯かひすりの抽斗ひきだしあけ、金銀かねぎんを取入れ、錠せうをおろし、錠せうを袋ふくろに仕舞しまたところへ、駕屋かぢやの使者つかひ、『天満屋てんまんやのお鳥しまさまから、市郎右衛門いちろうえもんさまへ、急いその使つかひ』と、その聲こゑは大きかつた。

兄あにおもひの妹いもうとお吉きちが、駈かけて出て其そのの文ふみを受取うけとつたを、見みのがさぬ介右衛門すけえもん、『お吉きち、今いまのは何なんじや、汝おまへまでが親おやの目めを抜き居ゐるか』と、その文ふみととりあげ、これを鼻紙袋はながみせくろにと仕舞しまひ、袋ふくろを其儘そのまにして奥おくの一室ひとむまへ入はいつたのである。

先刻さきほどから老父らうふの舉動きよどうを、残のこらず伺うかがふてゐた善次郎ぜんじろう、『時ときこそ今いま』と、前後ぜんごを見廻みまわし、老父らうふが置忘おきわすれた鼻紙袋はながみせくろを手てに取上とり上げ、掛硯かひすりの鍵取出かぎとりだし、抽斗ひきだしあけて二包ふたつぱの白銀しろがね、懐中ふところに押込おしこみ、有合ありあふ頭巾つばきんに小判こばんを入れ、さて一步銀いっぺぎんをと手に握にぎる折柄せがひ、『善次ぜんじ々々』と老父らうふの聲こゑ。隠かくし所に狼狽ろうたふま

はつた善次郎ぜんじろう、釜かまの上うへなる御酒徳利みさけどくり、取るより早く、一步銀いっぺぎんさらりと移うつし入れ、素知すしらぬ振びで、『はい〜』と、父ちちが許ゆるへとのくのであつた。

入れ替かつて市郎右衛門いちろうえもん、身みの不品行ふしだらに、わが家の闔しるもも高く、やう〜歸かへつては來きたが、寒ささは寒さし、先まづ酒さけ一杯いっぱいと、御酒徳利みさけどくりの口くちを傾かたむければ、これは意外いざや！、一步銀いっぺぎんが湧わいて出でたのである。夢ゆめか、現うつか、三寶荒神さんぼうわらじんの御利生ごりしやうか、死ししたる母ははの御授みまづけかと、紙かみにつ、んで懐中ふところに納なめた所ところへ、顔出かほだしたのは善次郎ぜんじろう、『オ、兄あに者人じやひとか…、蜷川しづみがはの何處どこやらから文ふみがきた…、親父おやぢがソレその鼻紙袋はながみせくろに入れて置おかれた』と、いひつ、兄あにの背後うしろから御酒徳利みさけどくりを隠かくし出し、南みなの御堂みだうへと出でてゆくのであつた。

いつにない弟おとうとの親切しんせつと、市郎右衛門いちろうえもんは鼻紙袋はながみせくろの紐ひもを解といて、お鳥しまの文ふみを捜さがすところへ、つかつかと父ちちの介右衛門すけえもん、『ヤア、掛硯かひすりの抽斗ひきだしがあいてゐる。汝おのれは盗人ぬすびと！、これが親おやのものなら、とも角かく、他人様ひとさまからの預あづかり金子かね、堪忍かんにんならぬ、ヤア〜講中かうぢゆうの衆しゆ、いづれも是これへ』と、老らの一徹いってつ、大聲おほこゑで叫わめき立てたので、『何事なにこと』と、近所合壁きんじよがつべきは、どや〜と集あつまつて來きた。

市郎右衛門「その盗人は身に覚えがない」といふたものゝ、さて自分の懐中には、御酒徳利から出た一步銀、紙につ、んだ一步銀がある。さてもう言譯の道が立たぬか。

介右衛門「今日になつて皆様に始めて明かすは、この市郎右衛門は我が血をわけた實子でなし、大阪のさる人の四十二の二つ子で」と、その當時を物語つて、「殊に弟よりも此の兄を繼母にかけてくれるなど、死んだ蠟の言葉を、コリヤよも忘れはすまい」と、聲をあげて無念の涙にくれるのであつた。

斯うなつては市郎右衛門、身に覚えなきことながら、もはや言譯しても叶はぬ所と観念して、たゞ俯向いてゐるのを、「勘當じや、出て失せう、親子名残の形見の杖、身に覚えよ」と、杖とりあげて、さんぐに打据ゑたのであつた。

此處曾根崎の天満屋では、一昨年お初が心中して以來、兎角、家の名を噂に立てられるのを氣にしてゐる。

今夜も、亭主、とつかは歸つて来て「お島は如何した」と、あわたしげに問ふと、「先刻、長柄の市様といふ馴染のお客が久しぶりに見えて、近江屋まで」といふ。「さうあらう、その市郎右衛門は銀盗人じやとの事、うかくとして居られぬ、早う島を呼びにやれ」との騒ぎに、譜代の下女は「市様は御馴染ゆゑ、島さまを近江屋へ送りましたが、そんな事なら呼戻して来ませう、……お初さんがアノ晩、二階の梯子を踏外して、この胴骨を踏ました、記念の痛さが、やう／＼此頃、直つたばかり、また踏まれては」といひつ、氣早に、呼戻しに出てゆくのであつた。

さて弟の善次郎、銀盗人の科を兄者人に被せて、自分は曾根崎近江屋の附近まで来ると、酒に酔崩れたお島が、ひよろ／＼と来か、つたのである。「悪い所て」と、疵持つ足の善次郎は、逃さうとすると、よろ／＼と繩りついて「コレ善次さま、何が恐うて逃げさんす、これ兄嫁の島じやいな」と、酒の溜息一つ吐いて「けふ市さまは勘當うけてござんしたに、羨ましいは弟の身の汝」と、胸倉取つて、「サア此方へ」と酔ふては可弱い女の力も、平素の倍も出るら

しい、「これは島さま、何をなさる」と、やう／＼下女下男の助力で、善次郎は其の場を逃れ出たのであつた。

酔ふて他愛のないお島は、半身を横に、天満屋の入口に投げかけ、「水を、水を」と、聲は殆ど正體もない。

廊の夜は、やう／＼に更けゆくのである。

善次郎は、お島が權幕の恐ろしさに、どうなることかと、天満屋の格子の影に身を寄せ家内の様子を立聞してゐた。

此方は市郎右衛門、身にふりかゝる銀盗人の科、それは弟の奸策の係蹄と覺つても、思へば今日まで養親の恩誼、形身の杖の折檻は、身にひし／＼とこたへて、所詮この世に生きてゐられぬ身、兎も角もと、近江屋までお島を呼出し、一仕始終、洩なく物語つて「今宵かぎりぞ、二人が生命は」と、しみ／＼言聞かせたもの、さて可愛のもの、生命にかけて可愛とおもふお島……近江屋では人目にせかれて、死際の約束せなんだ、今一目、呼吸あるうちにと、

弟の善次郎が、つい眼と鼻の其處にゐるとも知らず、暗き格子を隔てに、二人は家内の様子に耳を敏てゐた。

家内では亭主の聲で、「島は非常酔ふてゐるやうなが、これ飲んで、もう寝や」と、茶を汲てやつてゐるらしい。と、お島は勿體なげに押戴いて、何やら涙ながらに、くど／＼と言ふてる。聞耳を立て、見ると、つゆ忘れぬアノ聲で、「御恩のほどは忘れませんが、生身は死身とやら、若し頓死でもしましたら、今宵下された此のお茶が、末期の水」と、酔ふて管まくやうに見せて、心の中を仄めかせてゐる。市郎右衛門は忍泣、善次郎は我が身の悪事を顧みて、悔み涙に袖をぬらしてゐた。

月は曇つて、時雨の空の、四邊は闇に包まれて来た。

「旦那さま、内儀さま、みんな、さらば」と、涙かくして、お島は二階へと上つてゆく。

格子隔て、市郎右衛門と善次郎、互ひに兄とも弟とも知らず、折から吠えかゝる犬に右と左に、立分れて了ふたのである。

天満屋の案内は、みなノもう寢静まつたか、物音がせぬ。そろ／＼と軒の下まで歸りきた市郎右衛門が咳嗽に、お島はソレと二階の窓、窓から下を見渡しても、生憎の月は曇つて、星影さへもまばらである。様のお顔も見られず、我が姿さへ見せられぬ。殊には聲も立てられぬ。今。詮方なげに、鏡をさし出し星影をうつして、『私は此處に』と知らせるばかり。男もソレと心得て、扇をもて、聲は出せねど、心の中を、招き合ふて知らせてゐた。

折から弟の善次郎、これまでの悪心を翻し、兄の命を助けたい一念。天満屋の格子を叩いて、『長柄の市郎右衛門は居られぬか』といふ。家内では『喧ましい、今頃に、そんな人は知らぬ』と情ない返事。

人の来る形勢に、密と身を向側の軒に忍ばせてゐた市郎右衛門、この時、善次郎の背後から掴みか、つて、平素の恨、おもひ知らせやうとしたが、『待て、それは冥途の邪魔』と、心を静め、伸上りて小夜格子に向ひ、『サアもう夜明が近い、一所にとおもふても叶はぬ二人、我はこれより長柄堤を死場所に、たとひ所はかはつても、連立つ道は唯一筋、今から珠数を繰始めて、

一萬遍の念佛を終る時が互ひの合圖』といへば、『合點しました、それにしても、同じ枕に死にたいに……心はついて行きます』と、女の聲はかすれてゐた。

男は長柄堤に來た。曇つた月はやう／＼に晴れたが、いづくにも我が影法師が見えぬ。

女は天満屋の二階の一室。用意の剃刀、手に持ちて、灯火に向ふたが、壁にも、窓にも、障子にも、怪しや自分の影がない。

お、人の話に、死ぬ時は人魂飛んで、その身の影はないと聞いてゐるがと、嘸や二人は、所を隔て、同じ思ひにくれたであらう。合圖の珠数の念佛、一萬遍が繰詰めて、もう九千遍となつた。残る一千遍が生命の際と、二人は同じ思ひに暮れたであらう。

此處と彼所は一里の道程、と思ふに、不思議や、互ひの眼に、互ひの姿が、茫然と現はれ見えたとである。『市様か』『島か』、これは夢かや、現かや。

オ、市様が、アレ脇差を抜かんした、この島も何おくれやうと、用意の剃刀、五體の力を右

の手にこめて、雪の咽喉をグツと抉つた。
 善心に立返つた弟の善次郎、ほのく明くる頃、長柄川の川端に、兄の着類と遺書とを見
 つけ、南無三と現場にかけつけ見れば、経絡六脈既に絶えて、兄は早や冷たき屍骸となつて横
 はつてゐた。

(解題終)

(一) 木戸 興行物の観客の入口。
 (二) 翁の面 芝居で序幕の前に當日の祝ひとして踊る三番叟の被る面。
 (三) 竹の紋 竹本座の定紋。
 (四) 道行 男女が連立つて旅行すること。
 (五) 目關笠 元祿時代に流行した編笠の一。

心中二枚繪草紙

近松門左衛門

上之卷

既に今年の酉も立ち、戌の顔見世朝木戸をわけほの深く提灯の、影
 晃々と初霜の、おきな(一)の面の莞爾(二)に始り呼ぶ聲(三)に引かれて、老も若い
 も見る人は、餘念なほみに御最員(四)に、ようお出やツた朝日影、御代も
 御國も久方の、此日の本の慣習の歌を種なる謠(五)ひ物。天地を動かし鬼
 神を感ぜしめやかに、妹脊も猛き武士も、心柔か饅頭や。菓子に火繩
 に番付と、賣聲に迄節籠る、竹の紋付く道行の、本を召せく目關笠。
 笠も預る預けて御座れ。紅の絆(六)け紐淺黄紐え、繁昌く、イヤ此所繁

(一) 散し太鼓 其日の演藝が終つて観客を散らすために打ちはやす太鼓。
 (二) お初 「曾根崎心中」に浮名を流した天満屋お初のこと。
 (三) 南 道頓堀。
 (四) 屋形 屋形船のこと。
 (五) 提重 箱の中がイレコになつた重箱で其れには柄がついてゐる。
 (六) さんろ 謡ひ物の曲の名。

昌毛氈しき島の、其難波津の冬籠り。今を春べの顔見世に、日もなが
 事の御退屈。早や今日のお暇と、散し太鼓の下轟き、明日はとうから
 唐錦、彩どる空は夕陽の、山は夕の雲の帯。腰の廻の御用心。押すま
 い。押すまい日の入り来く人や歸るさや。花山の幕か袖續く、貴
 賤群衆は冬ながら、心ぞ彌生と成りにける。中に家名も君が名も、世
 上に高さ天満屋の、お島と言ひて彼の里に、お初が跡繼ぎ隠れなし。
 此頃明石の貞と言ふ、馴染の客に揚げられ、今日は南へ連れて出る、
 何處はあれど曾根崎の、縁の芝居初様も、定めし佛金色の、身上りと
 聞く外題に引かれ、終日見物慰みて、芝居果つれば繋がせし、屋形に
 皆々乗り出だす。提重開き牽頭共、「なんと島様。今日のさんろの道行
 (水) 長

(一) 沖に云々
 さんろ道行の文
 章。

は、本で語ると直に聞くとは又格別。大盡様のお慰み、舟の着く迄道
 行を所望々々』と哄けば、『イヤこりや能かる。己も島の一弟子で、餘
 程節は覺えたが、追付け島を引摺み、國へ連れて行つたりとも、國元
 は堅い所、こんな遊びは成り難し。此船中をぶらぶらと、唯行くも愚
 痴の至り。大阪の名残に些と聴聞致したし。サア皆つけや、』と云ひ
 ければ、供の丁稚が懐中の、本取出してお島に渡し、『東西々々。此所
 がさんろ草薙の道行。師弟連節東西〜』(二) 沖に戀路の〜まだいろは
 舟。惚れてほの字の帆が見ゆる。ほの字の〜、誰に〜ほの字の初
 穂花、小菅しらすげ、いはますげ、此一群は刈残せ、妻籠めの夜の床
 にせん。罫の蟲と諸共に、刈取る鎌の鋭くも、聲きり〜す轡蟲。牛の
 (切) 暫

- (一) さゝがに蜘蛛。
- (二) はたおりきりくす。
- (三) 藤袴 菊科の草。又「蘭」の一種。
- (四) 古郷の風云云 「胡馬は北風に嘶く」の成語がある。
- (五) 母子草 菊科の草。又「こぎやう」といふ。

鞍にも音を泣きて、歸る家路をまつ蟲や。左らば笹原さ、がにの、秋に染絲繰出し、五百機立てしはたおりや、其藤袴破るなど、泣くか茨の蔓先に、野飼の駒の優しくも、古郷の風の北に嘶へて嘶けば、越路の雪にふる郷の空を慕ひて泣く犬の、べうのゆもとは那とかや、如何に言はんや久方の、天津雲井を天鄙り、賤の仕業は何時君が、晝に描くならで思ひきや、見しや聞きしやとばかりに、草も刈り兼ね忍び兼ね、涙を受けて研ぐ鎌の、砥石も心砕けとや。夢にも斯くとし玉の、玉世の姫は胎内の、未見ぬ子の別れぞと、無情き母に誘はれ、行く道筋は多けれど、笛に誘はれ妻戀ふる、牡鹿のその、法の導き是なれや。互に夫とみち芝の、絶る計りの戀草も、めは繁り添ふ母子草、千草八

- (一) 醜草 取るにも足らぬ見にくい草。
- (二) 垣根草 すべて垣根に生ずる草。
- (三) 燈臺草 濕地に生ふる草で春の末小さい緑色の花が咲く。
- (四) 桂草 つるくさの一種。
- (五) 莎草 また「とんぼ草」といふ。菅の一種。
- (六) 私語 男女のさゝやきあふこと。

千草思ひ草。恐し鬼の醜草に、隔つる中の垣根草。力草なく泣きかはす、心ぞ思ひ遣られたる。草ばし刈るな笛を吹け。野路に兩人が悔み草。毒の草をも身の上と、知らぬ手元の暗さには、燈臺草を思ひ出す。思ひ出でずや有りし夜の、亂れあひにし枕には、桂草をぞ思ひ出す。彼の仄々の仄暗さ、黄昏早く寝し時は、莎草を思ひ出し、人目思はで肌觸れて、起きつ轉びつ私語して、相撲取草を思ひ出す。通路遠き獨居の、班女が聞の寂しさは、茶引草をも思ひ出し、心細しや絲薄。えい〜〜風かと聞けば山の下には嵐吹く、嵐吹く、去りとは嵐吹く。山を離れて風と成り、風も昔に吹き歸れ。「イヤ淨瑠璃待ちや〜」。舟も留めい。何んと皆は氣が付かぬか。先から陸を見れば、うそ汚

- (一) 引けた事 臆病で氣おくれと見えやう。
- (二) 詰開かん、應對せう。談判せんの意。
- (三) 生中 なまじひ。
- (四) 一本擔げ 反對に言ひまくられての意？
- (五) 目彈き 目で知らせる。目くばせ。

れた八丈縞に、花色の羽織、茗荷の丸の紋付けて、編笠着たる男めが、道頓堀を乗出すから、此舟に目を放さず、跡へ下れば走り付き、先へ抜ければ立留り、付けて廻るは合點いかず。ありやく又彼處に立つたるは、喧嘩仕掛ける體と見た。黙ッて居るは引けた事。上ッて一つ詰開かん』と、脇差押取り出でんとすれば、島引き留め、『ハテ華美人様ぢや。私等が様な者が乗った舟は目に立つゆる、何れに限らず皆見さんす。生中咎めて一本擔げ恥掻こより、ハテ彼方から見なら、此方からも見て、鷹揚にして居さんせ』と、言へども更に聞入れず、駈上れば續いて上り、見ればいよ／＼情夫の男。『是れ市様』と言はんとせしが目彈きして、『コレ申し此方は他國のお衆ぢやぞ。所の衆なら

- (一) 澁面 むづかしい顔附。
- (二) 方圖が有る 限りがある。
- (三) 見けつかれ 見よやいの意にて甚しく卑しめた言葉。上方の方言。
- (四) 意趣 うらみ。遺恨。

粹である。何を言懸さあんしよと、言譯して下んすな。何方の爲にも悪いぞ』と、心を揉むこそ道理なれ。貞は肘張り澁面作り、『是や編笠五度や三度は堪へうが、何うした事に舟に付き、女を乗せたる船中を、見るも大方、方圖がある。夫程見度くば近くへ寄ッて見られに來た。サア我存分に見けつかれ。見様が悪いと免さぬ』と、聲を訛て力みける。市郎右衛門も差當る意趣は無けれど、當分の妬ましさ計りなれば、口論しては如何ぞと、『イヤ申し別にお腹の立つ事共存せず、我らも下地淨瑠璃好き、折々稽古仕るが、此さんろの道行は、戀を含んだ節付なるに、只今お島様とやら、遊ばした淨瑠璃の、節は少しも變らね共、情を御存じない故か、誠の心少ふて、御眞實の無い故か、如何に

(一) 鹿島の事觸
昔は毎年春に
なると常陸國鹿
島神宮から其年
の豊凶の神託を
諸國に觸れ廻つ
た人をいふ。
(二) 柏客 利益
にならぬ客。
(三) 恐かない
おそろしい。

しても道行が、浮氣に聞えて、底意に戀が御座らぬ」と、片眼でお島を睨にける。男嘲笑ひ、「サア吐すまい〜」。島が淨瑠璃、善かれ悪かれ、汝が冷にも熱氣にも成る事か。何うでも外に様子が有らう。但し又汝が言ふ、戀を含んだ淨瑠璃の、語り様を知つたらば、只今爰て語つて見よ。節が違ふと擲ち据ゑるが、何んと語らうか。『何が扱、御所望ならば語らいては。則ちさんろの四段目、檢非違使が鹿島の事觸れ。島様篤くとお聴きなされ』。是や此方へ御免ならう。是はお島では御座らぬ。お鹿島大明神より罷り出た事觸で御座りや申す。惣じてお鹿島と申すには、上の客が三十三人、中の客が三十三人。拙者が様に見える影もない柏客がたつた一人。正月七日神前に於て、おや恐かない

(一) 誓詞 ちかひの言葉。
(二) 起請 情人と誓つたため
の證書。
(三) 盡す程に云 此方から一杯眞實を盡してゐるにの意。
(四) てつちない 巨大な。
(五) 合力 ほどこし。めぐみ。
(六) むくりこく 無理に剥ぎ取られるの意。
(七) 御託宣 神佛が人に託して宣し示すこと。
(八) 加締 悪事災難をよけるまじなひ。

誓詞を書く。其誓詞の文言に、斯様に申し交すからは、未來迄も變るまい、虚を吐くまい隠すまい、勤の間外に深い男を持つまいと、申す起請を取交すから。偽りは申さないと存じ、盡す程に、ける程に、只今は向牖から、でつちかない光物が飛で出て、巾着の扉が入文字に開け、内の首尾が八角に破れ、神馬のお馬の牽頭にも見捨てられ、大恥を搔いて御座ある。去れ共お鹿島大明神。氏子を不憫とも思召さず、或時は、餘國のだいじん宮に、身請の談合を仕かけ、或は紋日を擔がせ、引き日の立前、跡から脱る禿頭、親里の合力などと申して、厄介悉皆ひくりこくりの上手倒しに、ひくり取られたとの御託宣。無上神靈神道加持。是々が眞實戀のある淨瑠璃。島様能うお聞き成されい

(一) ぎしみ廻れば 威張りちらす。りきむ。
 (二) 氣の通らぬ 氣のきかぬ。粹者でない。
 (三) 法界格氣 單に「格氣」といふと同じ。元祿時代の流行語。
 (四) おつしやれな おつしやれな いふなく。
 (五) 米柄 米を搗く杵の柄。

と、他ながらこそ恨みけれ。男は二人が目色を見て『はて扱變つた文句ちやの。何んと、餘國の大盡に、身請の談合とは珍らしい事觸。是れお島、和女は今のが面白からうが、此の貞は耳に立つ。逆も所望し係るからは、まあ一節所望致さう。お島とお身とが連節で、戀の籠つた淨瑠璃を、初段から切り迄、語り抜かさにや勘忍せぬ』と、ぎしみて廻れば、お島一人が氣を苦しむ、『コレ申し此方様程の粹様が、是は又氣の通らぬ。彼人と私と譯ある様に見さんしたさうなれど、微塵左様な事ではない。腹立てさんすを面白がって、法界格氣に言はんすわいの。大人しうして、サア舟に乗らんせ』と、手を取れ共聞き入れず、『いやいや。おつしやられなく』。他國から登つて此大阪で、米柄をも握る

(一) 此鼻 拙者又は乃公の意。
 (二) ますら 武勇ある神。

者が、通例の男と思ふか。何うでも斯うでも聞かには置かぬ。語らせねや置かぬ』と、勘忍せぬ顔付に、お島は難儀手に汗握り、『コレ爰な人も誰れか知らぬが餘程な、勤する身が客に引かれ、芝居へ往つたが珍しいか、舟に乗るが不思議な。淨瑠璃は其許より、私が能う覺えて居る。晩に此方の見世へおぢや。能う合點の行く様に、教へ遣らう』と世話やけ共、市郎右衛門も言掛り、『否々和女に習はいても和女の胸中に在る淨瑠璃は、此鼻が覺えて居る。お聴きやれ』と、扇を拍つて。扱もますらが此の目の玉、ぐつと脱け出て、花人親王の、蜷川の御所の體、篤くと見届候へば、眞野の長者同然の、大銀遣ひに思はれて、金銀小袖を仕て貰ひ、深い男を振捨て登り詰めて揚句には、姫君を請

- (一) 表換 疊表を換へること。
- (二) 濱の納屋云云 おちぶれて哀れな身の上にならうの意。
- (三) 喉に詰まらうぞ 汝の口には叶ふまい。
- (四) 檢非違使むかし人民の非違を檢し告發捕縛などの事を取扱ふた役目。此處では明石の客を指さしていふた語。
- (五) 眞向 額の中央。

出すとて、料理獻立表換、眞最中と見て候。兩人が中へ某が毒氣を吹込み、男と女と不和に成し、同士戦の口舌を爲せば、姫君に見放され、端々の倉屋へ下り、後には濱の納屋の影、一本立ちにて候」と語りけるこそ不思議なれ。「何と此節に違ひがあるか」と言ひければ、「ヲ能い推量。追付けお島を請けて見せう。何んば急いても張合ふても、金で語る淨瑠璃は、些と喉に詰らうぞ。此りや是見よ」と、お島に確かと抱き付き、「何んと腹が立つか」と云へば、又扇の拍子を拍つて。あらず不思議や。ますらが行ふ魔法の形。天上に現はれ出で、異形は手を伸べ檢非違使が眞向を、破れて退けとはたと打つ。「ハテ拍子に掛つて危忽々」。『ヤア己擲つたぞよ。最う聞かぬ』と立上るを島は絶つ

- (一) しどもなや物にしまりのないこと。
- (二) 南無三寶 あゝ失敗した！
- (三) 一期 いのちがけに。
- (四) うつけた事 常識を失つたこと。
- (五) ほのくくと 明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞおもふ 柿本人麿。

て、「なう情なや。コレ私が詫事ぢや。エ、供の衆氣が利かぬ。船頭衆頼みます。舟に乗せて下さんせ」と、泣叫べば人々は、「折も悪し場も悪し。是非御勘忍々」と、無體に舟に抱き寄せ、櫂を早めて漕出す。猶船中より聲を揚げ、「銀を持たいで言はれざる、戀の意氣地の淨瑠璃だて、身が前では措いて呉れ。措け〜措けや」と、舟端敲き手を敲き、笑ふて舟は上りけり。市郎右衛門邊を見廻し、「ハア我ながらしどもなや。氣が違ふたか南無三寶。一期と思ふ女房を、我物顔の見憎さに、苛つは戀の癖なれども、思へば口惜し斯うせいでも、三夕では彼頬を、うつけた事と思ひやせん。島が心の恥かしや。氣遣かけし可愛や」と、見送る方も仄々と、あかしの客の乗る舟に、お島も隠れ島隠

れ、蜺川へと……

中之卷

- (一) 悪性者 たちの悪い人。
- (二) ぶうく 風の音の形容詞で、素知らぬ顔の意。
- (三) どぼしたて 女ぐるひ。
- (四) 棒鼻 荷を負ふてゐる功の先き。
- (五) 幾際か 幾度も。

焦れ行く。其の名は言はじ名を問へば、父は長柄の田地持ち。市郎右衛門が弟善次郎なれど悪性者。人の意見も馬の耳、餘所吹く風のぶうくにて、夜歩き日歩きとぼしたて、歸れば小宿で衣裳を仕換へ、稼ぐ體をば親兄に、これみやの前大根を、荷ふて家路に戻りける。斯かる所へ下男つかくと寄つて棒鼻取り、「申し善様。是れお見忘れなされたか。毛馬屋の七兵衛。エ、お前は譯の悪い。術に依つて、待てならば、待つまいものでも無けれ共、幾際か今日遣らう明日遣ら

- (一) 味にして きまづくして。
- (二) 紙花 祝儀を與へるに現金を包まず後の證據に紙だけ折つて渡すこと。

う。假初ながら五百目餘、五匁も埒明かず、それに昨夜も隣迄お出でなされ、此方へは音信なし。餘りな爲され様。今日は親御様へ直に申して、取つて来いと旦那が申付けました。斷りました』と入る所を引留めて『こりや聞えぬ。日頃の己ぢや知らぬかい。五百目や一貫目、今でも遣るは合點なれど、親父が手前を味にして、末永う出やうため、少の銀を延引した。其方が差配で二三日何卒頼む。ヤア何時やらの紙花も、思ひの外に遅はり、面目無い。是も拂と一度に遣ろ。今改めてこりやばつと打直すわ』と、捻ぢて出せし鼻紙の、しらごかしこそ笑止たれ。所へ籠の長介来り、『私が請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、合せて三百四十五匁六分。扱も強求まれます。其上お前

- (一) 仕着 他人に衣服を與へてさせること。
- (二) 常住師走 いつも年の暮。
- (三) 利喰 利に利が重なること。
- (四) 集禮代 拂ふべき約束の金。
- (五) 藤の棚 安堂寺橋通谷町筋を南に入つた所。
- (六) 九間云々 新町遊廓のかこかき。
- (七) けんどん そばの一種。

は當もない、花車や娘仲居に迄、仕着をして取らせうと、約束計りて参らぬ故。私が中でも取つたかと、毎日毎夜の使立。内は常住師走にて、何共迷惑仕る。今日は是非に請取ませう。夫れに成らずば親旦那へ訴訟申す」と云ふ所へ、五十餘の女房綿帽子にて顔包み、「編笠島の笹屋の嬬で御座んする。御人體とも覚えませぬ。我等が僅の商ひの元手も利喰の月をどる、泥鰯汁の集禮代。取切る間は何所迄も、附纏はる、藤の棚、谷町から」と云ふもあり、九間の駕夫が揚錢の、残りも今日はすつきりと、取つて九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の、或は餛飩、けんどんの、そばで聞くさへ笑止なり。善次郎持扱ひ、「尤掛は負ふたれ共、節季でも有る事か、吐きともない今日に限り、此様に

- (一) 片鼻云々 財産の半分は費消しての意。
- (二) 十三 梅田より西北に當る地名。
- (三) 柴島 梅田より東北に當る地名。

強求のは。ム、合點ぢや。兄市郎右衛門の啞氣者。天満屋のお島にぐわらりと片鼻打ち明けて、親父の機嫌散々にて、半勘當の身となつた。夫を聞いて我迄を、氣遣ふと見えたが、兄とは格別此んな銀。譯悪うする男で無い。親父に言ふなら言ふて見や。一文にも成るまいが。遅うて此月一杯に、濟まると言ふから嘘は無い。十三、柴島、北南の長柄で男と言はれたる、善次郎ぢやが何んと見た。僅二百目内外で、捨てる善次が名では無い。親父に言ふて此善次を、勘當させて腹いるか。但しは自然に銀取るか、勝手次第」と投出し、立派に言へば掛乞共、「如何なれ嘘はながら川砂にはよもや成るまいぞ」と、幾日〜の日切して、皆々宿所に歸りける、親介右衛門は六十餘、頭に積るお霜月。

(一) 講中 報恩 講中の事にて上方にては毎年十一月に報恩講を勤めるが例になつてゐる。
 (二) お茶所 寺内にありて本尊に茶を上る事を取扱ふ所。
 (三) 冥加錢 冥加を祈るために寄進した金。
 (四) 夫は興がる それは面白味があるとの事であるが此處では反對に「おきのどく」の意に用ゐられてゐる。

講中お茶所の冥加錢、残らず爰に持集り、お勤め過ぐれば表に出で、
 介右衛門言ひけるは、「何も講中有難いと思召せ。毎年のお霜月、懈怠もなう上ぐる事。自力では叶はず、御恩徳のお蔭なり。扱去年の通り此銀を、兄市郎右衛門に持たせて、京へ遣る筈なるが、在所で沙汰も聞かれつらん。新地狂ひに身體あげ、方々の借錢堤際の田地をも、七百目の質に入れ、四貫目の手形したと聞く。斯うした性に成るからは、一錢も持たされず。彼の弟めは一日でも居らねば年貢の埒明かず、身共が登りませう」と云へば弟は律義な顔作り、「太義ながら左様成され。ア、何れも。性の能い兄貴にて、年寄られて親父の苦勞で御座る」と言ひければ、「夫は興がる、今聞いた」と、頭を振り顔を蹙めけ

(一) 掛硯 かけごの製作になつてゐる硯箱で抽斗がついてゐる。

る。介右衛門重ねて、「白銀五百目二包。小判二十五兩一步合はせて四十切。改めて預つた」と數讀揃へ懐中より掛硯の鍵出し、抽斗開けて金銀取入れ、錠おろし鍵を袋に入れにける。時に表へ駕の者「頼みませう」と言ひければ、「どれい」と言ふて妹のお吉「何所からの使ひ」と言ふ。「私は蜷川天満屋のお島様より、市郎右衛門様へ急な使ひに参つたり。此文進せて下されませ」と高聲に言ひければ、「ア、爰な人、高い聲さツしやんな。兄様は昨夜から未だ歸られず。私が預り届ませう。」「お歸り次第頼みます」と、言捨て、こそ歸りけれ。介右衛門聞付けて、「お吉今のは何んぢや。」「イヤ何んでも御座りませぬ。」「何んでも無いとは、汝等迄が一つに成つて、親の目を抜き居るか」と、

- (一) あたしたたるい。ほんに眼に餘る程の柔弱さ。
- (二) 鼻紙袋。鼻紙を入れた袋。この袋から今日の「紙入」が工風された。
- (三) 何處も夫れどこもこのとほり。
- (四) 堅い輕口口がろく云へぬ洒落。
- (五) 箱口取つて箱ぐるみ取つて。

文捻ぢたくツて、『は何も。田地賣らせた女めが、市様參る、身よりとは、はて扱々あたしたたるい。皆の手前も面目ない。待て汝如何する』と、鼻紙袋へ文をも入れ。ぐるぐると捲きし小燃より、細きお鳥と一命の、終る端とぞ成りにける。講中も挨拶なく、『男の子は何處も夫れ、先づお暇申ませう。何んと太郎兵衛、若い衆が妓女〜』と言ふ程に、何うした事と思ふたが、田地を賣つて買ふ故に、夫て遊女を米と言ふ。今講釋が聞えた』と、堅い輕口言ふて歸れば、介右衛門も苦笑ひ、奥の間にこそ入りにけれ。善次郎は只一人、外の事は耳にも入らず、一心不亂に掛硯の、銀に性根を奪はれて、徐りと立ツて錠前を、押して見、引いて見、捻ぢて見て、奥を覗き、表を見、箱口取ツて持上ぐれ

- (一) まんまやう〜に。
- (二) 裸一步。紙にも包まず剥き出しのまゝの一步銀。一步は一兩の四分の一。
- (三) 動轉。うろたへ騒ぐ。
- (四) とぼん。茫然とした形。

ば、慄ふてどうど打落し、我と切えて飛上り、種々様々に盗み様、工夫するこそ恐しき。『ヤア忝い。鍵の入れたる鼻紙入、親仁が忘れ置かれたり』。引解き鍵取出し、まんまと明けて、鍵は元の紙入に、初の如く納め置き、掛硯の抽斗明け、二包の白銀を下懷へ押込んで、小判は頭巾にぐわらりと入れ、裸一步を手に握れば、奥より親の聲として、『善次〜』と呼懸くる。『あい』と言へ共此一步。置所に動轉して、口へ入れたり目へ入れたり、狼狽廻ツて釜の上なる御酒徳利へ、ざらざらと移し入れ、親の前へぞ出でにける。斯る所に市郎右衛門、内へ歸れど敷居高く、心措かるゝ家來迄、何れも野畑へ出でたれば、誰に首尾問ふ便もなく、上口にとぼんとして、寒さは寒し酒一つと、膳棚

(一) 荒神 龜の神、三寶荒神。
 (二) 推參な おしつけがましく出すぎた。

「捜せど酒もなし、『ヤア荒神の御酒がある。冷でも一つ戴いて、胸のもやもや晴さん』と、茶碗引寄せ注ぎければ、『此りや如何ぢや。酒の中より一步が湧く。寶の泉か有難い』と、皆打明けて、『是は夢か現か。三寶荒神の御利生か、死したる母の御授けか』と、嬉しいやら恐いやら、分別に能はね共、『久々て金氣に逢ふた。先目出度う一步の上汁吸ひませう』と、戴きくぐつと飲み、一步を紙に押包み、懐に納めける。黄金は人の身を富ます、寶なれ共此身には、命を刻む刃と成る、善惡こそは哀れなれ。所へ善次ひよつと出て、『ヤア兄者人お歸りか。推參な御意見なれ共、お身持が左様で無い。親父も機嫌さんくの上、峴川の何處からやら、悪い所へ文が来て、親父が見付け、夫れ其所な

(一) 南の御堂 難波別院といふ、東本願寺第十二世教如上人が慶長年中に建立した。大阪市東區南久太郎町にある。

鼻紙袋に入れ置かれた。我らは南の御堂へ、親父の使ひに參るなり。跡で首尾能うなされ』と言へば、市郎右衛門は肝潰し、是はと呆れ居る中に、善次は密と後手に、御酒徳利を隠し取り、表に出で、押戴き、一さんに駈出でし、心の内こそ可笑しけれ。斯く共知らず市郎右衛門、常々不和なる弟の、流石恩愛なればこそ、能くも知らせて有りけると、鼻紙袋の紐を解き、文を捜す所へ、親つかくくと出で後に立って、『夫れは何する市郎右衛門』。はつと驚き飛退り、差し俯伏いてぞ居たりける。介右衛門、聲を上げ、『汝は天魔が魅れたか。佛罰が當つたか。餘の悪性は若い者、有らう事共言はれうが、あれ掛硯の口明いたり。鍵を入れたる鼻紙袋、明けて我に見付けられ、仰天するは盗人な。身

(一) 身の油 自分身の油汗をしぼつての略。
 (二) 御開山 東西兩本願寺の開祖親鸞聖人のこととを指す。
 (三) 大口小口動いする 世間の人々の噂に上るやうになる。

が銀ならば親の慈悲、沙汰なしにもして遣らう。身の油にて講中が、御開山へ奉る、お茶所の銀ちや盗人め。一文一字違ふても、汝が生けて置かれうか。我等一人は縁者の證據。夫々講中組中』と、呼はる聲に向隣、一在所が駈集り、とゞまの詮議ぞ是非もなき。介右衛門大きに急ぎ、『サア何れもの目の前で、掛硯を開かん』と抽斗見れ共金銀は、一錢とても無かりけり。介右衛門地團太踏み、涙を流いて、『エ、口惜しや。何代か、此家に小言の有つた例もなし。歳六十に及んで、一在所と言ひ講中の、大口小口動かする、汝計りが恥と思ふか。盗人を捕らへて見れば我子なり。此手間で是程の善い事を仕た成らば、親の身では如何程の、自慢で有らうと思ふぞ、やれ成人の子を持てば、

(一) 地空を叩いてこれ以上にくやしいことがない意

親の心安めだと、人も言ふに汝には、寝た間も心休まらず、揚句に斯かる大事を仕出す、内て斯うした心からは、外で何かな仕置きつらん。誰に似て此根性、憎いが餘つて不憫なり。不憫の餘りの憎さや』と、地空を叩いて無念泣き。實に尤に憐なり。市郎右衛門顔を擡げ、『鼻紙入は明けたれ共、金銀には手を差さず、盗人は外に有らん。心を静めて御穿鑿』と、泣くく言へば飛掛り、喰付きて『エ、腹の立つ。盗をする子を持つて、何んと心が静められうぞ。親の心を知らぬか』と、懷中捜せば以前の壹歩、『是れを見よ』と打付けて、大聲上げてわツと泣き、『假令千兩萬兩でも、銀惜しいとは思はぬが、廢る汝が名が惜しい。近頃面目無けれ共、人々も聞いてたべ。此奴はとづくに殺す

(一) 四十二の二つ子 男親が四十一歳の時に生れた子が翌年父は四十二、子は二歳となる。これを四十二の二つ子といひ、棄てて他人に拾はせ育て、貰ふ慣習がある。四十二は四二で「死に」に通じ、四二と二は四四で「死」に「死」を重ねることになるので忌むのである。

(二) 木子 血をわけた實子。

奴なれ共、今ならでは申さぬが、元我々が實子でなし、大阪の去る人の、四十二の二つ子にて、産屋より貰ひ守育て、後に弟が出来たれ共、夫には替へず可愛さに、育てるに従ひ性悪く、勘當せんと思ひし事、五度三度には限らね共、若や汝が寝心に、養子と言ふ事知るならば、眞の親なら斯う有るまいと、我々夫婦を疎みやせんと、義理もあり不憫もあり、殊に母が最期にも、弟より彼の兄を、繼母に掛けて呉るなど、言ふて死んだは小耳にも、定めて覺えて居らうぞや。仁義も慾も身の上も、本子には忘るゝに、其本子より汝をば、大切にせし甲斐も無く、湯を沸して水入らずの、親の内て盗をする、是は如何なる性根ぞ』と、聲を上げて泣きけれ共、子は覺えなき事ながら、言譯も無

(一) したら 仕末。ていたらく。

きしだらとなる。親も道理子も道理。心に籠るも哀さの、兩人の涙堰きあへず、『兎角言ふも恥の恥。勘當ぢや。出てうせう。親子名残の形見の杖。身に覺えよ』と押取ツて、散々に打ちければ、杖は中よりふツつと折るゝ。飛掛ツて踏む所を、妹 下人縫付き、泣くゝ奥へぞ入りにける。市郎右衛門涙をばらゝと流し、『何にも申す事は無し。親ならぬ親、子ならぬ子、眞實の親子にも勝つたる御恩徳、何時か報じ申すべき。疾くにも斯様に承はらば、如何様共孝行の、盡くし様も有るべきに、口惜しさよ後悔さよ。産みの親は見ず知らず、養親には不孝を爲し、此市郎右衛門めは親の罰が當ツたり。切て心の念願にて、死して再度親子と生まれ、今の御恩を報じたき其印、此杖の片

(一) 今生 この世。現代。

折を未來の形見』と押戴き、『如何に講中組中も今生の暇乞ひ。頼み申すは親の事。孝行盡せと妹に傳へてたべ。死するとあらば御回向も、頼み申す』と言置も、涙ながら餘所ながら、見置きながらの橋柱。朽ち行く身こそ……

(一) 百夜通ひ 深草少將が小野小町を慕ふて通ふた故事。
(二) 歌人の評判 云々 古今集の序文に「文屋康秀の歌は詞たぐみにて其さま身におはず、いはば商人のよき衣きたるが如し」とあるを引きて作りたるもの。

下之卷

哀なり。逢ひ初めし一夜を戀の水上に、三夜四夜五夜十夜百夜、通ひ車の蜷川。變る瀬枕沈む淵。思ひ二つの中町や。更けて苦しむ待宵に明くる詫しき別れ路の、憂きをつぎ木の梅田橋。うめてさませと色茶屋の、色の出花の里ぞとは、醒めぬ花香を汲みて知れ。實にや士農工商の、品數々の其中に、情で賣れば情で買ふ、歌人の評判付け置きし能き衣着たる商人も、誠を守る天満屋の、亭主は外より歸りしが、『何んと女子共は仕舞ふたか。島は今宵は如何した』と言へば、『島様は今宵は長柄の市様とて、馴染のお客が久振りて、近江屋迄見えまして、

(一) とつかはあわてい。うろたへて。
 (二) 勘當とも分銅とも 勘當の音便に似通はせて分銅の二字をつけたもの。

夫で島様も近江屋へ、送りしました」と言ひければ、「扱こそ〜。左様有らう。今宵丸屋の謠講に往つたれば、町衆の話に、長柄の市郎右衛門と云ふ人、報恩講の銀を盗み、親の勘當受けて、白晝に在所を追拂はれた。是も此方の島ゆゑじやと、女夫池で聞いて来て、知らぬかと言はる、故、とつかはして戻つた。前のお初に懲り果てた、家名の出るも迷惑。客を倒すが見目では無い。商せいでも大事ない。夫早う呼びに遣れ」と、喚き散らせば女房も、「エ、皆も氣が付かぬ。此方に言はる、事かいの。又淨瑠璃に乗しやんなや。早う連れて戻りやいの」と、女の心の忙々し。譜代の下女は門より入り、「市様はお馴染故、遣るは私が遣りましたが、勘當共分銅共、知つたら何の遣りませう。た

(一) 兄に負せて兄に罪をきせて。
 (二) びらくら女狂ひから身に負ふた借財の意味?
 (三) なま 生酔のこと。
 (四) 手が悪い その仕打がよろしくない。

つた今も近江屋へ往て見たれば、島様は強う酔ふて居さんして、何を言ふても譯が無い。其な事なら戻しませう、お初様の彼の夜さり、二階の梯子を踏外し、己が胴骨踏まんした、形見の痛さが漸々と、此頃止んだに勿體なや、又踏まれては成らぬぞ」と、駈出してこそ走りけれ。斯くて弟の善次郎は兄に負せて銀盗み、所々のびらくらを仕舞はんと、此所へ來りしが、お島は酒に酔ひ崩折れ、ひよろり〜となまになり、近江屋出て、濱筋や、今宵一つに三途川、越えんと思ひ詰めたれば、心にはたと戸を立つる、風呂屋の前にて善次に逢ふ。ひらりと躲すをちらりと見て、「コレ善次様〜。手が悪い」と、よろ〜と縋り付いて、「此方さんは聞こえやせんぞえ。前は再々御座して、

(一) けなるや羨ましい。

何が恐うて逃げさんす。コレ兄嫁の島ぢやいな。唯た今迄近江屋で、兄さんと逢ふて居て、今日の様子を聞きやした。大事の己が男が、勘當請けて御座んしたりや。胸が痛うて些との酒で舌が廻らぬ。此方さん弟の身で、けなるや機嫌が能さうな。禮言ふ事がある、御座んせ」と、胸倉取ツて引いて行く。善次は「何れも頼みます。頼みまする」と仰向に反り、引摺らるれば下女下男「是は島様何んぞいの。サア内ぢや這入らんせ」と無理無體に押入るれば、上口にひよろ／＼と、片身を頓と横に投げ、「水給や」とて伏しにける。夜こそ更くれど一町の、行燈仕舞へば天満屋の、締めたる門口夜闇に、善次は島が心根の、恐ろしければ格子の影、身を引側め立聞す。市郎右衛門は近江

(一) 不躰 無作法。

屋の、人目にせかれ云々と、死際の契約せず、便もがなと門に立ち、弟なり共知らざれば、弟は兄があるとも知らず、傾く月に東向き暗き格子を隔てにて、内の様をぞ聞にける。亭主夫婦是を見て、「島はいかう酔ふたさうな。これ往て休みや、お島く」と茶を汲んで、「一つ呑や」と言ひければ、「あい／＼。是りや 忝い」と戴きて、「眞に誠に御主たる身が勿體ない。大事に掛けて下さんす。是を思へば勤めの身が、心中等で死ぬるのは、お主へ對して不躰、損を掛けるは身の罪科。去りながら死だ者が生返り、其の入譯を言ふにこそ。命に替へる者は無い。夫を棄て、身を果すは、言ふに言はれぬ詰つた事。憎まう者でも御座んせぬ。斯う言ふて、私が心中する氣は無けれ共、爰に

- (一) 胸慾 餘りに無情な。
- (二) 生身は死身 呼吸のかよふてゐる身體もいつまた死ぬかもしれぬ身體。
- (三) 泣上戸 泣く泣く人。

も前の初様に、手慾の事も有る故に、是りや前書の話ぞや。私が馴染の市様の勘當は、弟御の無實の難を身に被ぎ、所の住居もならぬとよ。是は何んたる胸慾ぞや。私等が今の此勤め。伊達にも華美にも、身の爲でも、一日片時なる事か。親兄弟の可愛さ故、面白からぬ勤めをも、辛いと一度言ひ遣らぬは、親兄に苦を掛けまい爲、斯程大事の親里の、貧苦を助けしお主なれば、御恩は更に忘れぬ共、生身は死身。殊に又此頃酒に當てらる。若し頓死でも致したば、下された茶が末期の水」と、管巻く體に紛らかし、わつと計に堪え兼ね、しやくり上げたる泣上戸と、人目に見せし下心。市郎右衛門は忍び泣、弟は身の悪願みて、恥ぢて悲しむ悔み泣き。心は三つに替はれ共、同

- (一) 箱梯子 段梯子の横側面に抽斗の装置のあるのをいふ。
- (二) 有明 終夜火をともして置く行燈。
- (三) 小夜格子 娼家の二階の窓の竹格子。
- (四) 柄付の鏡 柄のついてある鏡。むかしの婦人用具。

じ涙に曇る月、時雨の暗夜の本意なさよ。人影見てや町内の、犬吠え渡れば兄弟は、見付けられては悪かりなんと、西東へぞ逃去りける。亭主夫婦は氣も付かず、「管を巻かずと早う寝や。皆々仕舞へ」と言ひければ、「あい」と答へて箱梯子。上りかゝつて「旦那様、内儀様。皆なさらばや〜」と言捨て二階に上りける。下女は見上げて「ハテ小氣味の悪い聲付きぢや。長兵衛門も能う締めや。有明の消えぬ様に油も澤山注いでたも。消えても此方は火は打たぬ。己には火打が禁物ぢや、打音聞いてもぞツとする」と、呟きてこそ臥しにけれ。稍静まれる小夜格子、市郎右衛門は立歸り、軒の下にて咳けば、お島は夫ぞと二階の窓。覗けど我が姿に見えじ、聲を立つべき様も無く、柄付の鏡

(一) 味氣なき
張りあひのない
こと。
(二) 發起 スツ
カリと心をあら
ためて。
(三) 定まる業
斯うなるべく定
まつた運命。

差出し、星影映して閃かし、爰に有りとぞ知らせける。夫も心得扇を
抜き、聲立てられねば金物の、光に物を言はせては、招き合ひ、
我と我身を抱締めて、齒を喰詰めて歎きける。深き思ひぞ味氣なき。
弟の善次郎、鳥が詞に發起して、悪心を翻し、兄の命を助けんと、
此處彼處と尋ね歩き、元の格子に走り付き、兄は人ぞと立隠るれば、
善次郎門を叩き、『長柄の市郎右衛門は、是には居られ申さぬか。近江
屋にて尋ねれば、早や歸られたと申さるゝ、御存じ無いか』と呼ばは
りける。内よりは『喧しい夜更け廻つて、そんな人は知らぬ』と言へ
ば、『南無三寶』と走り行く。斯と心を語りなば、死なで止みなん二つ
の命。隔て疑ふ因果と因果、定まる業ぞ力なき。『彼奴追駈けて討ッ

(一) 亂れ焼 刀
の焼刃の紋がう
れりみだれてお
ることないふ。

て捨てん。否々見苦し。最期の邪魔』と心を鎮め小聲に成り、『サア夜
明も近づく、人立あり。一所と思へど詮方なし、我は在所の堤にて、
最期の所は替る共、連立つ道は唯一筋。今より珠数を繰初めて、一萬
遍に終る時、夫が互の合圖ぞや。追付け待つ』と言ひければ、『合點
しました。去りながら、同じ枕に死に度いなあ。心は付いて往きませ
う』。『オ、我とても其二階、顔を並べて死に度いなあ。心は跡に残る
ぞ』と、憧れ出づる玉の緒の、互の目には見えね共、残し置くのと連
行くと、兩刃に死する剃刀の、一刀の亂れ焼。亂れ心は……

(一)陽炎 春の長閑な日、野に立ち昇る蒸發氣をいふ。
 (二)百八 珠數の珠の數。
 (三)夜這星 流星。
 (四)連理 木の枝が他の木の枝と接合したことで、男女間の情愛の深いことを形容した語。

知死期の道行

死神の導く道や陽炎の、果敢なき蟲もたま／＼は、朝の露に生残る。
 夫よりも猶仇競べ。是を限りと百八の、數取る度に繰盡す、命二つを
 珠數二連。是が冥途の迎ひぞや。見送る軒と見返る野邊と、中に飛交
 ふ夜這星。行いて歸らば言傳てん。出て、返らぬ魂の、憧れ添ふと
 は知らね共傍に夫の有る心。夫はお島を連立ちて、歩む心のともすれ
 ば、目にちろ／＼と幻の、此は其人か實かと、抱付けばあだし野や
 風蓬々たる閨の戸に、『どれ市様は』『お島は』と、尋ぬる袖に降る涙、
 夜半の時雨と成りにけり。是こそ曾根崎天神の、松と櫻欄との連理の

(一)すぐせ 佛敎の語にて我が前生。まへのよ。
 (二)三途の川 佛敎の語にて冥土の入口にある川。三途とは地獄道、畜生道、餓鬼道。

森。かき集めたる言の葉の、餘所に聞きしも今は又、餘所にあらしの
 身にぞ染む。お島も同じ我庵は、お初徳兵衛の其曉の、夢も破れて
 未だ間も無いに、心中すぐせの報の業か。夫のみ成らず親方や、親の
 苦勞と思ひは知れど、男死なせて見て居られうか。女房先立て存生あ
 らば、夫りや犬猫も同じ事。同じ中にも鹿と成り、鴛鴦と生れて女夫
 池。いける間も無く身を果し、猶や藻屑に埋まんと、又一向の憂涙、
 落ちて三途の川と成る、男心も暮れ果て、西か東か何處ぞと、月に
 向へど我影の、映らざるこそ不思議なれ。女も向ふ灯火の、壁にも窓
 にも障子にも、我影見えぬ怪しさよ。ア、味氣なや果敢なやな。實や
 人の物語りに、死する時節は人魂飛んで、其身の影の無きと聞く。『嗚